

陶興房東
大寺領周
防富田保
地頭職預
狀

地頭得分
五石分ナ
進△ベシ

千水風損
等アルモ
得分ノ内
ナ用フベ
カラズ
年貢運送

永正六年四月十三日

預申東大寺領周防國富田保地頭職事

右當保者、東大寺修造要脚也、依嚴密御沙汰、所一圓遵行也、而就歎申所應給也、仍可辨濟年貢條之事、

一雖爲當保土貢拔群之地、近年令減少間、每年地頭得分米伍石分、自當年無未進懈怠、可致其沙汰事、

一干水風損并臨時課役、萬雜公事、軍役等雖出來、以此得分之内、不可申立用之、但天下平均大損亡時者、可行遂檢見事、

一年貢運送時者、十一二兩月中、國廳納所可送渡之事、

以前條々如期、若此分雖爲一事、有違變者、一同被召上當保下地之時、不可申一言之子細、若致違亂煩者、被申公方、於自餘所帶之地、可被召放、若此條僞申者、奉始梵天帝釋、四天王、日本國中大小神祇、殊者大佛八幡并當家氏神等御罰可蒙、仍爲後日、預申狀如件、

永正六年九月五日

中務少輔興房判トアリ

○東大寺炎上ノコト、五年三月十八日ノ條ニ、廣橋守光、造東大寺長官ニ補セラル、コト、本年五月十五日ノ條ニ見ユ、

寺領ノコ
ト決ス

落著ス

大内義興、大和東大寺領周防國衙ヲ同寺ニ還付ス、

〔實隆公記〕四十 四月十一日、壬申晴、略中、南都信花坊來、周防國衙事、大内

申狀以外子細等在之迷惑之儀談之、委細難錄筆端矣、

十三日、甲戌晴、略中、抑周防國衙還補事、今日大内書狀珍重也、

十四日、乙亥晴、略中、信花坊彼國衙還補祝著之由申送之、

五月十六日、丁未、天晴、略中、信花坊來臨、周防國衙副狀問田、今日書之云々、珍重、

〔實隆公記〕四十 八月四日、甲子、陰、略中、扇一本遣信花坊、今朝出大内許對

面云々、南都寺領事、入眼之分也、珍重、

十四日、甲戌、晴、自晚雨、八月節、略中、信花坊來、周防國衙給主等違亂事有申旨、

以彼所望遣書狀於在重朝臣許、昨日可申聞左京大夫之由有報、不可說事也、

閏八月廿六日、乙卯、晴、略中、問田大藏少輔送使者、周防國衙事、悉下知珍重、

廿七日、丙辰、陰、自晚雨降、略中、信花坊來臨、周防國衙事、落居云々、

○東大寺、義興ノ周防國衙ヲ橫領スルニ依リ、之ヲ訴フルコト、五年十月二十三日ノ條ニ、又義興、周防榎野莊ヲ同寺ニ還付スルコト、本年

永正六年四月十三日

九月十四日ノ條ニ見ユ

十四日、乙亥義尹、猿樂ヲ興行ス、

〔實隆公記〕

四十

四月十三日、甲戌、晴、

略

阿野相公來、明日猿樂公條卿可

見物之由、武命之由被申之、

觀世
大内義興
沙汰ス

十四日、乙亥、晴、

略

式部大輔來、室町殿今日猿樂、觀世左京大夫被沙汰云々、

參會ノ人
々々

爲見物可參上之由、宰相中將被仰之間、

略

一往雖故障申、重而仰之間、松木實綱構參、中御

猿樂十六
番

門新大納言、甘露寺中納言、冷泉宰相、宰相中將、白川雅業朝臣、伊長等參入云々、日

野侍

從御請伴云々也、其外飛鳥井、阿野、烏丸、永家等參入、在此方中云々、猿樂

十六番、事了退出、于時子刻計也、

十五日、丙子、晴、早朝、自室町殿有御使、阿昨日宰相中將參入、喜思食者也、御

座籍等聊爾、又於御前今一度可賜御酒之處、忿々各青面歎、御遺恨之由被仰

之、過分上意、畏存由申入了、則又遣書狀於阿野、謝申了、

五月廿七日、戊午、晴、今日於室町殿、以前猿樂時、應召之衆、可賜御盃、可參候之

由、昨日阿野相觸之、仍相公羽林參入、白川松木伯少將等同道、午時參入、夕陽程退

出、丁寧御沙汰、尤所畏申也、武家外様衆、番衆等、同應召云々、

參會ノ人
々々

十六日、丑義尹、藤花ヲ賞シ、宴ヲ張ル、

〔實隆公記〕

四十

四月十六日、丁丑、霽、

略

武家今夜御下姿、於藤下有小盃

酌云々、

十九日、庚辰伊豫守護河野通宣、天德寺ヲシテ、同國吉原郷大谷作職内ノ地

ヲ進止セシム、

〔天德寺文書〕

○伊豫

吉原郷大谷作職之内、屋敷五段之事、寺家可有進退之狀如件、

永正六 四月十九日

通宣(花押)

天德寺

二十二日、癸未邦高親王等、物ヲ獻ゼラル、

〔實隆公記〕

四十

四月廿二日、癸未、雨時々降、

略

伏見殿萬松軒等、被進上

御樽云々、阿野宰相中將依召參候、數盃酌、及晚退出、

幕府、京都米場座以外ニ於テ、諸口駄米ノ估價ヲ定メテ之ヲ賣リ、マタ別

ニ市ヲ立ツルヲ禁ズ、

〔古文書〕

第三集

永正六年四月二十四日 二十八日

七二六

洛中諸口馱米事背先規、近日直付置小賣之在所云々、太不可然、早如先々可付場、次於他所立市之旨、其聞在之、爲新儀之條、可停止之狀如件、

永正六

貞運

信祐

四月廿二日

米場座中古文書集

二十四日、酉賀茂祭御内祭、

〔實隆公記〕

四十

四月廿三日、甲申、晴、

中賀茂康久送葵桂、播磨局傳達之

謝了、

廿四日、乙酉、天晴、小浴、入夜夕立、則晴、

中今日賀茂祭御内祭、人々參候云々、

相公羽林參上、

二十八日、丑幕府、書ヲ琉球ニ遺ラントシテ、之ヲ三條西實隆ニ詢ル、

〔實隆公記〕

四十

四月廿八日、己丑、霽、及晚陰雨、

中雲龍院來臨、阿野相公

來臨、琉球國事、書狀之禮等被談之、

廿九日、庚寅、雨降、及晚晴、又入夜降、

阿野相公來臨、琉球國書狀事、大略爲疏、又將軍御書爲假名、其故者最初通事

賀茂康久
葵桂ヲ獻ス

國書ハ疏
内書ハ假
名文

最初ノ通
事ハ女房
奉書

衆徒武家
奉加ノ勅
詔ヲ請フ

勸進聖十
穀實隆ヲ
訪フ

義尹益香
合ヲ奉加
ス

女房也、仍任其例如此云々、

三十日、卯幕府、大和多武峯勸進奉加ニ、物ヲ寄ス、

〔實隆公記〕

四十

四月十三日、甲戌、晴、

中多武峯勸進武家御奉賀事、爲勅

定可被仰出之由、寺家所望、執柄被申之間、其旨伺申入了、

廿五日、丙戌、晴、晚雷鳴、陰雲不及雨、多武峯勸進十穀聖來、以書狀申遣阿野許

了、

卅日、辛卯、晴、多武峯武家御奉賀、御益、香合、自阿野送之、則遣勸進聖十穀、以愚

狀申遣北政所方了、

五月一日、壬辰、天晴、早朝行水念誦如例、多武峯御奉加事、畏申之趣、遣書狀於

季治朝臣許、同申入内裏了、

○僧永胤ヲシテ、多武峯ノ再興造營ヲ計ラシメラル、コト、五年三月

十一日ノ條ニ見ユ、

是月、皇大神宮禰宜荒木田守則等、同宮假殿造營ノコトヲ請フ、

〔内宮禰宜荒木田守晨引付〕上

皇太神宮神主

永正六年四月三十日 是月

七二七

解狀

永正六年四月是月

七二八

注進可早被經次第御沙汰有造進御假殿子細事、

抑天照太神者君臣上下之元祖、天下第一之宗廟、而異于諸社、先當宮可被遂行御遷宮者也、爰今之神居御殿者、前正殿依損失祭主宮司禰宜等申合、暫時之間、可奉鎮神躰之條、率爾之營作、以外之處、剩經多年星朽、霜損破壞、被侵雨露給神宮爲躰、前代未聞、難堪、尤此時也、正遷宮之事者、大營而有日時逗留歟、急可有造進假殿矣、猶以御沙汰若令停滯者、傾倚之神殿令顛倒哉、任神祈之旨、被遂其節奉鎮御躰於本式者、天下泰平政、何事過之乎、仍注進如件、以解、

永正六年四月日

大内人

禰宜正五位下荒木田神主守則 十八署也、

件解狀、大中臣廣長依所望成之、(高國)細川殿へ進上云々、

細川高國
ニ遺ス

皇太神宮神主

注進可早被經次第御沙汰、急當宮遷御之節間事、

右件御遷宮依遲引、正殿以外朽損之間、祭主神宮申合、有造進儲殿暫時之間、奉鎮御躰、奉待正遷宮之處、不及御沙汰、而經數多年序之條、神殿顛倒之怖畏、

不期明日、萬一令頽落者、天下之不吉表事不可過之、存後勸而致注進者也、被停止諸事御沙汰、可被奉急遷御之節者哉、次諸殿舍悉令損失訖、爰忌火屋者、雖御膳調進勤行所、退轉之間、神宮而如形令造進、奉備御供矣、次調御倉致造進、奉納神物矣、次一殿令造、遂行連綿神事、致御祈禱者也、彼營作等、雖用物無御下行、如此之子細、忠勤何事如之乎、任神訴之旨、早被仰付祭主伊忠、奉鎮神躰於本式、彌天下泰平御祈、爲抽忠節、注進言上如件、以解、

永正六年五月日

大内人

禰宜正五位下荒木田神主守則

十八

○内宮引付
異事ナシ

永正六年四月是月

七二九

永正六年五月一日 三日

五月 壬辰 朔

一日、壬辰 御祝

〔實隆公記〕 四十

依當番也、御祝等如例歟、

三日、甲午、若宮、和漢聯句御會ヲ行ハセラル、

〔實隆公記〕 四十

方、有和漢一折云々、

幕府、山城勸修寺及ビ東寺ヲシテ、天變地妖ヲ祈禳セシム、

〔勸修寺文書〕 〇山城

天變地妖御祈禳事、近日專可令抽精誠給之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正六年五月三日

左衛門尉(花押)

勸修寺宮門跡雜掌

〔東寺百合文書〕 〇山城 十四

〔東寺年預御房〕

對馬守英致

天變地妖御祈禳事、近日專可被抽精誠之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正六年五月三日

對馬守(花押)

美濃守(花押)

東寺年預御房

〇東寺ヲシテ、變異ヲ祈禳セシメ、尋デ、又皇大神宮ヲシテ、祈禳セシメラル、コト、本月二十六日ノ條ニ見ユ、

幕府、上杉顯定、同憲房ヲシテ、信濃伴野六郎ト大井太郎トノ爭ヲ和解セシム、

〔御内書案〕 乾

伴野六郎與大井太郎確執之由、被及聞食候、不可然候、閣是非、急度令和睦候様相調者、可爲神妙候、猶申含諫江和尚候也、

五月三日

上杉四郎入道とのへ

同 五郎とのへ

五日、申、端午節、

永正六年五月五日

三條西公
條參仕

三條西公
條參内
粽ヲ賜フ

永正六年五月七日

七三二

〔實隆公記〕 四十 五月五日丙申晴、略中相公羽林御祝參入、御料所粽五十拜領、

賀茂競馬、喧嘩アリ、

〔實隆公記〕 四十 五月一日壬辰天晴、略中相公羽林、西室等、山科同道、向賀

茂競馬、足ソロへ見物、及晩歸來、

五日丙申晴、略中當年印地停止、世間靜謐、可謂善政矣、抑賀茂競馬、（大内義興）左京大夫

見物、有狼藉人、忽殺害者三四人云々、諸人仰天馳走、但無殊事云々、

〔拾芥記〕 中 五月五日、賀茂競馬、大内見物、有喧嘩、

七日、（松本）紫野今宮祭、

〔實隆公記〕 四十 五月七日戊戌天晴、今宮祭禮也、仍別而念誦、相公羽林當

番相博宗藤參、

貞敦親王、和漢聯句會ヲ行ハセラル、

〔實隆公記〕 四十 五月七日戊戌天晴、（貞敦親王）中書王今日和漢御會、可參之由、

一昨日依仰云々、及晩退出、酌元龜云々、（等貴）万松軒等人數多々云々、

○コノ後、貞敦親王、和漢聯句會ヲ行ハセラル、コト、便宜左ニ合敘ス、

八月十六日

閏八月十五日

〔實隆公記〕 四十 八月十六日丙子陰、（中）相公羽林參伏見殿、中書王聯句御會御張行云々、（略）中竹園御會及深更之間、（本註）李部、柱下兩人寄宿此亭、

閏八月十五日甲辰天晴、九月節、（略）中於竹園有御聯句、相公參入、携一桶了、

九日、（庚子）幕府、訴訟ノ際、召符ヲ遣スコト等ノ條規ヲ定ム、

〔建武式目追加〕

條々 永正六 五九

一 召符事

有訴人申旨者、雖不伺申之、任法可遣召文、但依時宜可得上意矣、

一口入事

權貴并女姓、禪律僧口入、任先例可被停止矣、

一 被置所務於中事

任先例可被停止焉、

一 雖被成御下知、不能承引、剩致彼在所訴訟事、可爲違背之咎矣、

一 付置訴人、申狀以下屬別人致訴訟事、

任法可被仰裁許焉、

永正六年五月九日

七三三

訴訟ノ際
召符ヲ遣
權勢家女
子僧侶等
ノ口入ヲ
停止ス
所務ヲ中
ニ置クヲ
停止ス
下知ニ反
シ訴訟ス
ベカラズ

別人ノ返
事ヲ停止
ス

漏脱停止

永正六年五月九日

一被尋下諸人間事

以其奉行人可能御返事之處以別人申上事爲申紛歟可有御禁制矣

一漏脱事

任度々制法堅可被停止矣

已上

幕府、山城寶鏡寺ヲシテ、同所領美作小吉野莊半分ノ地ヲ安堵セシム、

〔寶鏡寺文書〕

〇山城

當寺御領美作國小吉野庄半分事任御當知行之旨可被全雜掌領知之由所被仰下也仍執達如件

永正六年五月九日

(松田英致)
對馬守(花押)

(飯尾之秀)
下野守(花押)

南御所雜掌

浦上景泰
請文
年貢二百
貫文

南御所様御料所美作國小吉野庄御代官職之事從己之已歲至癸酉年五ヶ年之間預り申候於御年貢者毎年貳百貫文運上可申候但請切申上者雖爲

旱水風損國物忿無相違年中之皆濟可申候萬一不法懈怠儀在之者雖爲約年之中何時可被召放候其時不可及一言子細者也仍爲後日請文之狀如件

永正六年己六月十四日

(松田英致)
浦上六郎左衛門尉
景泰(花押)

南御所様

御奉行所

十二日、幕府、本郷泰茂ヲシテ、越中米田保地頭職ヲ安堵セシム、

〔書上古文書〕

本郷大和守泰行家傳古書奉書之部

越中國米田保地頭職事當知行云々彌可被全領知由所被仰下也仍執達如件

永正六年五月十二日

散位判
(松田英致)
對馬判

本郷新三郎殿

十五日、參議左大辨廣橋守光ヲ、造東大寺長官ト爲ス、

〔公卿補任〕

四十

參議正三位

(廣橋)

藤守光

三十九

五月十五日補造東大寺長官宣

下、〇辨官補任
異事ナシ

永正六年五月十二日 十五日

七三五

七三四

永正六年五月十六日

〔宗綱公記〕

宣下

永正六年五月十五日

宣旨

左大辨（廣橋光光）藤原朝臣

宜爲造東大寺長官、

藏人頭左近衛權中將（中山）藤原康親 奉

宣旨

口宣二枚獻上之、早可令下知給之狀如件、

五月十五日

左中將康親 奉

進上 中御門新大納言殿

十六日、丁未貞敦親王、曼殊院良鎮ヲシテ、續千載和歌集ヲ書寫セシメラル、尋テ、之ヲ三條西實隆ニ賜フ、

〔實隆公記〕

四十

五月十六日、丁未天晴、○中續千載集上下書寫事、申竹内

殿（曼殊院）中書王御傳達也、打曇五枚獻中書王、

六月廿二日、癸未陰雨、○中續千載集新寫、竹内門跡送給之、中書王御傳達也、早速奇妙、自愛此事也、

實隆書寫
ノコトヲ
良鎮ニ傳
言ス
打曇

十七日、申和漢聯句御會、

〔實隆公記〕

四十

五月十七日、戊申晴、○中可有御聯句云々、相公候御所、下

官持病無術之間、早出了、今日自曇花院殿雖有召、依所勞不參、

十九日、戌從四位上世尊寺行季ヲ、左近衛權中將二任ズ、

〔歷名土代〕

四十

從四位上藤行季 （世尊寺） 同六五十九、右中將、

〔實隆公記〕

四十

五月廿日、辛亥晴、○中招世尊寺、近日中將轉任

二十六日、丁未東寺ヲシテ、變異ヲ祈禳セシム、尋テ、又皇大神宮ヲシテ、祈禳セシメラル、

〔東寺百合文書〕

○山城

四之百五十五

謹上 東寺長者僧正御房

左少辨伊長

〔同書〕

永正六巴

就變異（星）御慎不輕、別而抽丹誠可令祈禱給之由、天氣所候也、仍上啓如件、

五月廿六日

左少辨伊長

謹上 東寺長者僧正御房

追上啓

永正六年五月十七日 十九日 二十六日

御聯句七
十句

繪旨
星月ヲ侵
ス

永正六年五月二十六日

東寺同御門弟中御下知事可令存知給候也。

七三八

〔內宮禰宜荒木田守晨引付〕上

就變異星侵月御慎不輕別而抽丹誠可祈禱旨被下知神宮之狀如件

五月卅日

(正親町實胤)
右中將判

(藤波伊忠)
祭主三位殿

御教書

下知狀

變異星侵月御祈事可被抽丹誠之由御教書案下之此旨可被下知之狀如件

五月卅日

(藤波伊忠)
神祇權大副判

(荒木田守則)
內一禰宜殿

請文

皇太神宮神主

注進可早被經次第上奏變異御祈禱於神前致精誠間事

右得去月卅日祭主神祇權大副伊忠下知備同月同日御教書備就變異星侵月御慎不輕別而抽丹誠可令祈禱旨云々者謹所請如件然則任被仰下次第施行之趣禰宜等一同奉勵祈禱丹誠者也仍請文言上如件以解

永正六年六月 日

大內人

禰宜正五位下荒木田神主守則○內宮引付

〔度會常有家引付〕

豐受太神宮神主

依御教書注進變異御祈抽丹誠間之事

右得去月卅日御教書竝祭主下知備就變異星侵月御慎不輕別而抽丹誠可令祈禱由之事謹所請如件者任被仰下之旨禰宜等一同奉抽精祈者也仍注進如件以解

永正六年六月十二日

大內人正六位上度會神主定吉上

禰宜正五位下度會神主

禰宜從五位上度會神主

永正六年五月二十六日

七三九

永正六年五月二十六日

七四〇

○幕府、東寺及ビ勸修寺ヲシテ、天變地妖ヲ祈禳セシムルコト、本月三日ノ條ニ見ユ、又コノ後、皇大神宮ニ變異ヲ祈禳セシメラル、コト、便宜左ニ合敘ス、

〔內宮禰宜荒木田守晨引付〕^上

變異御祈事、一七ケ日、可抽精誠之由、可被下知神宮之狀如件、

十一月十一日

右中將判

祭主三位殿

下知狀

之由、御教書如此、仍案文下之、此旨可致告知二宮之狀如件、

十一月十三日

神祇權大副判

大司宿館

伊忠

十一月御教書

變異御祈事、御教書竝祭主下知如此、仍獻覽之、可令存知給候、恐々謹言、

十一月廿九日

大宮司判

謹上 內宮長殿

廣長

二十九日、^{庚申}三河刈屋城主水野清忠卒ス、

〔^{下總}結城水野家譜〕 藏人賢正、連有尾州小河、大高、三州刈屋三城、後讓職於清忠

而老ス、

下野守清忠、連有小河、大高、刈屋三城、永正六年五月二十九日卒ス、

〔水野諸家系圖〕

守清 水野藤七郎、藏人、河內守、

重政 初名清忠、又名清雅、水野下野守、永正六年己巳歲五月二十九日卒、

重政 初名清忠、水野藤七郎、藏人、下野守、

清重 水野左近太夫、討死、

忠政 水野牛息丸、藤七郎、下野守、右衛門太夫、

永正六年五月二十九日

七四一

世系
重政
△
改名

永正六年五月是月

邦重 水野藤七郎病死

〔寛政重修諸家譜〕

三百二 水野

賢正 彦三郎藤

清忠 初信政重政

初名信政
院號

父に繼て、小河、刈屋に兩城に住し、某年卒に、一初全妙大元院と號す、

按す、茲に、今に呈譜、清忠永正六年五月二十九日卒といふ、茲に

も、寛永系圖に、男藤七郎某、元龜二年、年二十五にして死すといふ、こ

よ、推考ふは、天文十六年の生をみして、永正六年より後三十餘年

後隔り、うたかふ、是よりて、お終を闕、或はおそらく、藤七郎の年齢

を誤るゑ歟、

是月、土佐國司一條房家ノ部下本山茂宗、長宗我部兼序ト隙アリ、茂宗、

吉良、太平等諸氏ト謀リ、兼序ヲ同國岡豊城ニ攻ム、兼序敗レテ自殺ス、

〔土佐物語〕

一 本山傳記并岡豊城攻ノ事

房家土佐
國司トナ

略○上 扱ある、是をあらされり、御子房家卿七歳に成らせ給ふを國司ト立、

四人の臣下先代の法を守りて沙汰し、我々不肖の身、若君よ代り

奉り、政道を執行ふ事、其憚りなき、あはれ、理世安民の器、あはれ、人を

選舉して、御代官ト定め、國政をつらさ、こらしめ、御幼稚の若君を輔佐し奉

る、是として、大小の領主を撰ふ、長宗我部文兼其器用ありと、群議一同ト

定りし、則、文兼を御代官ト備へて、仰きける、忠貞こそ、のやさし、なれ、斯

て、文兼國の成敗を司つて、諸事沙汰の途、轍正しく、外相内徳、實を人の云に

違さりし、の、氏族も、是を重し、外様も、彼命を背り、家ま、繁榮を得

て、其子元門、其子雄親、實の元門の弟也、其子將監兼序ト至、の、威勢甚盛ト

して、人唇を、へ、事共多、り、其比長岡郡本山と云所、八木左近大

夫源茂宗と云人あり、是の清和源氏吉良庶流と云傳ふ、茂宗祖父を八木伊

典といふ、其生國の、名、假名實名も亦詳からず、何の比、有けん、彼本

山ト來て居住に、其子養明、今茂宗まで三代、本姓を改て本山と號に、伊典養

明の本山を領して、僅ト住居ける、茂宗其器傑出して、偏ト興立の志有け

れ、近邊の郷民、金銀衣食を與へて、是をまつ、諸士に賄を厚して、親ト

を、あし、遂ト人数を催して、土佐、吾川兩郡ト發向して、隨トさる、を、攻亡し、

降を乞を、ゆるして、幕下に、あし、兩郡悉く打靡け、猛威を震ふ事甚し、然ト

永正六年五月是月

七四三

長宗我部
文兼トナ
官トナス

兼序ニ至
リ權勢ヲ
振フ

八木伊典
本山ニ住

茂宗姓ヲ
本山ト改

茂宗自立
ノ志アリ

茂宗土佐
吾川兩郡
ヲ定ム

茂宗兼序
ヲ撃タシ
コトヲ謀
ル

永正六年五月是月

七四四

長宗我部將監兼序ウ威勢あるを見て、常ハ憤りけるウ、或時一族從類を呼
集て云々るハ、長宗我部將監驕奢甚しく、諸士ヲ對して無禮ノ躰、是非ハ及
ハズ、潜ハ是を察するハ、彼ウ曾祖父兵部丞文兼、一條殿を當國へ招請シ
ル其報謝ハ、一條殿懇情を盡シ給フハ因て也、文兼初て招請シヨリといヘ
ども、中邨へ移シ國司と稱スハ事ハ、文兼ウ一方の及フ所に在ラズ、我亡父
を始、國中乃諸將一同しての事也、たゞ彼一方の功あり共、兼序武士の法
を存セハ、強ハ不こるヘキ事ハもあらハ、よし何ハもせよ、彼ハ僅ハ三千貫
の領主、我ハ兩郡の大將也、然ハ每度奇怪の行跡を、空々ラシテ暮々哀コ
テ無念カレ、然レ共國の騷動民の歎きをウヘリ見テ、鬱胸をたさヘ過ク所
に、驕奢日々ハ長シ、無禮月々ハまじ、傍若無人の行跡、堪忍ハ却テ耻辱也、急
ニ踏ツフモヘシと思フハ、いウに申サレケレハ、何レも御理リ至極也、彼
ウ爲躰我々までも遺恨ハ候、急キ思召シ立給ヘト申サる、茂宗よろコビ
羽檄を飛シテ、香美郡楠目の城主山田治部少輔高岡郡蓮池の城主太平山
城守吾川郡弘岡の城主吉良駿河守をウラフハ、皆一言ハ及ハズ組シタ
リ、其勢合シテ三千餘騎、永正六年五月初、岡豐の城へ馳向フ、兼序ハ元より

茂宗同志
ヲ糾合ス

茂宗等兼
序ヲ攻ム

兼序中嶋
小籠ニ陣
ス

茂宗ノ軍
敗ル

武勇才幹衆ハ越、大敵を見てハ、あさむき、小敵を侮ラズ、寡を以て衆ハ勝柔
を以て堅きを挫ク事、孫吳ウ妙術を得ル大將あり、此よしを聞ク、居アル
ラ敵ハ寄^(ハ脱カ)をんハ武門の瑕瑾ありトテ、手勢僅ハ五百餘騎、中嶋小籠^(ハ脱カ)ハ出張
シ、石清川を後ハ當テ陣をこる、是ハ味方淺瀬を越ヘ、敵を深々ヘたひき入
レ、討トらんどの方便也、さるほどハ寄手の勢、三手に別セク、鬨の聲をぞつ
ト、互ハ矢一ツ二ツ射違フハ、そこそあハ、敵味方ハ亂シ、討ツ討ツ、組
ツ組ツ、火をちらシテ、戦々、兼序時分ハよしと馬引返し給ヘハ、城兵
崩シ、淺瀬ハ廻リク引トリケリ、寄手是を見ク、川ハ淺キと心得、城へ入シト
眞さき懸、深き淵ハ飛込^(ハ脱カ)、大勢ウきぬ沈ミぬ流をける、淺シと思ヒシ事
カレハ、跡々、是ハ途を失ヒ、一度に渡さんともせ、川ハ深ハ留セト、聲々
ハ呼ハセども、大勢備を亂シテ追懸シウハ、耳ハも更ニ聞入セ、我々ハ小
進ミテ、見るハ、淵ハ飛入、前後不覺ハ騒ク所を、城兵得たり賢シト、淺瀬を
さツト打コシ、蜘蛛十文字ハ追伏々々突伏、大勢の騷立ル事カレハ、返
シ合セテ戦ハんどもせ、我先ミと逃ハける、兼序、長追^(ハ脱カ)カセト勝鬨をあけ、
城中へ引取ル、本山ハ初度の軍を仕損シテ、大息繼テ居ヨリ々、兼

永正六年五月是月

七四五

城中糧ニ窮ス

兼序ノ二子

兼序近藤某ナシテ千翁丸ヲ伴ヒ脱出セシム

序の討取所の首二百三十五、實檢して首途よしと悦とれたる、され共寄手のさすが大勢あれ、城外を十重廿重に取巻、晝夜二十餘日、息をも繼ぐ採たりたる、城兵も爰を専途と防ぎ戦へ共、寄手の倍たる大軍、新手を入替く攻戦ふ、城兵猛しと云共、入替る勢もかく、其身金鐵から糸の、五百餘騎の兵大半討死して、残まらぬに成りたり、其上俄の籠城かりたる、内ふの兵糧盡て、人馬飢望、外には援兵の救もかく、敵軍の透間もかく打圍みて、用道を絶はれば、糧を入へき方便もあし、斯て此城一日も持味ん様あし、翌の清く討死まへき、極めたる、兼序二人の御子あり、一の千翁丸とて、永正元年に産れて、今年六歳、次の女子三歳、成給ふを、近藤某とて、幼少とて、膝元ふく召つうられ、漸成長、智慮あつて情深く、信あつて禮讓厚く、言寡者あれ、古人の所謂子の師なる器ありとて、二百貫の地を與へ、千翁丸に附置せたるを呼出し、此間の戦み、味方聊勝ふ乘といへ共、士卒過半討せ、兵糧も盡果ぬ、憑て甲斐あき籠城して、徒み餓死せんより、明あつて死を決せんと思ひ極まる也、よしや骸を軍門ふ曝まとも、名を後代ふ揚んこそ武士の本意あれ、汝の譜代相傳の者と云、年來千翁丸を守立しと云、其身甲斐

兼序其子千翁丸ヲ房家ニ託ス

兼序千翁丸ニ遺訓ス

ノ敷者あれ、千翁丸を抱き、いふもして重圍を出、一條殿へ参り、兼序武運盡て、此度討死仕り候、寂後ふ申置、此子を君へ参らせ候と申せ、何の子細もなく、御憐愍有る也、是を我ふめ第一の忠勤也と繰返し宣へは、近藤畏て、此年月恩澤ふ浴し、今まの一身の安否を御家の存亡ふ任せ候ひつを、命をたしむる候ひ、今既ふ御運盡させ給ひて、一を討死と思し召極られ候上、御寂期の御供をこせ願奉り候へ共、生を全ふして命を待り、遠して難く、死を輕して節を守る、近して易しと申事の候へと、斯取巻る圍を出、若君を一條殿へまいらせ守立奉らん事の、遠して難き事に候へ共、此仰を蒙る上、随分命を全して、若君を養育し奉り、再ひ御家を起し、素懷を遂させ奉る計を廻らぬ候と、義を金石に比して、信を面ふ顯し、涙をたらと流し、兼序大さによろこひ給ひ、頼もした詞の末、今の思ひ置事あしとて、千翁丸を呼出し、汝幼少あり共、父の言を能きけ、夫迦陵頻伽の卵の内において、聲衆鳥ふ勝ると云、勇健ふ成長て、廢る家を興し、讎敵を亡し、會稽の恥を雪た、我亡魂の鬱憤を散しめよと、涙と共あきくとき、近藤ふ渡し給ふ心の内こそ痛し、斯て近藤の、千翁丸をか

き抱き、先側お立よりて、其用意をそしゑりたる、扱又北の方をもまゝ(いそカ)あし
まいらせ、三歳の姫お、乳母一人、郎等二人相添、大忍の庄池の某の、乳母り内
縁の由緒有けれの、彼を頼みて、北の山傳ひお落給ふ、其外古老譜代の者共
の妻子下僕お至迄、偷お忍出したる、

長宗我部兼序自害の事

其後兼序、士共に向て宣ひたるの、旁り勇氣兼て知るとい云あうら、此度の
働兎角詞お述べ、一騎當千と云つゑし、縦ひ敵何万騎ありとも、一方を
打破て、何方へも落行ん事お安うるゑし、されとも情事を案するに、我死ま
へき期おせまをり、其子細といつゑ、東に山田有、香宗我部と一味あり、北に
本山有、奥の山分、其外土左、吾川兩郡の南の果迄も、本山う領分也、西お吉良、
太平あり、彼等の津野、波川、片岡と組しゑり、されの四方皆敵おしく、我一人
其中お挟れり、籠の内の鳥、網お掛りたる魚のとし、遁れんとするお道おし、
若爰を落行らりと聞い、草を分さうするし、雜人原の手に掛り、汚名を後代
お残さんも口おし、いさな能討死すへし、扱も旁今此際迄附纏、死を俱にせ
んと思定ふる心底、中く云に詞おく、報しても猶報し難し、但千翁丸を殘

置也、いゝおもして一人あり共活残り、千翁丸を守立得させよ、最後の供お
の百倍せり、疾々落よと詞を盡し宣へい、何れも道理に服し、涙おくれて、兎
角申すものなし、中嶋某進と出く、御詮尤至極せり、各若き輩の斗新行脚田
夫野人お身を寄くも、随分忍活残り、若殿の御用に立給へ、但某を始誰々の、
皆六十お餘り候へい、若殿を見備へ奉る月日おし、是おて大殿の御供仕る
へし、若き旁の急き給へと、そをくお名をさして、老人十一人、郎等下部五
十三人残りたれい、若き輩、此上いおむゑきにあらすとて、親子別るゝ者
もあり、兄弟別れ行もあり、主從傍輩父子兄弟、今を限りの事なれい、互に手
を取らわし、もろきの今の涙なり、さてしもあるへき事ならねい、別れく
お成おたり、あつれと云もおろろかり、兼序、今お心お懸る事もおし、明おの
大勢攻來り、互お隙も有まじたれと、終夜最後の酒宴せんとして、大盃三度傾
旁、中嶋おさし給ふ、中嶋謹く押いさつた、君臣の三世の縁と申傳て候、況う
やうの御最後の御供仕る上、未來もまた斯のとく御近習仕らん事疑お
し、悦ひ是お過奉らすと、三盃さらりとおしつたれい、兼序、それ此方へと取て
吞、次第くおさし給ふ、扱いつれも盃さしつたれい、互に目と目を見合て、涙

ふくれて居たりたる中嶋これを見て、このおそれ給ふ旁、此中誰か一人活残るものやある、互に一所討死して、同じ蓮を生せん事、よろおひの中の悦あり、一さし舞ん、とやさせ給へど、兼序（兼下開シ）小鞆をまいらせ、野田大鞆、桑名笛を仕り、兼平のきりをぞ囃子ある、岡豊の城も山高く聳ゆれ、笛鞆の音雲ふ響て、敵の陣みぞ聞へたる、天人の影向カ、尾上お妻乞鹿の音うと、耳を澄して聞所、城中の拍子の音ふてそ候ひたる、こいつに、味方の數を盡して討せつ、何の樂も通夜諷ふらん不敵さよ、悪さも悪し、いさ夜攻お押寄すへしと云々れ、いや／＼是の樂も有へうらら、味方の悉く討死す、其上俄の籠城かれ、兵糧も盡ぬへし、最後の酒宴と覺ふり、天晴名ある大將程有たる痛のしさよ、武士たるもの、人の事とも思はれず、今日お人の上、明日お我身の上ぞかし、哀れ心の儘から、一瓶をも捧て訪てやとて、涙を流す者もありしとかや、去程お東雲漸くたか引て、五更の天も明れば、寄手大鼓を打ち鐘を鳴し、九折ある山路を曳々聲を擧て攻上る、兼序の六十餘人を前後お備へ、幕地暗お突て出る、寄手の元來城兵を小勢と見ましまし、何故お些（些）やせらふを、我先お討んと喚叫くうけ向ふ、城兵

の今日を限りと思ひ極めし事あれ、一足も後へ退りず、前後お當り左右をくらひ、爰お隠れ彼所お顯はれ、縦横無盡お討破る、本山う士大將本山勘解由深手負く引退くを、城兵是非あく追掛討取たり、油田左衛門の、兼序を目おかけ、寄せ合せんと近よるを、兼序う郎等、馬の諸膝薙て、落る所を起しも立す討ふたり、此外目の前お切て落さるゝ者五十餘人、手負ふもの、其數をえらば、寄手終お追立られ、開き靡て引退く、城兵龍雲虎風の勢をおすといへ共、皆討死して十三騎お成りたる、兼序えのし敵も寄來るまし、些成共休息して、最後の軍快くせんと、大將を中お昇居へ、面々お盃取て、おもひ／＼お酌々るう、態と敵を引込ん爲お、大門を押開き、靜り返り居たりたり、本山の城中既お勢力極りぬと見ましまし、諸軍お下知して、一同お関を作て攻上り、廣庭お吐と亂れ入る、中嶋是を見、盃取て三度傾け、其盃をさしあさし、大音聲おて、鳴るは瀧の水、日は照れとも絶すとうゑり、とく／＼おてやゑつう弓の引おまし、是までありと盃からりと投捨、腰の刀をすらりとぬき、廣庭お飛て出せ、残る人々たたくをたりと、十二人一所に打て出、縦さま横さま、蜘蛛手十文字おまくり立てそ切たりたる、寄手の

大勢こらへうね門より外へさつと引兼序立歸り見給へ、主從三騎も成
あたる、今のは是迄と鑑ぬき捨腹搔切て臥給へ、二人の郎等もさし違へて
そ死したりける類ひ稀なる事ともなり、長宗我部十九代を粟飯の炊（カ）を程
なれや、盧生の夢ととや覺ぬ、飛花落葉乃風、有爲の轉變を顯し、電光石
火の影は、生死の去來を見ず、朝に榮へ、夕に衰ひ、樂盡て悲しみ來る、世の野
風こそとらあられ、

千翁丸中村お行、付岡豊お歸る事

斯て兼序の北の方の、乳母郎等に介酌せらる、住馴給ひし岡豊を、今を限
出給ふ心の中こそあはれなれ、痛しや將監殿、明かの大勢寄來り、さこそ
憚あく御座さんと、我身のうさに取添て、裾は露、袖は涙にまほりつゝ、大忍
の庄池の某うもとに至り給へ、池の情有者おて、よきお饗應し奉る、いた
ほしや北の方、たゝあらぬ御身おて、早月比過ける、物うた月日を重ねつ
ゝ、終お愛みて御産有、男子出生し給ひたり、後お長宗我部國康と云し、此
若子の御事也、去程に近藤某、十死の内一生を得て、岡豊の國（岡）を忍ひ出、商
人の姿にさまをうへ、千翁丸を皮籠お入て背お負ひ、幡多中郷へと急ぐる、

兼序ノ妻
池某ニ頼

長宗我部
國康

近藤某千
翁丸ヲ伴
スヒテ脱出

千翁丸房
家ニ頼ル

房家千翁
丸ヲ保護ス

土左、吾川、高岡の弓手も馬手も敵おれ、佐野のさりおあらねども、暫し
立寄る隙もあし、木蔭の岩をも敵かと思ひ、道お休ふ旅人も、我を知りてや
輕しむと、胸を冷し肝を消す、昔平家の落人の、白鷺のむれ居る松を見て、源
氏の旗かと驚しも、今に知られて哀れなり、虎臥野邊を分迷ひ、鰐住海を渡
り、なんも、斯やおもうさかりおて、漸々として中村一條殿の御館お著、千
翁丸を卸し置、家老土居の某お對面して、是の長宗我部將監う士みく候と、
有し次第を具お述て、慇懃お頼る、土居熟聞く、實に痛ましき御事哉、急
き台聽お達へしとて、頓て御前お罷出、事の由を申上けれ、房家卿聞しめ
し、大きに驚給ひ、誠お不便の事ありとて、急き兩人を召寄らる、涙を流して
仰たるを、先考教房公、京都の亂をさけて、攝劔兵庫お漂泊し給ひしを、兵部
丞文兼お招請お依て、當國お御下向あり、安座し給ふのさからず、勅許おあ
らすして國司と仰うれ給ひ、今お至る、國中の諸士お圍るゝ事、併文兼お厚
恩也、我豈其報謝せざるを、當家僅二代の内おられ、早四代お及事、悲
歎するに餘り有、但千翁丸お恙おたこそ大慶おれ、我隨分養育して成長せ
つ、亡父の讎をも報せさせ、本領安堵相違有まし、此度近藤お忠貞、古の程嬰

兼序ニ覺
譽常通ト
謚ス

兼序ノ領
民茂宗ノ
ス

吉良希利
大平貞重
山田正久

岡豊城ヲ
攻ム

杵臼ふも超ふり、思へり兼序のよく人を知の明有て、汝うとれ忠臣を扶助
せ、汝又義を守て、幼主を世ふ立んどの心底、誠ふ主從一致也とて、甚感賞し
給へり、近藤謹く承る、誠ふ有難き御誼候、身不肖ふ候へ共、譜代の列ふ
交り、兼序の之恩を蒙りし身の、此度主の先途をも見果申さす、ため／＼と
立退く事、全く本意にあらす候へとも、主命辭するふ詞あく、甲斐あき命汝
存らへ、御前へ參上仕候、返／＼千翁丸ふ御憐を願ひ奉り候と、謹く申上れ
り、房家卿心安く存すへしとく、千翁丸を御側に置せらる、深く痛り給
ひたり、其後兼序菩提の爲ふ、覺譽常通と謚して、さま／＼の追善をあし給
ふ、有難うりたれためし也、○下略、長元物
語、異事ナシ

〔南國中古物語〕

○土佐國群
書類從所載

元秀戰死之事

（宗下同シ）
長曾我部宮内少輔元秀の、元親の祖あり、元秀領内の百姓と、本山式部少輔
茂宗領の百姓、苗代水を争ひ、本山領の百姓をうち殺せ、此事むつかしく成
り、元秀、茂宗合戦とあは、爰ふ吉良左衛門希利、大平帶刀貞重、山田丹波正久
とて、五千貫、三千貫の領主、本山の親類縁者あれり、茂宗是等ふ示合て、元秀
汝討て、本望をとるんとて、永正五年五月下旬、岡豊へ押寄んとて、元秀是を

桑名重定
城ヲ出テ
戦フ

聞、おやあらぬ身方の勢を以、あけ合の合戦然るへあらす、唯城ふ引籠つく
ふた、おとて、其勢三百餘騎、岡豊の城ふ楯籠り、堀をやらせ、逆も木引よせく
る敵を待居り、かくと四人の大將、其勢都合二千餘騎、家々の旗二十餘流、
國見嵐ふ吹なひり、いきなりひら／＼とく押寄せ、鯨波をせつとせ、おとり
おふ、身方ふ、せきの聲を聞きせず、矢のむとつを射出さず、更ふ人あり
とも見へさる、四人の大將一所ふ聚り、おとや元秀の聞逃ケしたるふこ
れ、おとや乗込メ者共と下知されり、おとやりをの若者とも、我先ふ／＼と馬ふ
息をもくせ、ほりあけともいとす押詰めたり、城中おと、敵を矢ころふ引
請ケ、中内藤兵衛大將おと、西の尾崎の松林の中よ、く／＼こほしお雨の
降る如くさん／＼と射、少し色めく所汝、桑名丹後守重定、久武肥後守忠光、
せつとおめいく欠出る、本山方ふ、敵をあなとり油断しく、備へおとら
さりたれり、散々お戦ひまけ、五丁程北走る、桑名、久武も長追せず、本の陣ふ
引取おと、かくて四人の大敵評定しく、此城の躰、俄責ふり成間敷、遠責ふせ
よとく、三方汝とり巻、三十餘日責たり、數日の戦ふ、城中の兵討死、或は落て、
残る兵四十餘騎ある、兵糧も盡たれり、元秀討死とおとひ定め、（宗下同シ）普代の侍

永正六年五月是月

近藤太郎兵衛正時を呼て仰るに、此城兎角持こゑへうし、汝の此千王丸汝をしく、いふもして一條殿へ参り、此間の合戦の躰、又某討死をへき事汝申、千王丸を進奉るよし申候へと有、近藤聞て、畏入候、乍去御最期の御供と存定め候、若君の御供を、他人へ被仰付候へと申切く、落へき氣色のかうりたり、元秀重て仰るゑ、我思ふ所有て、千王丸を汝預るあり、臨節致死の近ふして安く、全命待時の遠ふしてかゝし、唯此子汝守立、君父の讎を復せ、是れと有々れ、近藤涙を流さ、さしうつむる居り、北の方の千王丸を膝におき、今生の別ありと、おくれの髪をうき撫て、いひ出さる言葉もあ、あゝおふくせくれとしま、千王丸の母の貌汝はく、と見え、母うへさむの、お中汝いゝまを給ふ、御湯とつくまいらん、御薬まをせと、笑止顔の、さまへ、元秀を初として、一座乃男女一同お聲をあきて、きさけは、やゝあま、北の方、落るあま、汝おさへ、いふ千王丸、とつらら腹をいゝまぬ、取、本山、吉良、山田、大平といふ人々、此城へ押寄せ、晝夜戦ひ止む時あし、あゝは物をさました、城中お、おさ取きをの汝おんより、おこと汝の一條殿へ進せ申、よく宮仕へ候へ、朋輩達おあふくまれ、見る

兼序ノ妻
千王丸ニ
遺訓ス

重定伴リ
テ敵兵ヲ
誘フ

は、おと取し、うれ、八ツ九ツおもあふならぬ、物あきからへ、物とみからへ、成長るに、隨馬乗りからへ、弓汝射よ、一條殿の御家お、御歌の會、鞠の會、月見花見の御遊ありといえとも、あち、是お長をあよ、おとへに武士乃道を心うけよと、くどたてのあき、泣て、いづとけ、あきいとほ乞との見へさり、あ、さら、近藤お引出をの賜ふと、帳内へ入給ふ、其隙お近藤の、心よ、く、かか、と、若君汝抱きとり、裏の小門より忍ひ出、竹のか、おお入負、幡多をさして、急きなり、さて元秀の、家の子郎徒の妻子まで、所縁を、とめ、去の、今、心あ、は、事取しと、士卒お向て仰る、の、面々の忠節、言語お演難し、去あ、生有るを、の、死あり、弓矢とる者、の名こ、惜し、あ、と、取、や、お討死を、な、と、四人の大將、壹人ありとも、討取へし、相搆て、雑兵お目あ、け、と、あ、つ、ま、え、つ、く、待所お、城の躰、より、あ、と、お、め、き、さ、あ、ん、て、責、登、る、桑、名、丹、後、守、重、定、門、を、を、ら、ひ、て、號、り、あ、の、元、秀、力、盡、く、腹、切、て、候、城、を、渡、さ、ん、と、め、丹、後、守、壹、人、殘、り、留、り、候、多、勢、の、無、益、一、兩、人、御、渡、り、候、へ、か、く、申、丹、後、守、う、命、と、う、の、あ、を、お、た、ま、へ、と、い、ふ、や、否、例、の、無、遠、慮、の、若、者、と、も、我、先、お、押、合、せ、り、合、備、を、亂

永正六年五月是月

して詰りけり、元秀四十三騎を左右に進め、今そらよとてまつし、くらに突く出思ひ儲々し死狂ひ、射をも突をも事ともたは、大將を討とらんと、旋風の塵をまく風情を、面抜むくるきやうも恥く、逸足おく逃散る、凡六七十騎なき捨り、桑名丹後の本山勘解由と組、首うき切り、立あゐらんとする所、敵三騎をり合、終に丹後も討る、中内藤兵衛、久武肥後の、大將本山を追懸、深入して多勢お取巻を討死せ、元秀城内へ引入らる、(此脱カ)四十三騎も過半討死して、主従九人お成る、是迄迄とて、乾の矢倉へ取籠り、元秀四十三、北の方の三十三、姫君十六歳、一所お自害せり、八人乃侍こゝかし、あゝ火洩りけ、指違へて死よ々、岡豊の城落去して、此跡本山、吉良、大平、山田配分して領し、ある、扱彼近藤の、五日路を経て、難おく一條殿へ参り、土居式部をもて、段々子細を申上る、一條殿、千王丸と、近藤太郎兵衛を召出さ、合戦の次第一々お御尋有り、千王丸の、くつせと仰らる、五歳よ候と申、不便の事とも也とて、御涙を流させ給、併し宮内少輔を、近藤といふ能き者を、持家の絶ましたを、主乃孤を守立る事、和漢をも例し多しといえども、近藤の今乃世の忠臣おととの、さよひ、千王丸を御側お置せられ、御いさとり

兼序妻女
ト共ニ自
殺ス

本山吉良
等岡豊領
ヲ分ツ

房家千王
丸ヲ養育
ス

深きを、是は、見、彼は、聞く人、御恵との深きを感じ、かゝし、多能き事よ、おおもひ、お、かくて、千王丸七歳の夏、一條殿涼亭に御座ありて、此腰戸の上より座へ飛から、父の跡を取かへしてとらせんと戯て仰々れ、聞も、あへず、高さ九尺計の亭より座へ飛り、一條殿御手洩うとせ給ひ、何と見てもたゝもの、は、あらずと、感じ給ふ、是の、さあらず、千王丸母の教訓耳よと、は、りたるよや、八九歳の頃より、手習ひよ心あけ、物よみからひ、お事よても人よ習ふ事、汝好き、昔物語を聞さうり、軍物語り、又いつれの地よ、化物う住く人をとる、大蛇う人をのむ、おと云る雑談をも、餘念なく面白うり、淫亂みよりの咄、利欲手廻しの事、おとを嫌ひて、其座立去たり、如何様家汝おこ、は、へきもの、ありと、こゝろある人、いひあへり、

〔土佐軍記〕

上 元秀戦死

一 永正四年六月廿四日、細川右馬頭政元京師にて切腹、○細川澄之、其父政元ヲ弑スルコト、四年六月二十三日ノ條ニ見ユ、其子高國武勇ヲ振フト云へ、相順人モナシ、其比長宗我部宮内少輔元秀ト申ハ、元親ノ祖父ナリ、年頃細川殿御前ヨケレハ、其威ヲ以國侍ヲ蔑ニアテカウ、此遺恨ニヨリテ、細川殿切腹ヲ聞テ、本山張

兼序細川
氏ニ依リ
テ勢アリ
兼序怨ヲ
受ケ

本人ニテ、大平、吉良、山田申合テ、元秀ヲ討テ本望ヲ達セント、永正五年五月、其勢三千餘騎ニテ、江村郷岡豊ノ城ヘ取カクル、元秀是ヲ見テ、手勢五百餘騎、桑名、久武、中ノ内ヲ先トシテ、山下ヘ打下シテ、本山七百餘騎ニテヒカヘタル真中ヘ切テカ、ル、敵六七十分取テ、関ヲ上テ、此競ニ城エヒキトレト下知シテ引取、大平、山田、吉良カ勢二千餘騎、二手ニシ、城ヘ入ラント突テカ、ル、元秀前後ノ敵ヲ追卷テ、無難城ヘ取籠ル、大平、山田、吉良、本山、城ノ三方ヲ取卷テ、晝夜二十五日攻戰、元秀軍兵大半討死シテ、兵糧モ盡スレハ、明日突テ出テ、腹ヲ切ヘキトテ思案シテ、近藤ト云（藤下河）普代ノ侍有、其身甲斐々々敷者ナレハ、呼寄テ、此間ノ合戰ニ、軍兵討死シテ、兵糧盡タレハ、明ケナハ合戰シテ討死スヘシ、汝ハ此千王丸ヲ懷テ、イカニモシテ一條殿ヘ參リテ、元秀最後ニ申置、此子ヲ進上申トイヘ、何ノ子細モナク御憐愍有ヘシ、是ヲ我タメ第一ノ忠勤、生々世々ノ恩ナルヘシト仰ケレハ、近藤承リテ、全生待命ハ遠シテ難シ、輕死ノ臨節ハ近シテ易シト云ヘリ、六歳ナリシ千王丸殿、一條殿ヘ奉リテ、養育セン事、遠シテ難キナレト、代々殿ノ芳恩難忘事ナレハ、千王丸ヲカクシテ一條殿ヘ奉テ、我モ御

攻圍二十
五日

奉公申ヘシト請合ヌレハ、元秀悦テ、今ハ思置事モナシト、千王丸ヲ汝カ子ト思テクレヨト仰ラレ、近藤ニ渡シ給フ心ノ裏ハ類ナシ、近藤ハ竹ノ皮籠ニ千王丸殿ヲ入負テ、其夜岡豊ノ城ヲ落テ、四日路有シ幡多郡一條殿ヘト忍ヒケル、サテ元秀ハ、足手カ、ル家頼ノ者ノ子トマテ、所縁ヲ尋テ落シ、明ルヲ待テ居給フ、本山城ノ躰草臥タルソ、攻ヨト下知シテ責上ル、大平、吉良、山田續テ攻ル、元秀六七騎ノ兵ヲ先ニ進マセテ、敵ヲ屏際マテヨセテ、門ヲ開テ突テ出ル、本山、吉良カ兵ヲ山下ヘクツシテ、落ルヲ追討ニシテトル、山田、大平入替テ攻カ、ル、此勢ヲモ突崩シテ、五六十騎討取テ引トル、四人ノ大將軍評定シテ、二手ニシテ攻敗ルヘシト、相圖ヲ定テ、関ヲ上テ攻メ上ル、元秀屏際近ク敵ヨセテ突テ出テ、亦山下ヘ追クツス、右ノ手ヨリ大平、山田千餘騎、横合ニ切テカ、ル、火花ヲ散シテ攻戰、本山モリ返シテ切テ掛ル、二時計ノ合戰ニ、本山舍弟本山勘解由左衛門討死スル、此競城エ引取、サレトモ後ノ門ヲ破ラレテ、大平、山田カ兵トモ亂入テ火ヲカクル、元秀兼テ用意ノコトナレハ、矢倉エトリ籠テ、妻子トモニ自害スル、元秀侍大半討死スル、岡豊ノ城落テ、此跡四人配分セラルト聞シ、

千王丸元
國ト稱ス
房家茂宗
等ニ諡シ
千王丸ニ
地ヲ還付
セシム
元國家ヲ
繼ケ

亦彼近藤ハ四日隔タル幡多郡一條殿ヘツキケレハ、土居ト云人ヲ頼テ
言上スル、一條房家公、此子并ニ近藤ヲ呼出サレテ、對面有テ、泪ヲナカサ
セ給フテ、長宗我部ハ近藤ト云ヨキ者ヲ持テ、家ハ絶マシキノ、主ノ孤ヲ
取立テ、世ニ出ス事、和漢其例多シ、近藤程ノ臣有マシキト御感有テ、近藤
ハ御家人ニ差加ラル、千王丸ヲ御傍ニ置セラレテ、朝夕痛ハリ思召テ、
養育セラレ、堤ノ城下明榮寺ニテ、法華經供養アソハシテ、法名ヲハ關翁
常秀居士ト諡ス、是ヲ見テ土佐國中ノ侍、此御所ノタメニ一命ヲ奉テ、御
奉公申ヘシ、頼母敷事感セヌ人ナシ、此子眼サシ平人ニ非ス、成人ノ後ニ
家ヲ起サン人ト思ヘリ、此子七歳ノ時、一條殿二階ニ御座有テ涼マセ給
フ、○中略、千王丸、樓上ヨリ庭上ニ飛下ル近年世上ヨク治リ、此子十五歳
ニテ、一條殿御所ニテ元服シテ、代々ノ實名ナレハ、長宗我部宮内少輔元
國ト號ス、連々一條殿、本山、吉良、山田、大平ニ仰ラレテ、長宗我部ノ本知二
十枝、江村ノ郷ヲ取返シテ、三千貫ヲ此宮内少輔ニ下サレテ、成人シテ岡
豐ノ城ヲ拵テ移ル、方々流人シテ居タル普代ノ侍ヲ召返シテ、長宗我部
ノ家ヲ相續、男子四人、女子二人持給フ、○南海治亂記、土佐古
略傳承記、異事ナシ、古

一條家守
護代

〔陰德太平記〕

二

長宗我部先祖付元秀戰死之事

兼序細川
政元ニ結
ビ專横ナ
リ

本山梅慶

千王丸國
親ト稱ス

其比土佐國一條殿正二位權大納言房家卿ノ御内ニ、彼州ノ守護代七人ア
リ、本山、安喜、大平、津野、山田、吉良、長宗我部是也、○中略、長宗我部氏來、元勝ヨ
リ十七代、元秀ニ至テ、何レモ武勇ノ名ヲ得タリ、此元秀、從來奢侈甚シテ、萬
我意ニ行ヒケリ、サルニ依テ、殘ル六人ノ者共、甚雖憎之、元秀阿州ノ細川政
元ト、交接甚昵カリケレハ、時々軍士ヲ加勢セラレケル故、各セン方ナク、怒
ヲ押ヘテ居タリケリ、サレハ虎威ヲ借野狐ハ、虎仆レテ慢ラレ、驥尾ニ附蒼
蠅ハ、騏蹠イテ遲シ、去比、政元不慮ノ害ニアハレケレハ、各此幸ノ時節也ト
テ、本山梅慶魁主ニテ、大平、吉良、山田等三千餘騎ヲ合セテ、永正五年五月初
旬、岡豐城ヘ押寄タリ、○中略、兼序自殺ノコトニカ扱其後千王丸ハ、一條殿
深ク憐愍ヲ垂給テ、已ニ十五歳ニ成シカハ、長宗我部宮内少輔國親ト稱セ
シメ、本山等ニ仰ラレテ、本領廿枝、江村、野田、大埔、補吉原ヲ返シ與ラル、成長ノ
後、岡豐ノ城ニ歸リ入テ、七人ノ髓一トナリ、武勇父祖ニ不耻、後ニ法名覺世
ト號スル是也、國親ニ四男二女アリ、嫡子元親、次男親貞、三男親泰、四男嶋彌
九郎、息女一人ハ、本山式部少輔ニ嫁ス、今一人ハ、波川玄蕃ガ室、

〔蠹簡集〕 三

雄親

兼序

今按長宗我部者舊國司之家而居乎國府素爲國之雄長而細川領知四國時昵近最密本山山田等嫉之蓋有年矣一旦細川衰滅三好振威四國遂爲三好之有本山山田等時々讒毀長宗我部永正五年戊辰竟舉大兵而襲敗豐岡城五月廿六日兼序自盡矣葬遺骨於幡多郡中村郷妙榮寺號關翁寺常秀又按香美郡楨山專當村左平太所藏專當左衛門大夫奉元親目安曰國無御身方時九月廿一日我方邊新秀樣被成御座三年御逗留私先人當四郎左衛門下做此以僧金書記調和山田殿七月七日私先人御供申御本復被成右目安拙筆不可句未詳何事然此文中有覺世樣御幼少之語覺世者國親之法名也以此攷之新秀當作信州蓋兼序稱信濃守也是他無證佐以國親亦稱信濃守推之且此目安筆桑名丹後爲桑名但秀但秀即丹州耳本復蓋還住豐岡城也世傳以兼序爲將監未考

國親千雄丸信濃守後難髮號覺世

近藤某ノ名

籃負ノコト明カナラズ

宗茂等長宗我部氏ヲ思ム

今按世傳千雄丸文龜二年壬戌生于豐岡兼序沒落永正五年戊辰七歲家臣近藤氏籃負之奔於幡多郡一條殿擁資之十五年戊寅八月廿七日復於豐岡此即國親也

右近藤氏名不相傳或爲與介又爲太郎兵衛正勝無左券今以專當日安見之覺世幼少時近侍者福留修理而在楨山忠勤者專當四郎左衛門尉也籃負事雖未知其實近藤專當音相近當更思之

又按弘治二年丙辰滅怨敵山田氏永祿三年庚申六月襲取本山子城吾川郡長濱急證疾病速歸于豐岡十五日卒葬于豐岡北谷號瑞應覺世年五十九歲

右長濱陳陳及覺世病卒爲弘治三年者妄也此書所載舊文書可見又世傳豐岡北谷千歲山兼序寺改號祥鳳山瑞應寺藏覺世之牌主寄附寺領若干云

〔土州遺語〕 二

細川領知四國時長宗我部昵近最密本山山田等嫉之有年矣一旦細川衰滅三好振威四國遂爲三好有本山山田等時々讒毀長宗我部會三好守護代來當國居山田城受國士拜謁前期山田遺使告長宗我部兼序

永正六年五月是月

兼序ノ部
下紅袴ヲ
著シ三好
氏ニ調ス
宗茂等途
ス之ヲ殺
兼序遺ル

兼序狙擊
セラル

大平元國
道大中臣基

永正六年五月是月

七六六

曰三好改士禮令屬士皆著紅袴宜如法備服而來兼序諾之當日山田本山等
伏兵於長岡郡陳山認紅袴擊殺之一人無免者兼序姊爲山田妻重按系圖嫡女爲山田
妻密囑於軍士脫去兼序兼序於是竊入與岳寺住持得山田妻室之託每日以
佛餉舖之數日後寺僧恠靈供器皿之空流言噴々住持不能庇之香宗城內有
泉村坂者居之坂者中有名豆腐者妻室囑之欲舟送幡多豆腐諾之而貪妻室
賄賂不果送去忽改慮云我爲香宗我部民私脫秦氏恐後禍乃告之香宗我部
香宗我部亦與秦氏不相善與豆腐約欲殺之豆腐曰明夜秦氏爲住吉詣女裝
將乘船詛擊之可也乃刻期伏兵殺兼序其墓今在吉原村西木戶里人號殿墓
元親君在浦戶城經過必拜參云兼序死時國親在襍襍譜代士近藤某負之逃
被山出甲浦爲四國修行者如幡多中村託一條殿云一條公育之調和山田等
還入豐岡城矣元親君悉滅國士奄有一州蓋起本于報父祖讎云香宗土居村
兵衛年八十餘歲元祿辛巳爲重遠參攷舊文書此說最爲得實世傳土左軍記伯父利齊
老人云諸家不傳此事重遠參攷舊文書此說最爲得實世傳土左軍記伯父利齊
秦氏名字且不傳尙
何錄得決不可信焉

〔土佐國編年記事略〕

四 同年同月、本山左近將監、大平隱岐守元國吉良平
三尉山田治部少輔大中臣基道等、長岡郡豐岡城主長宗我部信濃守秦兼序ヲ伐

テ是ヲ滅ス兼序カ臣近藤某千雄丸ヲ竹皮籠ニ入、負テ幡多郡ニ逃レ、一條
房家ニ託ス時千雄丸五歲

本山大平元國親公武威ノ名ヲ缺ク、今古文書古棟札ニ據テ是
補フ長元記ニ元親公武威ノ名ヲ缺ク、今古文書古棟札ニ據テ是
趣ヲ矢ト成テハ、同國ノ住人吉良大比良山三人知居城ヲ取リ
御一族不殘討果ス、其時兼序ノ息御代破タル竹皮籠ニ入テ、
千王殿ト申雖也、若君一人近藤ト申諸代破タル竹皮籠ニ入テ、
ノ中ヲ紛出シ、同國ノ路隔タル幡多郡一條殿ヘマイリテ、
上付テ、千王殿ナ一條御抱オカル、所如件ト有ニ據、按土佐遺語云、
クニ揚

專當左衛
門大夫目
安ノ記事

大神眞潮
大筆ノ記
事

身方永乙酉九月廿一日遊於被山於新小松氏閣專當左衛門大夫目安曰、
記調和山殿然此月七日、和先覺世御幼少之語、覺世國親遠謂此名也、
可句未詳何事、然此月七日、和先覺世御幼少之語、覺世國親遠謂此名也、
之親蓋兼序長宗我部復蓋謂久可住豐岡城也、
兼序也、此遊說ニ長從我部又兼序眞潮墳記ニ、
見郡吉原ニ遊說ニ長從我部又兼序眞潮墳記ニ、
城主家内舞見吉原村今ノ跡、
川番一タマハ、
門番一タマハ、
側カケ所ニ故待御腹ヤメレ、
シノ四方ハ堀クニ田ニ甚イタシク、
永正六年五月是月

七六七

永正六年五月是月

七六八

西ニ百姓屋敷ノ内ニ一人腹切申サレタ
チ古墳アリシト云カ何ナリ切申サレ
年ノ大朝ヨリマタ前ノ大問鐘ツハソ
ハ淡路島ト云ト被山小松氏祖ノハ
申代門山仙表ト云ル物ニ信利祖ノ
郎左衛門小田頭方弓頼度事サシ
所得終御三立不足被休候度付光被
小御頭家來得ノ申八拾人馳走申
如ク爲仕候者利公被成候御座刻
本御手ツカ候御利公被成候御座
寺後御于ハ今イモ御座候明
ト小松幸盛云節當村ニ老翁ケルカ
ヤレハ太刀カヲマシキニ置玉告
岡落去タト聞ヨトアレハカハ
チキ三止玉ヲ池今猶存御見ノ時
植置略中フ
テ水按隘ノ兼上ノ戰死ノ千丸ノ
下ノ事ナカ目傳安モス我手久柄
シテ専ノ當カ目傳安モス我手久柄

〔土州名勝記〕

國中古物語土佐軍記等ニ據リテ茲ニ掲記ス、

〔土州名勝記〕

一條房家兼序菩提ノ爲中村明榮寺ニ於テ法華經供養アリ、關翁常秀居士
ト號セシム、土佐軍記ニ千王丸ヲ御傍ニ置セラレ朝夕痛リ思召テ養育
翁テ法花經供養アリ看人カソルイナ流ス、元秀ヲ兼序菩提ノ爲城下明榮寺ニ
○茂宗等兼序ヲ岡豐城ニ攻ムルコト、詳カナラズ、今姑ク、土佐物語、南
國中古物語、土佐軍記等ニ據リテ茲ニ掲記ス、

永正六年五月是月

七六九

然るに同國香我美郡も宗我部といふ所有て、宗我部某と號し々れ、
郡よて三千貫を領し、宗我部村岡豐山よ城を築て住し、氏を宗我部と改、
豊岡八幡宮天上神の北の、所祭石清水と一體、秦能俊としめて、土佐國長岡

山田元義
居城
豐岡八幡
宮
秦能俊氏
ノト改
トノ説

長宗我部
氏下香宗
我部氏

長宗我部
氏居城

本山茂實
居城
弘岡城

太平氏居
城

永正六年五月是月

七七〇

其疑ひありとて、長岡郡よあるを長宗我部と云、又香我美郡の宗我部の、
香宗我部と改めたる、此豊岡の名の事、昔よりの名よあらず、長岡郡の村
あれの岡府といふ事あるを、豊の字よ書替りたる、此山の西の尾よ豊岡
天神の社あるよよりて、豊の字を申請ひ、豊饒にをせて祝し號けらし
とあり、

古城岡豊元親の本城あり、用明天皇二年七月、守屋討罪の時、秦川勝大
きよ軍功有、川勝より廿五世孫、秦能俊土佐國長岡郡よて三千貫を領し、
此所よ城を築く、元親よて十八代の居城あり、

古城本山本山佐渡守茂實居、梅慶弟ふり、土佐
〔土州名勝記〕吾川郡弘岡城、吉良駿河守居之、吉良の源氏也、土佐冠者
希義源の落胤よして、代々爰に城主あり、十八世駿河守よ至り、永祿六年、元親
の爲よ敗亡、

〔土州名勝記〕下岡郡古城蓮池太平讚岐守居し、自先祖十三代傳領
に、其内太平山城守の歌人あり、書翰あり、略

六月壬戌朔

一日、御祝、

〔實隆公記〕

四十

六月一日、壬戌、霽、行水念誦如例、

月朔、幸甚々々、略時小棟元宿禰來、今日相公羽林當番也、入夜御祝參入、候宿者
也、

幕府、犬追物ヲ行ハントシ、其地禁裏ニ近キヲ以テ、三條西實隆ニ就キ、
其可否ヲ伺ハシム、

〔實隆公記〕

四十

六月一日、壬戌、霽、略

早朝阿野相公來臨、室町殿近日近習之輩稱手懸、有犬追物事、禁中咫尺不可
然歎、每度可被申入案内之條、可有御失念事、自然之儀内々得其意、可申入之
由仰之云々、此趣則以書狀申勾當許、感歎之御申神妙、更不可有苦之由仰也、
其旨申遣阿野許了、

二日、義尹、伊勢貞遠ヲシテ、同貞宗ニ、犬追物ノ事ヲ問ハシム、

〔伊勢貞助記〕

七〇後鑑二百

於御棧敷ノ前、外ヲ追矢ヲハナス事如何、此段
公方様ヨリ以貞遠、永正六六二日ニ貞宗へ御不審アリ、返事ニハ、上意尤之

永正六年六月一日 二日

七七二

三條西公
條候番

手懸

聽許セラ
ル

棧敷前外
追矢ヲ放
ツコト

永正六年六月三日

七七二

儀ナリ、但雖爲御棧敷、前ヤウニヨリ、矢ヲ放事モアルベシ、射様ニヨルベシ、只イカニモ斟酌可然ナリ、又矢サシテ外追事、是ハ雖爲御前、不可苦ナリ、一外ヲ追テ馬場ノ末ノツマリタルニテムチヲ打事如何、上意尤儀ナリ、不可打事ナリ、ムチヲ打事ハ、馬ヲハシラカスヘキ爲ナリ、既馬場末ナラハ、ムチヲ打テ無用ノ事ナリ、又馬ニ曲モ付ナリ、又ヨセイモ寸キナリト、返事可有御申ナリ、

三日、甲是ヨリ先、下野烏山城主那須資房、鹽谷城主鹽谷孝綱ト隙アリ、孝綱ノ部下大貫増長、油井利宗等ヲ誘ハントス、是日、孝綱、増長、利宗等ヲシテ、一心ナキヲ誓ハシム、

〔那須記〕六 鹽谷孝綱郎從等起請事

仁王（皇孫）百五代後柏原天王御宇頃、那須上下左大將兩人（庄カ）ひて御座有ける、上那須の大將越後守資之（庄カ）ハ四代孫播磨守資親ト號す、福原ハ居城す、男女四人まし（庄カ）くける、嫡女は宇都宮大將成綱の奥、壹人の澤村三郎の室とならせ給ふ、次ハ白川義永の子息を婿（庄カ）ハ取當家を繼ぎ、末子の男子よて、當曆巳春生給ふ、資久ト號し、大關預り堅田の城ハ居住す、下那須ハ資重より四世孫

右衛門大輔資房ト申ける、烏山ハ居城す、然ハ資房、鹽谷伯耆守孝綱ト不和ハ成て合戦ハおよふ、依之資房、長臣等を召て仰ける、我鹽谷ト雖諍雌雄、未遂本意、無念ナリ、此度大軍を發、彼ハ居城を可攻落ト宣ひければ、奥野謹而申上けるハ、大勢ハ御合戦せさせ給ハ、敵御方勿論數多討死仕らん、是國の衰微ナリ、謀以敵を退け給ハ、軍法ハ第一ト仕候、此度軍をハ先御延引有之、孝綱普代者（備下同シ）ハ大貫石見守、印南修理進、油井筑後守ト申す、勇子御座候、彼三士を招せ給ひて、義厚仁愛を以御對面有て、所領一ヶ所をも可給のよし仰出れ候ハ、必モ御身方ハ可屬、然ハ孝綱を易討執ヘシト申ければ、何も實（庄カ）もと思召、頓而件（庄カ）の三士を召仰出れば、畏候、使者を遣し召之、彼三士内々鹽谷を不足ハ思ふ折節、下庄ハ早速參上仕る、高瀬内藏介爲案内ト、資房の御前ハ罷出、資房御對面被成、仰けるハ、使者を以て申達候所ハ、早速參入の儀神妙の至りナリ、此度身方ハ被屬候ハ、熊田、志鳥、北條の一村を可進宣ひければ、油井筑後守申上けるハ、某等内々いきどうの事、上那須殿被聞召及、仰けるハ、宇都宮成綱の幕下參屬申様ハ被仰聞候得共、未だ落著不仕候、豫御旗下ハ罷成らんと存候刻、忝仰を蒙候ト約諾仕

永正六年六月三日

七七三

永正六年六月三日

七七四

けれ、大貫印南も無異儀、則本城(備下)に歸ける。山田八郎、大貫石見守、印南修理
進、油井筑後三人か、下那須資房の召に依て御禮申由、彼等か心底、一定謀叛
の企事無疑と、孝綱の御前(備下)に伺出申上ける。印南、油井、大貫等の者とも、下那
須殿一身仕由承り候、定て謀叛の企と(備下)おぼせ存候、彼等を其間々さし置れ候
の、ゆゑしき御大事と(備下)おぼせ存候、御前(備下)にも召出事の實偽を御尋有之、依罪
輕重被爲禁獄給ふか、又重科ならば、切腹被仰附可然と申上ければ、孝綱聞
召、いかり給ひて仰けるは、彼等普代相傳の士なり、かゝる惡事を思ひ立事
有間敷なり、乍去山田か申分聞て不改(備下)り、かうくわひもともかゝりかたし、
さらの實否をたゞし、罪有の(備下)おれを禁んと、安藤内光忠を呼て宣ひけるの、
大貫石見守増長、油井筑後守利宗、印南修理進成展等十三人密談し、那須資
房に屬し還り、此城を攻と仕のよし聞、謀叛人を呼寄、事の子細を尋搜、科の
輕重に依て可罪之、若此事を知て不參り、押寄て討取と仰せける、安藤承て、
只今おつかけて討取申さん事(備下)の一時成へし、乍去軍法の不戰去て爲勝給
おせ、軍法の正利なれ、彼等を召出れ、起請文を爲書可然存候、若起請文不仕
り、押へて首をはねられ候得かし、御前(備下)に起請を書、自今以後、主君(備下)に向て

弓を引なは、神罪(備下)いかてのかるへし、昔二階堂土佐房か、義經の御前(備下)に起
請文を仕時刻(備下)の御罪もあらん、早押寄義經を討んとて、六拾餘騎(備下)よて夜討
み入候處(備下)に、神罪(備下)もや、義經壹人(備下)に被切立、其障(備下)に判官郎從等騎寄(備下)ければ、正
俊生捕れ、川原(備下)に首を(備下)さらされ候也、おの(備下)ものとも起請文をも不用、君(備下)に向
て戰ひ、必其身立所(備下)に亡失申さんと申上ければ、孝綱も、實(備下)もとも思召、然(備下)は是
へ召出し、起請文を書せよと仰ける、安藤承候とて、使者を以て是等を召せ、
三士の門葉十三人則參上仕、孝綱宣ひけるの、いづれも我を背て下那須へ
組し、謀叛のよし聞、若偽ならば起請文を書て、當所木幡社(備下)に籠よと仰ける、
列座の者とも承てめく(備下)のせし、いか成者か、かゝる讒言を申上候、是(備下)よりあり
合ものとも、代々相傳の士よて、全二心御座有間敷候、縦御前(備下)を背、重て主
を頼候とも、普代の君を見捨申、誰やの人か目をかけ申さん、下那須へ伺公(備下)
仕候とも、虚言無信の士とて、余も御情(備下)に候まし、乍去異儀仕候得り、座敷の
躰もあやしく存候、其意(備下)おまかせんと諾し申候、謀叛不仕印(備下)は、起請文を
仕り奉らん、神(備下)の正直を以爲體と、いかるを以鬼と(備下)いひ、きやうまんを以て
天狗といひ、嫉曲を以蛇身と云、我等御前(備下)に顯正直、神體(備下)と同せん、若また邪

永正六年六月三日

七七五

永正六年六月三日

七七六

心を以て起請文を仕り、畜生道に永墮在仕り申さん事必定なり、紙筆墨硯
を取出、起請文を書たりける、其文は曰、

起請文

敬白起請文之事

奉對孝綱公、於自今以後、不可野心存、若此儀僞申者、八幡大菩薩、日光三所
權現、宇都宮大明神、殊に當所木幡七社之大神靈、御罪於立所、可罷蒙、今生
之而の弓矢冥加盡、七代來世之而の無間地獄、可墮在仕、依起請如件、

永正六年己巳六月三日

大貫石見守十

大貫備中守十

同兵衛五郎十

同宮内左衛門尉十

油井筑後守久

同雅樂之助十

同源次郎一

同左衛門四郎一

印南修理進十

同左京進十

同河内守一

同右京進久

同主計助十

木幡明神
納ノ内陣ニ

彼等十三人、罪の輕重に依て、假名下より一十、久之三字一字つゝ、被置、重科の
者よりは久之字、是其家續かにかきり可墮罪仕と云儀あり、其家十代を限り
十字、其身一代の一の字置せ給ふ、伯州起請文を取上て御披見有之、神妙な
る仕やうかなと喜給ひて、則氏神木幡の明神の社人、被仰附、内陣に籠給
ふ、十三人の者とも、此起請文をおぼるゝか、本の悪心をひるかへし、相傳の
主、寵愛申ける、是偏に又安藤内か知略よて、終に君臣和融なりふける、
褒ぬ者も無り、鼻、○那須物語

四日、乙丑、延曆寺六月會ヲ停メ、尋テ、之ヲ追行ス、

〔續史愚抄〕

後柏原院中

六月四日、甲午、延曆寺六月會延引、

宗綱公

七月一日、辛卯、自今日被行延曆寺六月會、行事右少辨秀房、向歟、長曆宗綱公

符案

永正六年六月四日

七七七

行事萬里
小路秀房

永正六年六月四日

義尹、内書ヲ朝倉貞景ニ與ヘ、馬ヲ贈レルヲ謝ス、

〔御内書案〕

乾

馬一疋、黒毛、到來候訖、自愛不斜候也、

六月四日

朝倉彈正左衛門尉貞景とのへ

山城成就心院門徒僧原龍、僧原濟ノ不法ヲ幕府ニ訴フ、是日、幕府、之ヲ裁シ、原濟ヲ追放ニ處ス、

〔古文書〕

○二十四
内閣記録課所藏

〔編書〕
自松丹州到來、

寫置者也、雜訴方意見狀如此也、永正六七

城州安井成就心院門徒中與原濟首座相論當院事

如門徒中僧申狀者、由良門徒大震和尚開山以來、住持職輪番在所也、而門徒僧原龍書記相當巡番、拘置之處、原濟首座雖爲他門僧、可再興寺家之由申之、望看坊條、渡證文等申付之處、充其身掠給奉書、佛殿方丈以下同寺領等令沽却之間、龍書記改之、可相渡寺於門流僧原泰藏主之旨雖申付之、濟首座猶令拘惜之條、猛惡至也云々、仍被相尋濟首座之處、寺内沽却之儀、依度々亂并半

住持職輪番
原濟奉書
ヲ掠メ佛
殿方丈寺
領等ヲ賣
却ス
原龍寺ヲ
奉ニ渡
サントス
奉行ノ審
理

濟等、朽損之間、少々代成之、加造營也、次院領賣之段、有子細、還補時禮物入目云々、雖枝葉多、濟首座沽却之條、自問自答也、壞取之、成荒野之上者、可加何修理乎、次賣寺領、號禮物事無證跡、爲他門僧、恣所行未聞濫吹也、至本尊并右大將家頼朝御影者、受俗園塵之條不可然、急可返附之旨被加御成敗、於彼沽却之地者、以非據所爲、永可墮人給之段、宜慮難測之上者、可被弃破歟、次其身事爲惡逆之輩之間、可被追放乎、宜爲上意矣、

永正六年六月四日

對馬守英致〔松田〕

民部丞元久

左衛門丞秀俊

左衛門尉貞兼〔遊佐〕

左衛門尉長俊〔眞方〕

散位時基〔齋藤〕

下野守之秀〔飯尾〕

美濃守基雄〔齋藤〕

五日、丙寅和漢聯句御會、

永正六年六月五日

七七九

七七八

永正六年六月六日

七八〇

〔實隆公記〕

四十

六月四日、乙丑、雨降、及晚霽、○中

今日杜講、月舟和尚參入、○中、事了則退出、○壽桂ヲシテ、杜詩ヲ講セシメラ

明日和漢御會、月舟可參入之由、同申合之、

五日、丙寅、雨降、

今日和漢御發句御談合、四内、二合點、夏庭猶殊勝由申了、

むちへても水をうこらす扇哉

山をみる木のまもすし夏の庭

午時月舟來臨間、則參内、於小御所有御會、

下官、甘露寺中納言、兵部卿、大藏卿、三條宰相中將式部大輔、季綱朝臣、康親朝

臣、爲學朝臣、執筆、僧宗山、壽桂等也、御發句夏の庭也、入韻壽桂、松籟答薰絃、

三折未終之程、有御小漬、宗山下官、魚味、壽桂請伴也、壽桂西堂同折敷、予等四

方也、重種役送、月舟之前源諸仲給侍也、未及斜陽、終功退出、尤有興云々、

六日、丁卯、霽、○中遣使者於明、在法師許、勅免珍重、昨日來賀之儀謝了、

〔實隆公記〕

四十

六月五日、丙寅、雨降、○中

宗鑑勅免、安禪寺宮申御沙汰云々、今日稱禮來、候御所之間不調、

安禪寺智
圓女王ノ
御申沙汰

參仕ノ人
々々
執筆五條
爲學
入韻壽桂

御製

六日、丁卯、霽、○中遣使者於明、在法師許、勅免珍重、昨日來賀之儀謝了、

○明重、勅勘ヲ蒙ル日、詳ナラズ、

法印源榮ヲ、天台法華會廣學豎義探題職ニ補ス、

〔宗綱公記〕

宣下

法印源榮誠惶誠懼謹言、

請殊沐洪慈、因准先例、蒙廣學立義探題職宣旨狀

右謹窺故實、効微望者愚夫、於不能者聖君、天台法華會探題職、正三人、副二人、

以五口爲員、以宣旨爲格、頃迄三闕、可謂缺典、源榮過加住學生、猥列名僧班、勤

仕清涼殿勅願兩度、預參等持寺御講三般、至若東西勸學講、左右精義座學業、

功績不無獲也、唯恨爲蹶二會三會之講匠、未拜大堂大科之探題也、是則世乏

外護之緣、身失前途之策故也、但數十年間、證祐、賴教、々意、慶意等、不逮遂講、直

許判斷、明王之舉弗苟也、豈不亦幸而免哉、伏乞天慈、是非於前件例、謹以欲請

處分、不耐懇款之至、源榮誠戰誠慄、死々罪々、謹言、

永正六年六月日

正三人副
二人

源榮狀狀

永正六年六月六日

七八一

永正六年六月六日

獻上

宣旨

法印大和尚位源榮申請特蒙天恩因准先例被補天台法華會廣學堅義探題職事副款狀

依仰請

右宣旨早可令下知給之狀如件

六月六日

左少辨伊長(甘野寺)奉

進上(松木宗綱)中御門新大納言殿

返獻

宣旨

法印大和尚位源榮申請自餘同職事申詞

依仰請

右宣旨早可令下知給之狀如件

六月六日

權大納言宗綱奉

宣旨

左少辨殿

〔壬生家四卷之日記〕一

六月六日

符集宣旨一枚中御門新大納言

法印大和尚位源榮申請蒙天恩因准先例被補天台法華會廣學堅義探題

職事副款狀

右宣旨早可被下知狀如件

六月六日

少辨判

四位史殿

此成柄不審々々

宣旨

左辨官下延曆寺

應令法印權大僧都源榮勤仕法花會廣學立義探題事

右得彼源榮今日奏狀稱謹窺故實効微望者愚夫於不能者聖君天台法花會探題職正三人副二人以五口為員以宣旨為格頃迄三闕可謂缺典源榮過加住學生猥列名僧班勤仕清涼殿勅願兩度預參等持寺御講三般至若東西勸學講左右精義座學業功績不無獲也唯恨為蹶二會三會之講匠

永正六年六月六日

永正六年六月六日

七八四

未拜大堂大科之探題也、是則世乏外護之緣、身失前途之策故也、但數十年之間、證祐賴教、々意慶意等、不逮遂講直許判斷、明王之舉弗苟也、豈不亦幸而免哉、伏乞天慈、是非於前件例、謹以欲請處分、不耐懇欸之至者、權大納言藤原朝臣宗綱宣、奉勅依請者、寺宜承知、依宣行之、

永正六年六月六日

修理東大寺大佛長官左大史小槻宿禰判奉

少辨藤原朝臣判

謹請

宣旨事

法印大和尚位源榮申、請天台法華會康學堅義探題職事、副欸狀
右宣旨早可令下知之狀、謹所請如件、

永正六年六月六日

大史小槻時元請文

〔實隆公記〕

四十一 五月廿三日、甲寅、雨降、略

良秀大德入來、源榮探題職事、有相談之旨、

○傳燈大法師圓俊ヲ、兩法華會來講師ト爲スコト、便宜左ニ合敘ス、

〔宗綱公記〕

宣下

延曆寺

請殊蒙天恩、因准先例、以傳燈大法師位圓俊、可爲兩法華會來講師由、下賜宣旨狀、

右謹考案内、上名簿肇朝選、學者之常者也、圓俊圓宗機熟、性具眼穿、苟存昇進、擬講所學、伏請天恩、因准先例、以件圓俊可爲來講師之由、欲下賜宣旨、仍勒事狀、謹請處分、

永正六年六月 日

都維那法橋上人位言全

寺主權少僧都法眼和尚位眞秀

上座法眼和尚位兼祐

獻上

宣旨

延曆寺申、請殊蒙天恩、因准先例、以傳燈大法師位圓俊、可爲兩法華會來講師由、下賜宣旨狀、副寺解

永正六年六月六日

七八五

圓俊ヲ兩法華會來講師ト爲宣下解狀

永正六年六月六日

仰依請

右宣旨間、可令下知給之狀如件

六月十三日

進上 中御門新大納言殿

左少辨伊長(在勸寺) 奉

七八六

返獻

宣旨

延曆寺申請自餘同前職事詞書之也

右宣旨早可令下知給之狀如件

六月十三日

左少辨殿○壬生家四卷之記異事ナシ

權大納言宗綱

〔壬生家四卷之日記〕一 六月十三日

謹請

宣旨事

延曆寺申請蒙天恩、因准先例、以傳灯大法師位圓俊、可為兩法花會來

講師事、副寺解

右宣旨早可令下知之狀、謹所請如件

永正六年六月十三日

大史小槻時元請文

大法師圓俊

左少辨藤原朝臣伊長傳宣、權大納言藤原朝臣宗綱宣、奉勅件人宜為天台兩法花會來請師者、

永正六年六月十三日

修理東大寺大佛長官 } 判奉

延曆寺

甲斐永昌院僧文英一華寂ス、

〔廣嚴大通禪師謔語集〕四 一華英禪師傳

廣嚴第二祖甲之永昌、德嚴與武之天寧為始祖、

禪師諱文英、字一華、嗣法雲岫、甲斐州山梨郡竹森鄉人、姓源、武田氏族惠光寺(武田光守)周檜第二子也、母夢于金嶽神龍入懷有妊、父以仕官伊洛、人皆疑之、迨其生、器體鮮明、骨相不凡、左脇下有鱗文、父仕官暇歸鄉館、見兒喜甚、及長、父問云、爾與

永正六年六月六日

七八七

武田光守
ノ第二子

出塵ノ器
アリ
俊翁ニ就
キ剃髮ス

一州ニ參
ズ

吾寶ニ參
ズ

永正六年六月六日

七八八

眞寶、豈不喜耶、兒云、財寶有盡、我與不盡寶、父云、汝以何爲不盡寶耶、兒云、我所
欲寶、以智惠爲一生受用寶、父知其銳利聰敏云、此兒有出塵器、宜爲緇流徒、乃
獎登鹽山(山嶺也)、依俊翁灑掃、年十有三出家落髮受具、未充廿歲、合山舉稱衆中麟鳳、
一日入方丈告辭、翁云、汝甚處去、師云、東關、翁舉拂云、天網恢恢、不疎漏、汝作麼
生去、師云、大鵬展翼、不落獵人手、翁云、汝行脚諸方、撞著此無面目底、急急歸來、
與我一掌、師便禮拜去也、遍參東海北陸禪林、而飽受於鉗鎚、徑參(上野)之雙林於
一州(正伊)、州問云、後生發足甚處、師云、甲之鹽山、州云、彼地說何法要、云、彼地無說得
底法、州舉拂云、孰若遮個、云、似卽似、是未是、州云、見何道理、恁麼道、云、我遮裡無
如此閑家具、州打云、草賊大敗、云、昨日棒頭今日不痛、州咲云、我王庫爲賊被劫、
師便禮拜開粥過夏、到于自恣日、與衆去、往于野之中禪山中、住庵三年、便到于
豆之龍巢、參吾寶和尚、寶問、汝自甚處來、云、甲之鹽山、寶云、幾時離彼、云、七年前、
寶云、爾來掛錫何地、云、金環振空、未得安身處、寶云、今時叢林佛法、浩浩地沙還
飽滿也、否、云、美食不中飽人喫、寶云、遮裡有無味禪、如何喫著、云、我不喫、恁麼茶
飯、寶云、汝割(也)利留於錫參堂、乃在寶側、巾瓶三年、偶告辭、寶云、汝去甚處、曰、鹽山、
寶云、汝半途歸鄉、宜倚龜山(於龜山廣院也)龍、必有機緣、便禮拜歸鄉、登山見俊翁當面立、翁云、

歸郷シテ
宗龍ニ參
ズ

密印ヲ受
ケ廣嚴院
ヲ繼グ

汝久行脚諸方、飽法味也、否、云、飽亦可吐却、翁卽喝、云、生鐵鼓子擊不響、翁云、恁
麼恁麼、師禮拜、翌日呼師來、云、我老、汝宜倚龍和尚、大有所得、師禮辭、徑到龜山、
龍一見、潛知其法器、差著炊爨、師日用純篤也、一日、岫過庫房、逢師孤擇菜、岫云、
汝在於此若干時、云、一年餘、岫云、擇菜洗米之外、有甚麼所務、云、力用工夫、岫云、
工夫圖甚麼事、云、欲作佛、岫云、作佛甚麼用處、師茫然、岫便摩頂、云、眞擇菜漢子、
師於此心憤勵、志日夕不寢、偶、岫上堂、僧問、如何是衲僧出身處、岫云、風吹柳絮、
毛毬走、雨打梨華、蛺蝶飛、師在傍脫然、到脫具威儀、詣方丈、卽呈偈云、時々擇菜
中、求佛狂論功、識得出身句、花明柳絮風、岫云、個擇菜漢子、大事了畢矣、隨侍年
久、受密印、遂追岫之歿、應合山請、繼席於龜山、法幢興隆、丕唱宗旨、舉世緇素、走
風者甚多、或云、東崗有沼池、白蛇潛伏、不知其幾千歲、待師法化、盛便化立身、到
師面前、師云、汝何處來耶、答云、某甲非人也、和尚大慈大悲、除我業障、使得度脫、
師云、與麼現本身來、爲汝說與拔苦法要、女人低頭去、須臾現白蛇形、橫身於池
邊、老松揚首於法堂、戶牖、浩水湧出、恰如江河、茲時當孟春元旦、到今山中、三朝
之行事、鎖戶牖密行、寔有由、師密說法要、以拄杖扣頭三下、云、去々、白蛇低角卷
水去、翌日、女人到師前禮拜、云、昨日聞和尚說法要、卽解脫、離潭水去、願受於戒

永正六年六月六日

七八九

永昌院ヲ
開ク
紫衣並ニ
禪師號ヲ
賜フ

徒弟

入寂ノ傷

讚

永正六年六月六日

七九〇

法外護法化、又誓除祝融氏災、師聽之、女人忽化去、不知去所、今傳曰白蛇池、開山於甲之永昌、兼武之天寧、時（後脫カ）柏原天皇永正三丙寅年、勅特賜紫衣并神嶽通龍禪師號、有一僧來參、便問如何是和尚家風、師云、禪影雙眉如竹瘦、道心一片與松閑、僧云、乍有客來時如何、師云、破瓶茶熟君須喫、寒寶香空我懶炊、師為人朴篤、不喜偉侈、清標孤操、不可攀、乃趨出、足下於自山菊隱、松澗、無敵四哲、乃授法印、各開於一峰、住山大唱師法、密付甚多、化緣既知終、告衆云、我欲入無爲鄉、大法千鈞、能荷勿容易、即書偈云、八十五年身此我、如今脫却臭皮裘、踏翻海嶽無閑地、俱見瀉山爲牯牛、擲筆歸寂、茲時永正六己巳年六月初六日、壽齡八十五歲、法臘七十有一年、建塔於本山東岡矣、

贊云、

華開覺苑、菓熟劫外、神龍見入、懷人咸感、脇下有鱗紋、王麟露蹄、賞一角在、眼裏靡筋、橫擔柳栗、搜諸方深淺、未親坐破蒲團、飽無味禪、爲家珍、三回登吾寶室、入虎穴擒虎兒、能有幾人、廿歲侍雲、岫席投龍淵、奪驪珠、不顧喪身、彈沒絃琴、諸西河濱、吹無孔笛於兜巖頂、聲價世傳、稱三藏主、橫行寰界、勢振々、脚尖頭躍出四哲傑、克家子聚首、恂々、開山於永昌、錦簇々、舒席於天寧、花芬々、（〇）

本洞上聯燈
錄異事ナシ

〔永昌院舊記〕龍石來由古話傳

夫龍石名元也、就非情而闡化場、倚非所而建濟基者、其斯此事、案開祖文英禪師之云、爲可謂妙焉、蓋彼石有此山、天然寶器、而是世界成劫、爲始壞劫、爲終、就中一居始末、豈孰能有知者矣、師耳獨善究其由致、以而成名之、復開地之宏作、大法化城也、誠玄妙至極、堪云、抑當山、自古不動、尊緣迹、于今將堂平名所存在、其根興起、康平頃、泯絕、永正際者哉、然其起始、兼廢盡、凡評四百六十年餘、歟、而啻以現驗、餘音相鳴、遠于世續、說、遐徵、流今、代耳口也、察甲斐源氏、初開七十年、許、而移國都於石和、築別業於岩下、（此村信武也）屋敷云、地名有、結山庄於乾嶂、而東屋以北至兄川、中間山谷、乎定遊狩地、（八百八谷名尙殘）不動堂所孕其際、因茲狩山、不動號唱、但聖境傷害、可禁斷焉、金言哉、諸法皆是、因緣生佛語、其因緣盡、故滅灌絕矣、而直指之法、復興歟、故開祖也、改山於龍石、號寺於永昌、根者武田、（文明年中）十六代主刑部大夫源之信昌、公發願、御嫡子信繩、公創業焉、然請始祖、乃以師、頃師法螺震幽退、殆達叡聞、薰賜特辱、勅許紫衣綸旨、及被宣下、神嶽通龍禪師選號也、開創以來、天保至迨度、曆年三百四十餘、許、傳燈三十三代矣、以開山餘光、定臻鷄足

名遠近ニ
震フ

永正六年六月六日

七九一

永正六年六月六日

七九二

出定師字一華號文英姓源氏、武田孫、御父左馬權之介源光守公也、公乃信昌公御叔父、東縣之高森鄉居住、公御生來病弱、殊幼歲喪父、依母兄慈育而成、長也、以微力故著冠頃下飾、入道號惠光寺周快、而後稍壯健、力勇具足、猛威抽他、世喚三軍長、國君信昌公、天性聰明、政道寬仁、名將也、因國內民子、悉伏風化、暫還昔、仍稱武田中興、然族中親可為股肱者、孤光守公之耳、依之遣光守公住高森鄉、分附十五箇村、而且令守東武間道、且使弼公民政事、兼光守公尋常受質、仁厚而丕得民志、佳聲又洞達矣、然天武已來、鬪諍流濫、陵地風波、大者吞小、長者捲短、四海遠近中、片鄉無靜地焉、其中四至輕路成、恆得平正者、獨甲斐已也、于時應永三十年癸卯春、將軍足利義量公任職、高森殿為祝使上京、翌年辰冬歸國、燕居而迎乙巳新春、祝歲嘉儀、已為四方見春光、出庭上、觸門松、不思落地頭巾、從臣皆奇忌而作凶兆焉、扱中國亂世不默止、正月下旬、最早為催促軍勢、奉書到來、高森殿當任戎衣上洛、臣下不勇從軍、為無是非、思落帽不吉矣、然上京發行所々、而兵作將頗在戰功、後於三州長嶋討亡、近臣兩三輩、主君伴亡骸、打急鞭奔歸、時室家妊懷、殊臨月、主公絕亡骸、自聞注進委細、哭泣剋胎、而不慮出產、即座御臺所命終、家中老若何事神氣、彼是錯亂、而或廢忘、或悶絕、無初湯取調

幼ニシテ異相

野尻土佐ノ撫育
雨宮萩原等警護ス

度者、諸共惘然耳、稍久、獨心附、野尻土佐、命室漸奉取上兒矣、斯悲嘆尙在、餘殊無詮、衆臣議而定送葬營辦之趣、收今乙木山作御廟所、而一家中、斷不期貽水山融落蜀犬吠日歎哉、各失依怙、悲號離散者在、或蟄居私宅者、復多焉、傳聞不凡子必異生也、其骨相耳、耳輪圓大、頂骨秀奇哉、左脇下有鱗形紋、畫（鱗カ）詳明焉、隔日左右耳語、黃金澤龍神之子也、或亦曰、三鼓地大蛇化美夫、而夢交入身矣、或又謂玉之宮、神明化現彼美夫焉、爾云所以主君留主中、以妊娠也、從然野尻種殖為業、以而撫育稚君、雨宮、萩原、各與力警護、而御廟所于朝暮勤仕、勝生前禮、故取常隨給士意、曰彼於御伽山、終作墓墳地名、忠節信義溢中、言露必外者、夫此云之歟、然往者日薄、曆替人代、冷煖移事百歲許、而事緣自落地、君臣忘昔、御伽改乙木、誠時代颺風、各不思慮弊也、先云蜀犬吠日者、蓋誹後人短智者歟、然其蟄居面々、君主之落巾、不詳結塊胸臆、深嘆忌、而與禁止正朔門松、年來不飾云々、捨古趨今也、忌緣自然磨滅、元蹤跡沒、彼野尻萩原子孫、早晚改變靡世風、近來、通用松飾、孤雨宮末葉之已、不變忌式、宜哉、當賞今古忠士之裔者也、日往月來、最早光守公七次期曆來、稚君亦七歲矣、當征（詳）月命日至瞬時、衆臣追薦伸禮、供奉稚君而詣御廟所、兒君慇懃奠香、野尻傍而號哭、仰墓言上、御息無恙成

永正六年六月六日

七九三

永正六年六月六日

七九四

△出家ヲ望

侍臣諫ム
ズルモ肯カ

進退律度
アリ

文英ト名
ク

長、兩奠(圖カ下同ジ)霽知見、身振聲戰、不覺滿座悶泣、稚君變顏色訝之、土佐始述御兩親稚君從來、直叫哭懊惱而卒倒、面々亦驚怖、而種々宥介抱、神氣漸々平復、收淚自正座、而告左右云、我無父母、家勢也衰、如何立身、唯我出家、侍士面々互見合愕、然先勸歸館後諫言、君是御幼稚、武田裔流當家之御嫡子也、何卒無恙在成長、早繼父公業迹、再興家名、必勿出家、異口慰數度、不從敢臣詞、各幼君志堅而不可奪、誼定伯君窺石和城主、君在其志於感賞、許而令應兒求、仍即登鹽山向嶽禪刹、就二祖俊翁禪師、然雖在驅鳥列、進退周旋、頗如在律度、而土木形骸、心腸鐵石、老衲却吐舌、且成人可待品焉、年已十三才、剃染具戒、被案名文英、于時父母正諱、願下山詣廟、捻香讀經、以而御自身披露方袍圓頂樣、尤野尻等面々、以前萬般設儲矣、然即席議臣下、改慈父遺殿而擬(イ)作佛宇、號云大樹院、乃本尊不動尊焉、此諸臣所望像惠光寺殿力戰忿怒之形貌、臣便當今給仕、且思在世昔日、爲使名實垂不汚之修設者歟、頃未乙木山墳基地、唯堆土饅頭之已、邇爲狐狸依止、師深悼之、與親臣共磨石、高三尺五寸、五輪形二基造、后亦左右同丈石碑二十四基彫立、是又忠臣戰亡者誌、而皆其子孫所立也、廟境古來廣博、而不斷分涯、寶永再檢打縮、纔免一畝十二步、野尻土佐法體誌開基一字、號慈照院、

武田信昌
資田ヲ増
附ス

爲曹洞宗、中絕再建後、隸惠林寺、寶樹院、延命院、共護持免地、口碑惠光寺殿茶湯免也、師侍巾瓶首尾十三年、在師命而遊方八年、訪諸善無不扣區也、晚參豆寶禪師、則大島最勝院焉、寶老獅子吼偉震、爰有鳳雛三弟、各俱來本州、皆德光宏、始祖大刹名巒、其一興因、二廣嚴、三傳嗣矣、師辭而還故山、肝別寶老曰、子歸國參妙龜岫、必有所得焉、即辭歸鹽山、禁足絕交、煉工夫累年、翁老有時云、師曰、我老子宜倚妙龜岫公焉、師諾而即詣中山、岫爲器試命擇菜、師安居三年、在時上堂有一僧、出問、如何是衲僧出身處、岫老曰、風吹柳絮毛毳走、師在傍欬然省、上堂了、登方丈、呈一偈云、雨打梨華蝶蝶飛、時時擇菜中、求佛狂論功、識得出身句、花明柳絮風、岫老法器、而令師許入室、師乃受衣法、別居大龍庵、酬侍已二十年許、岫禪師及八十又餘示寂、即文明十戊戌歲臘月九日焉、內外侍衆進于師嗣席、固辭不應、諾終國主命、并開基、依請不能止受席、而化益道風尙盛、而師吹化及幽域、所稱甲斐文英藏主、先師已來傳燈分數、到餘國迄三百餘、刹中雖大小在、皆法界梵宮矣、蓋德澤之餘潤也、伯父信昌公歡喜、增附資田、令參禪海會、無供給乏少焉、師在席多年、皆永正始、德吾讓席、暗迹於狩場之山林、禪定石座、而起歷覽林際、竟究有勝界、將而宜立禪榻、山頂繕靈鷲之威容、谷間礮狀降龍橫、而頭面睨西、古

永正六年六月六日

七九五

永正六年六月六日

七九六

木角峙(良方)臣藤雲洑、金鱗映落泉、而紋畫鮮明矣。此之石化龍歟、彼之龍化石歟、古來于今無名者、師之耳始一省號龍石、而以名此山焉、亦座禪石從來如為設者、上面平縱三間橫九尺許、以應三界九居數歟、袈裟掛松(高カ)商三大計、蔽如蓋石、誠石樹自然生契者也、豈何巧為禱定宇、戒體與松等色、性無作而不求自得、妙有大事畢了、岐堪布一座具、師開寺之心於是乎決、斯此松石永昌根基、寺珍之第一可謂也、然昔日如經營者、國主源君手繩、師亦定墨、法印布施山林、類同佛在世、彼祇園精舍制規、而殿堂忽成立、法燈巍々照益、於大守亦附與供田數百貫、熟地及好叢山地、以充佛食、又以而給材薪焉、鴻業既成、莊嚴全備、唯所缺用水之已、師兼日祈請之乎、一之宮明神、後一夕老奴語告師曰、我今日行西岡采薪、孤午飯幽岐、見邊地、面下欵然出水、潔淨而如故有生物、且與且怪、乃啜試、甘冷齊清水也、暫時增盛為尋泉、希代珍水、養老類談矣、真梵宇一新之瑞、以備者焉、師悉感破顏云、夫萬物從來必有由、當斯淺間明神之所賜、而予所請求矣、可信(今カ)感證在居吾語汝等、當境地軸本無水脈、然斯作寺祈請神明、感應佐以新泉、故令使汝等見此瑞現者、所以大法在神護也、莫必懷邪疑、以非神慮、一衆信服、傳聞人崩角諾了焉、溝之用之、雖早燥又霖中、無敢增減、爾來決無過不及、泉口殊

永昌寺ヲ開ク

清水湧出

信昌卒去

微少、于今流末湛漲如舊古、其地名云大清水也、世盛(襄カ)雖曰萬物之假相、依人雖所招、故有德則增、不德則減焉、近頃世論水利、曰七田水三寺水、然寺不習蝸角、和定而為二分、寺乎無乏少、又田無餘水、是神護之現證、且者開山餘福也、此地洞庭上棚山堂平、下龍之口(ド)因々坂、古相數十株、盤石三五為宮墻、泉湧出傍、石上有石殿、于茲勸請一之宮淺間大明神、斯瑞泉主神而當山水、因鎮護焉、永正貳乙丑今年、勅賜文明十三年辛丑三月也在楓宸宣命、特賜禪師號并紫衣綸旨、而師開堂慶讚、號龍石山永昌禪院云々、同曆九月十六日、武田信昌公御他界、○信昌卒スルコト、二年、即收遺體乎當九月十六日ノ條ニ見ユ、山亦霽名號永昌院、殿前刑部大輔傑山勝公、大禪定門也、後依屈請、師授席於東武瑞泉之瑞湛、移轉武青梅鄉天寧、頃當山古基法印、就師具戒、師將傳海禪源道號、師不日被發駕、故綸旨留彼紫袍殘此焉、而兩三春秋過、皆永正六己巳年六月六日、沐浴淨髮調衣、而端座繩牀、取筆遺偈云、八十五年身此我、如今脫却臭皮裘、踏翻海嶽無閑地、俱見瀉山為牯牛、書了投筆、坦然坐化、兼而源流子徒、集會議茶毘趣向、設修式了、各歸自山、聚化緣道俗、奠供養云々、

永正六年六月六日

七九七

永正六年六月六日

七九八

永昌院開山神嶽通龍禪師一華文英大和尚御系圖
新羅三郎義光四代武田太郎信義十一代
信重 武田伊豆守、刑部大輔、甲斐守、護職

信守 武田甲斐守、刑部大輔

光守 高森六郎、左馬權頭、後出家、號惠光寺周檜、一、開快

住于山梨郡高森鄉、因氏焉、福應寺記曰、武田氏族有高森藏人、奉親鸞上人、之教為僧、其七代惠雲、被歸依國主武田信重、投六男高森六郎光守、以執弟子之禮、謂之周檜云々、

慶岩 高森惠光寺、一、二ノ林

正篁 高森、按善勝俗稱同人歟

一華文英大和尚 永昌院開山

信昌 武田刑部大輔、武田信玄曾祖父也、一條過去帳記、覺阿彌陀佛諸系記、永昌院殿、傑山道稱大禪定門

〔菊隱錄〕

○甲 永昌開山一華英大和尚御影之贊

碧潭忽見一雙眉、非水薄相渠是誰、無限丹青都不識、池邊愛影小師兒、瑞潭首座欲畫予肖像、因問一字、師答曰、不可隨舊塗轍、便掩耳去、不獲止賦一頌焉

永正元 甲 子 三月日

一華老衲

一華和尚拈牌之佛事 馬厰牛欄、龍石山巔、水足草足、便是牽纏、竊以、當山開山前堂上老大和尚者、從洞山第二十三世雲岫真子吾寶嫡孫一華聯芳於五、一灯續燭於千、暗臨濟派脈、一句具三玄、曹洞寢室、細（密方）蜜明正偏、特賜紫伽梨、董永平法席、嘗受鈿斧子、居大雄名藍、雖然與（慶）廣（慶）牌（慶）、這（慶）ク據何位、安牌於舊處云、石牛長臥三春霧、木馬嘶時秋後泉、 永正 甲 子 九月初六日、

〔廣嚴大通禪師謔語集〕

三 二世一華英禪師開光

寂光影裏起慈雲、赫々威儀離見聞、昭耀毫頭正法眼、一華々發九垓薰、

〔菊潭集〕

○甲

甲之山梨縣中河鄉有禪閣、歸依桑門、轉不到處能轉倒、轉不得處能轉得、頗豁達英靈溪也、乃翁雲岫和尚、因名道秀、下視竺乾超裴休之作略、乖欺震旦勝麗老機關、今茲秀就予、需別號、廼鐵叟庵主、蓋取諸法雲圓通秀禪師住真州長蘆衆千人、有全椒長老、至登座衆目笑之、無出於是、秀出拜趨門、如何是法秀自己、全椒笑曰、秀鐵面乃不識、々自己乎、秀曰、當局者迷之儀也、豈管法雲事、庵主鐵眼銅睛、拈向上鉗鎚、打就釘背鐵舌、入作家爐、鑄成、不知幾州鐵合成一老人、

永正六年六月六日

七九九

永正六年六月六日

鐵叟記在慈而已、

永正龍集己巳仲春上澣日、前永平老衲一華文英書于龜山下、

八〇〇

花岳ノ號
ヲ與フ

青梅野村水草新、牛欄馬屋養閑身、花山何景桃林底、背上乾坤摠不拘、夫以賢劫四在釋迦牟尼佛第五十五世直下六世孫、一回董席、今牌上書脇下五字、諸人呼作祖師圖、卽是喚作水牯牛、卽是置牌揖云、散髮夷猶誰關係、大平無事酒顛人、大江枝派何角重、親公法道傳々死、老教得孫吳謀、加之和歌禪話無不領略、乃字曰花岳、蓋取者梵王靈山會上、以金色鉢羅花獻佛、爲群生說法、世尊登座拈花示衆、人天百万悉皆罔措、獨在飲光尊者、破顏微笑、世尊云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相微妙法門、不立文字、教外別傳、分付摩訶大迦葉矣、勇士峭峻機峰、比於五嶽、則別有何泰山哉、故以說以證之者乎、

〔參考〕

〔甲斐國志〕

山梨郡万力筋 龍石山永昌院（曹洞宗） 同宗、中山廣嚴院末、本州常法幢七刹ノ一ナリ、御朱印寺領四十八石九斗六升、○中開山神岳通

永昌院

天寧寺

龍禪師、文明中草創ス、開基武田信昌、永正二乙丑年九月十六日逝ス、永昌院

殿傑山勝公、大禪定門ト諡ス、同五郎信繩（法諡年）他ニ異、牌子二ヲ置ク、

〔新編武藏風土記稿〕

三田領根多摩郡三十天寧寺（高峯山ト稱ス、曹洞ノ院ノ末、文龜年中此地ノ領主三田彈正平政宗起立ト云、本尊釋迦木ノ坐像長三尺許、御朱印寺領二十石ヲ附セラシ、末寺凡三十七院ヲス、開山ト云、華文英ト云、）

七日、（戊辰）祇園御靈會、

〔實隆公記〕 四十 六月七日、（戊辰）晴、

祇園御靈會也、人々見物群集云々、

十四日、乙亥、霽、午時雨降、行水念誦、祇園御靈會如例云々、

〔建内文書〕

○山城 （案） 永正六年六月八日安文、

昨日七日御祭禮、諸神方等種々雖及訴訟、一昨日之御下知ニ、以筋目申宥、無爲無事奉成神幸候條、天下太平御祈禱不可過之候、殊御神馬一疋參候、目出度候、彌如先例、御申達可爲太慶候、此等趣可然之樣、御披露所仰候恐々、

永正六年六月八日

顯增

永正六年六月七日

八〇一

幕府ノ下
知ニ依リ
諸神方
訟ヲ熄ム

飯尾近江守殿

昨日御神事諸役者種々雖及訴訟一昨日之御下知以申宥無爲無事奉成神幸候天下太平御祈禱不可過之候可然之樣御披露所仰候恐々謹言

六月八日

顯增

横川掃部助殿

十日辛未義尹禁中小番二候入

〔公卿補任〕

四十

權大納言從二位源義尹尾利四十征夷大將軍六月十日御參

内小番御勤仕也

〔實隆公記〕

四十

三月五日丁酉晴略中

阿野季綱
義尹參候
三條西實
隆二議ス

阿野相公來臨室町殿禁裏小番可有御參之事連々御本意之事也雖一度爲御冥加可有御參之由今日欲被申入如何々々尤神妙但當時皇居體不相應歟何樣上意珍重之由申之了則參候申入云々

六月八日己巳陰時々雨略中

阿野來臨明後日室町殿御番可有御參也就其先規之樣被尋申一條冬息前關白

實隆義尹
參候ノコ
ルト申入
先例ナニ
尋冬良ニ

西園寺公
藤ニ尋メ
記録紛失
見ニ依リ
見ナシ

冥加ノ爲
メ參候ス
ベシ

萬里小路
秀房ヲシ
テ實隆ニ
ヲ尋メ

參内

之處於御番事者無分明所見兼日沙汰之次第者粗見及之由被申之慥所見大切之由被仰下之更可得所見之由申之自是向西園寺公藤可尋云々後聞他行追而以書狀記錄紛失無所見之由被申云々重而又阿野來臨自一條一紙注進尾利義尹鹿苑院殿任幕以前御參内連々之儀年月等被注之此内御尋事不見不審之由被申云々先以可令披露之由報了重而又來臨所詮雖無分明之所見此事故人口實分明也只爲御冥加可有御參之由也仍只今參長橋局可申入云々此儀尤珍重之由報了就其少々有被談之子細又愚意所存述之已申入之由又來被告之珍重之由申了

及晚以秀房萬里小路内々自禁裏有被仰之子細等同此御參之事也愚意分申之廣隆守光左大辨宰相入來同事也參會之人々事内々可被相告哉之由入魂了

六月九日庚午雨降及晚晴

梳髮左大丞來臨明日御參内事條々被談之

十日辛未霽及晚雨時々降略中

室町殿今日内々小番可令參候給之由一昨日被申入之未下剋御參於御直廬勾當内侍被著衣冠直參小御所給其道自御懸松西敷打板爲沙汰也番小時

永正六年六月十日

八〇三

常御所ニ
候ス
實隆參入
番衆等ニ
盃ヲ賜フ

出御アラ
セラル
邦高親王
御參入
管絃
菊一文字
ノ劍及ヒ
太刀ヲ賜
フ

寢ニ就カ
ズシテ退
出ス
參會ノ人
々々
内々參仕
ノ人々々

義尹別段
ノ忠義ヲ
以テ番ニ
候ス

季綱馬道
ヨリ落ッ

實隆季綱
ニ送レル
書狀案

永正六年六月十日

八〇四

依召被參常御所、有三獻云々、伏見殿御參、三獻天酌云々、予内々可參候之由、有勅定、又季綱朝臣有命之間、扶病氣參入、但不參常御所、此間數刻候宮御方、常御所、一獻之儀畢退出、小御所召集番衆等、近臣并外樣各所參也、被下御盃、今日十荷也、則御酌也、此間予依召參入、各盃酌了後、更御盃入、五度、以御酌被勸、予再三雖辭申、推而被下之、則又愚盃取之、令飲御巡流、此間出御事可被申哉之由申之處、聊爾之間御斟酌也、但予可計申入之由仰也、仍以勾當内侍申入處、則可有出御云々、小時出御、御袴計也、式部卿宮同御參、女中衆被參入、則獻御盃、無程及秉燭、數獻及鷄鳴、人々歌舞頗入興也、有管絃等、被進御劍、又被出御打刀、是常徳院殿御進上菊、其作樣子雖似無骨、叡慮御本望之儀、可被表其趣之條、更無其色之間、如此之由被副御詞、以守光卿被出之、予同仰之旨加助言了、以外御快然御祝著也、凡今日之儀、年來御本望之由被稱之、入御之後、人々退出、室町殿遂不令就寢給、待天明御退出云々、慇懃御沙汰也、今日參會人々、中御門新大納言、甘露寺中納言、大藏卿、伯二位、左大辨宰相、三條宰相、中將、季綱朝臣、冬光朝臣、雅業朝臣、言綱朝臣、伊長、内々參仕人々、四辻新大納言、今日當番也、稱番頭、於小御、爲學朝臣、所盃酌之時、被始新、孟云々、爲學朝臣、

入夜、公音朝臣、源諸仲候之、

松殿三位、忠顯、行季朝臣、兩人初度、御前、室町殿御酌參入、則退出、中、凡武家

小番御參事、鹿苑院、殿雖有其沙汰、慥不得所見、雖然就□□別段御忠義如此、

尤神妙事也、條冬良、桃花坊勘例、鹿苑院任幕以前度々御參内事、一卷被注獻之、但猶

有漏脫事歟、

十一日、壬申、晴、略、中

早朝以使者申遣、昨日儀於阿野許、昨夜於御前自東面馬道落、打損額云々、仍今日不出頭之由聞及之間、相訪之處、無殊事云々、又自彼同有使者、自御所有如何奉書、昨日事條々被仰之、則以書狀申遣阿野許、又晚頭自室町殿有御使、胡阿、條々祝著、所勞加養生、以參上可申入之由申了、同又此事以書狀申遣之、阿野許、

十三日、甲戌、晴、略、中

抑一昨日遣阿野書狀之案、大底載左、

今朝且以使者申候、又御使爲悅候、幾回申候ても、昨日御參内之儀、誠一段御忠義、外聞實儀珍重、可爲末代之美談候、感悅不堪、拊舞諸人心、中同前候、

永正六年六月十日

八〇五

義尹ノ候
番ハ末代
ノ美談

月下下姿
ノ参内ノ
御沙汰ア
ルベシ

足利義滿
以來諸家
足利氏ニ
稱禮ス

月下参内
延引

永正六年六月十日

八〇六

叡慮快然之御儀、今朝も女房奉書、同新大典侍來臨、何とも御言の葉こも不被述盡候趣、再三被仰下候、御祝著之餘及御數盃、頗無御正躰候つる、御折用事も何と哉らん御斟酌ある様候しうとも、御心の色をもさめて、おぼしめされ候御事にて、且、御醉狂之様にて、如何被思召候らんかと勅定事候、兼又御約束のどく、立待居待のわぶり、兩夜のうち、月下御下姿にて御参内事、必可有御申沙汰之由被仰候、此條々能々可有御披露候、抑夜前以外御慰懃の御儀共にて、返々迷惑仕候、王官ノ公界の事候間、不可依賢不肖、被執思食之條、誠以難有上意候、雖然鹿苑院殿以來、諸家悉家禮申候うへ、不依官位之淺深、奉致一段尊崇之禮之條勿論候處、御沙汰之次第頗冥加あき様にて迷惑仕候、向後相搆て、如夜前御座あど、御揖讓の儀あるへうらはる事にて候由、以御次御披露可爲本望候、今日にも祇候仕て、旁申入度候へ共、持病再發様候て、事外窮屈仕候間、今聊加養生可搆参上候、其間之儀能々可仰芳言候、返々昨夜之儀珍重無申計候、一昨日女房奉書、并阿野返事可續左、阿野相公書狀備叡覽、則被返下者也、此上月下御、参事先御延引也、

朝廷尊崇
ノ實

昨日の御さんはい、返々めてさ、はとよ御ちんなどの思もよりまいらせられ候御事、おぼしめし候より候、ぬき目の御さよにて、かやうよてうりをそうきやう申され候御よろこひは、なにと申され候へき事候やらん、御てうとうを入をのしまし候、御心の中さうりなる御おもむき、よくえりまいらせられ候、んすれ、よく御心え候て、つゝへ申され候、んするを、このとおぼしめし候、ありて候、おのゝけ、えうちやくを、さこきををし、うりおぼしめし候、御万いりをよろこひ思ひまいらせられ候、まゝ、く御よのま、いらせをのしまして、あなよ、の御えやうめ、んよてそ御入候つらむと、まゝの御、いあさを、ま、さ、の、おぼされ候御事、よて候、又おぼしめしよら、ま、御、ち、ま、て、万、い、り、候、て、千、秋、万、さ、并、よ、ろ、こ、ひ、思、ひ、ま、い、ら、せ、ら、れ、候、御、ま、く、し、さ、ゆ、も、こ、の、事、の、御、く、ま、い、ら、く、け、い、う、を、お、ぼ、し、め、し、候、御、心、よ、て、あ、ど、よ、く、も、し、を、も、え、さ、并、な、く、ま、い、り、候、て、め、て、さ、く、お、ぼ、し、め、し、候、あ、ま、昨、日、の、御、く、ま、い、御、さ、候、ん、す、る、か、あ、ら、ま、御、万、い、り、候、て、御、身、つ、う、ら、か、さ、く、お、ぼ、せ、ら、れ、候、へ、く、候、よ、し、よ、く、く、申、と、て、候、こ、の、よ、し、御、心、え、候、へ、く、候、し、よ、く、く、

永正六年六月十日

八〇七

永正六年六月十日

ハハされよても御局へ

一昨日尊翰具令披露候、叡感之次第委細申され候、彌御満足御快然候、それよつきて、立待居待之比、月下御下姿よて、必可有御參内之由、先以忝殊ろしこまり入給候、乍去于餘連續もいろゝのやうよ思食候、先今般之事、幾回も辭申され候へく候、例式御斟酌おとみて、いあく候、真ヶ此御分候、御返事を、可然やうよ被加芳言、御ひろう憑入申され候、兼又先夜一段御沈醉候て、御前時宜も、于餘御馴々敷、何と哉申過され候やうよ思食出候へ、御つろしを御迷惑候、これも能々御心え候て、御申候之様可申旨候、猶重可參言上候由、可被洩申候也、恐々謹言、

六月十三日

季綱

左京權大夫殿

季綱

○上略全文ハ、七年四月二十五日、實隆、手兼又武家被候宿侍候、一段之忠寫ノ令義解ヲ觀覽ニ供スル條ニ收メ、

義誠珍重候、御參又目出候、此一兩日所勞氣又發動候之間、不可一二候、謹言、

六月十三日

花押

〔和長卿記〕

二 永正六年巳六月十日、晴、今日御參内、爲小番勤仕也、以小口（御カ）

所爲其所也、先如常於御直廬、長橋、御著御衣冠、其後被參御前、有一獻、其後、被候小御所、男共祇候、外様番衆被召出、松殿三位、行季朝臣兩人被參御酌、即退去、此後被成了、主上更以有一獻、公私沈醉歡娛之儀也、及天明、有御退出了、

〔拾芥記〕

中 六月十日、室町殿禁裏御番始、以鹿苑院御例被參云々、有御酒

宴、子依當番伺候、

〔足利家官位記〕

惠林院殿義植、始義材、又義尹、慈照院贈太政、同六年六月

十日御參内、

十五日、參議從四位上四辻公音、同阿野季綱ヲ正四位下二敘ス、

〔公卿補任〕

四十五 參議從四位上藤公音、二十左中將、六月十五日敘正四位下、

同季綱、三十左中將、六月十五日敘正四位下、

永正六年六月十五日

永正六年六月十五日

〔實隆公記〕

四十 六月十三日、甲戌晴、略 中

及晩彦部國直來、阿野傳語敷地事申入了、粗御心得之由云々、所畏存也、又自身加級事被談之、公音朝臣上首之間、相談可被申之由報之、

十五日、丙子、霽、略 中、抑阿野相公羽林加級事御免云々、公音朝臣同被附上云々、頭中將宣下云々、上卿可尋、

〔實隆公記〕

二十〇 永正六年六月十五日、略 文書

すゑつあはれあそん一さうの事申候、はやこそ御はさ候へくも、もさしうさくおほしめし候、中山康親とよ、御ささ候、高社彦長んする、さ候、高社彦長んをそのあそんつをあきられ候へきとおほしめし候、又やすちうのあそんく包んしゆこう、高社彦長んあまさ候へ、八さの事申入候、高社彦長んさる、いまはきつ候、高社彦長ねとも、きそい申候へ、高社彦長いうよてまつとれつるてよ、うちく、申入候よし申候、高社彦長おうしんあるやう、高社彦長候へとも、高社彦長たりやまのあそんかとは、きとそんち申候、高社彦長うさくおほしめし候、これあうはいまちと五ゐのまきしよてもをうれさく候、高社彦長いう、候へき事候やらん、又八さの事、高社彦長まきふのさゆふとくより所まう申候つる、一けついでき候よし、うねて申候を、高社彦長はしをうれての御はさも、い

う、候へき、さ候、高社彦長の、心えのさめと、うちく、申はれ候へく候よし申とて候、このよし心得候へく候、高社彦長しと。

抄

されよてもの御局へ

〔歴名土代〕

正四位下同公音 同六六、

〔諸家傳〕

三上 公音 同六年六月十五日正四位下、廿九

〔歴名土代〕

正四位下同季綱 同六六、

〔諸家傳〕

二下 季綱 同六年六月十五日正四位下、廿九

〔阿野家譜〕

季綱、元實 同六年六月十五日、三十九才 正四位下、略 上

○白川雅業、正親町實胤及日野内光等、略 位ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔歴名土代〕

從四位下源雅業 永正六正九、

正四位下藤實胤 同六正十六、

從四位上同内光 同六正十六、廿一

同隆康 同六正十六、

永正六年六月十五日

八一

公音

季綱

白川雅業

正親町實胤

日野内光

鷲尾隆康

八一〇

永正六年六月十五日

一條房家

同房家 同六正十六

山科言綱

從四位下同言綱 同六正廿八

飛鳥井雅綱

正五位下藤雅綱 同六正廿八

平松資遠

同資遠 同六正廿八

同家音 同六三十

從四位下同親賢 同六三廿五

從五位下同親世一條殿之上人號法性寺 同六三廿五同廿六侍從

源邦通 同六四廿九

〔宗綱公記〕

永正六年六月六日 宣旨

荒木田興常

度會清秀

已上宜敍從五位下

藏人頭右近衛權中將藤原實胤 奉

進上 中御門新大納言殿

和業家

小野政仲

口宣一紙獻上之早可令下知給之狀如件

六月六日

右中將實胤 奉

進上 中御門新大納言殿

口宣一紙荒木田興常以上宜敍從五位下事早可令下知給之狀如件

六月六日

權大納言(花押)

大内記局

〔歷名土代〕從五位下和業家 永正六六十二

〔小野文書〕〇二出雲

口宣案

上卿中御門新大納言

永正六年七月十九日 宣旨

正五位下小野政仲

宣令敍從四位下

永正六年六月十五日

永正六年六月十五日

藏人頭左近衛權中將(中出)藤原康親 奉

八一四

皇大神宮
主等解
狀

〔內宮禰宜荒木田守晨引付〕上

一一禰宜守則執印刻、任先例、位階款狀等

雖捧申、正五位下ヨリ從四位下望、傳奏御不審、然間惣官ヨリ神宮ニ、正五位上除申之由、及度々雖注進、強而御不審ニテ、經多年間、解狀注文等成上申、祭主三位殿ヨリ可被注進由、度々被仰下訖、

皇太神宮神主

注進、欲早被經次第上奏、因准先例、被舉敍一禰宜守則於從四位上、彌抽御祈禱丹誠間事、

副進 別紙注文、

右謹各檢故實、太神宮禰宜職者、天武天皇御宇、以志己夫自被始置以來、晝夜御祈禱、忠勤天下第一之器也、仍自二座昇一座刻、關加階者、聖代明時佳例、神宮古今通規也、然則任例、去永正二年雖捧款狀、○款狀今見エズ不達上聞、空送年月之間、愁訴之趣、度々注進之處、正五位下與利、敍從四位下先例、於可注申之旨、被仰下之由、依祭主卿下知、巨細以別紙注文令言上訖、苟一禰宜守則正五位下也、殊遷御時者、忝神體奉仕重役、年中繁多祭禮、每月連綿神事、無怠奉祈聖

永正二年
狀ナ捧
カモ上
聞ニ達
ズ五下
正五位
ヨリ從
位下ニ
スルノ
例チル
ス先

運長久天下泰平者哉、云忠勤、云佳例、神宮之理訴、爭被弃捐乎、望請早關從四位下加階、彌致御祈禱忠勤矣、粗注進言上如件、以解、

永正六年六月

大内人——長久上

禰宜正五位下荒木田神主守則

禰宜從五位上荒木田神主守晨

禰宜從五位下荒木田神主守兼

禰宜從五位下荒木田神主守武

禰宜從五位下荒木田神主守幸

禰宜從五位下荒木田神主守保

禰宜從五位下荒木田神主氏秀

禰宜從五位下荒木田神主守直

禰宜從五位下荒木田神主經長

禰宜從五位下荒木田神主守恆

太神宮正權禰宜等、御祈禱恩賞一級加階次第事

永正六年六月十五日

八一五

永正六年六月十五日

勘例

禰宜外正五位上荒木田首名

神護景雲元年稱德天皇御宇依太神宮上見五色雲為祈謝敍禰宜內人諸社祝部等一階其時外正五位下與利敍位上

禰宜從四位下荒木田神主行真

天祿四年圓融院御代自正五位下敍從四位下其後禰宜荒木田神主延利寬仁元年七月十一日以行真之例正五位上於除位下與利敍從四位下一條院御代以來二所太神宮定例土志古今之間爾外正五位上首名之外者正五位上禰宜同權禰宜於當宮一人毛不可有之外宮例

近例口宣并次第施行案文兩宮禰宜十九人加階後花園院御代御祈禱時恩賞也自往昔雖有數百通不違毛舉仍十九

通之內兩宮各一通

上卿德大寺公希大納言

享德三年十二月五日 宣旨

正五位下荒木田正棟神主

宜敍從四位下

藏人頭左中辨藤原資世奉

享德三年十二月五日 宣旨

正五位下度會常晨神主

宜敍從四位下

藏人頭左中辨藤原資世奉

兩宮禰宜等一級事依致御祈禱專一被成下候早々可令下知給也謹言

十二月七日

名判

祭主三位殿藤原清也

官狀

太神宮兩宮正權禰宜等加階事依御祈禱賞十九人交名見各被推敍訖位記未到之間且可從神事之由為傳奏日野前大納言勝光奉行被仰下早可被下知兩宮禰宜等之狀如件謹言

十二月七日

左大史在判

永正六年六月十五日

永正六年六月十五日

謹上 祭主三位殿

內宮禰宜等加階事、依御祈禱賞宣下畢、口宣並官狀如此、彌可抽御祈禱精誠之由、各可被下知狀如件、

十二月十七日

神祇大副在判

大司宿館

加階事、依御祈禱賞、被宣下之由、口宣並官狀祭主下知如此、仍獻之、彌可抽御祈禱精誠之旨、各可令存知給候、恐々謹言、

正月一日

大宮司判

謹上 內宮長殿

祭主下知、宮司告狀、外宮別紙、不及于具注、仍略之、

右自正五位下、被敍從四位下之條、炳焉也、仍古今勘文、注進言上如件、

永正六年六月日

荒木田守
晨款狀

皇太神宮二禰宜從五位上荒木田神主守晨解申、進祭主三位殿事

請殊蒙鴻慈、因准先例、被舉敍正五位下、彌抽御祈禱忠勤狀、

祈禱ノ恩
賞足ラズ

右謹考舊貫、太神宮禰宜者、朝廷奉祈之職、皇家清撰之器也、預加階榮爵者、聖代明時佳例、神宮古今通規也、爰守晨、去文明十年六月十八日、自被舉補禰宜職以來、朝仰天道、夕祈聖運、每月連綿之神事、年中數ヶ度祭禮重役、三十餘年之間、雖致忠勤、當時御祈禱恩賞不足、而苟從五位上也、望請早關正五位下加階、彌抽一天安全四海平定御祈禱丹誠矣、守晨誠惶誠恐謹言、

永正六年六月日

皇太神宮二禰宜荒木田神主守晨 款狀

荒木田守
則
宣旨

上卿中御門新中納言

永正六年七月廿六日 宣旨

正五位下荒木田守則

宜敍從四位下、

藏人頭右近衛權中將藤原實胤 奉

永正六年六月十五日

永正六年六月十五日

八二〇

同守晨

上卿中御門新大納言

永正六年七月廿六日 宣旨

從五位上荒木田守晨

宜敍正五位下、

藏人頭右近衛權中將藤原實胤 奉○內宮引付 異事ナシ、

〔壬生家四卷之日記〕 一 七月廿六日、

〔出下請符集〕 荒木田度會等一級事○宣旨、內宮禰宜荒木田守晨 引付ト異事ナキニ依リ略ス、

上卿

永正

從五位上度會是彥

宜敍正五位下、

藏人

正五位下荒木田守則宜敍從四位下、從五位上荒木田守晨、度會是彥、以上宜

度會是彥

敍正五位下、口宣案如此、各可從事由、可被下知之狀如件

七月廿六日

右中將判

〔小桐時志〕 四位史殿

荒木田守則、同守晨、度會是彥等申加級事、口宣案御教書等、早可被下知給之狀如件、

八月十二日

〔小桐時志〕 左大史判

謹上 祭主三位殿

〔宗綱公記〕

宣下 案

永正六年八月廿六日 宣旨

正五位下〔水無瀨英兼〕藤原英兼

宜敍從四位下、

藏人頭右近衛權中將藤原實胤 奉

〔歷名土代〕 從四位下藤原英兼 永正六八廿六、

〔實隆公記〕 一四一 閏八月八日、丁酉陰雨、○中 英兼來、四品勅許云々、

永正六年六月十五日

八二一

水無瀨英兼

今出川公彦

永正六年六月十五日

〔宗綱公記〕

宣下案

永正六年十二月一日 宣旨

從五位上今出川藤原公彦

宜令敍正五位下、

藏人頭右近衛權中將藤原康親 奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

進上 中御門新大納言殿

口宣一枚

從五位上藤原公彦

宜令敍正五位下事、

右任職事仰詞、早可令下知之給之狀如件、

十二月一日

大内記局

權大納言宗綱

西園寺實
宣藤原實賢

〔歷名土代〕

正五位下藤公彦 永正六十一

〔宗綱公記〕

宣下案

永正六年十二月七日 宣旨

從四位上西園寺藤原朝臣實宣朝臣

宜敍正四位下、

從五位下藤原朝臣實賢

宜敍從五位上、

藏人頭右近衛權中將藤原實胤 奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

十二月七日

進上 中御門新大納言殿

右中將實胤 奉

口宣一紙

從四位上藤原實宣朝臣

永正六年六月十五日

永正六年六月十五日

宜敍正四位下事

從五位下藤原朝臣實賢

宜敍從五位上事

右任職事仰詞早可令下知給之狀如件

十二月七日

大內記局

權大納言(花押)

〔歷名土代〕

正四位下藤實宣 永正六十二七

從五位上藤實賢 同六十二七

〔宗綱公記〕

宣下案

永正六年十二月十一日 宣旨

從五位下藤原朝臣雅綱

源朝臣資數

以上宣令敍正五位下

藏人頭左近衛權中將藤原康親 奉

飛鳥井雅
綱小路資
綾小路資
數

口宣一枚獻上之早可令下知給之狀如件

十二月十一日

進上 中御門新大納言殿

左中將康親 奉

口宣一枚

從五位上藤原朝臣雅綱

源朝臣資數

以上宣令敍上五位下事

右任職事仰詞早可令下知給之狀如件

十二月十一日

大內記局

權大納言宗綱

永正六年十二月十一日 宣旨

從五位上藤原朝臣雅綱

永正六年六月十五日

永正六年六月十五日

宜賜去正月廿八日正五位下位記

藏人頭左近衛權中將藤原康親 奉

口宣一枚獻上之、早可令下知給之狀如件

十二月十一日

左中將康親 奉

進上 中御門新大納言殿

永正六年十二月十一日 宣旨

從五位上源朝臣資數

宜令敍正五位下、

藏人頭左近衛權中將藤原康親 奉

〔歷名土代〕

正五位下源資數 同六十二十一、

從五位上源俊茂 同六十二十八、

從四位下兼滿 同六十二廿、

木造俊茂
吉田兼滿

萬里小路
秀房

正親町實胤

正五位上藤秀房 同六十二廿三、

正四位上藤實胤 同六十二廿七、

〔內宮引付〕

一內宮禰宜一同一級望申之處、一守則、二守晨者當年加階之間、三以下八人

口宣之由、惣官ヨリ被仰下訖、然者當年禰宜一同之一級也、

永正六年十二月廿七日 宣旨

從五位下荒木田守兼

宜敍從五位上、

藏人頭右近衛權中將藤原實胤 奉

守武守幸守保氏秀守直經長守恆口宣案同前、宮司廣長同一級也、

前左大臣花山院政長ヲシテ、除服出仕セシム、

〔宗綱公記〕

宣下 案

永正六年六月十五日 宣旨

前左大臣藤原朝臣 長

宜令除服出仕、

永正六年六月十五日

禰宜一同
ノ昇進
荒木田守兼

荒木田守
武等

永正六年六月十七日

藏人頭右近衛權中將藤原康親(中山)奉

八二八

口宣一枚獻上之、早可令下知給之狀如件、

六月十五日

左中將康親 奉

進上(奉書) 中御門新大納言殿

〔公卿補任〕

四十四

前左大臣從一位藤政長、六十、四月廿日喪母、

十七日、

寅、

三好之長、兵ヲ近江ニ起シテ、山城如意嶽ニ陣シ、京都ヲ攻メ

ントス、是日、細川高國、大内義興等、兵ヲ遣シテ之ヲ圍ム、之長戰ハズシテ北グ、

〔實隆公記〕

四十

三月十五日、丁未、晴、略、中

後聞、今夜有巷說、室町殿御用心之儀、人々馳參云々、無殊事之儀也、

四月廿一日、壬午、晴、略、中

抑清宗寺聯珠院、依敵内通事召籠云々、

五月七日、戊戌、天晴、略、中

中御門新大納言入來、傳曇(文珠)花院殿仰、世上之事巷說以外也、驚思召之由也、

十一日、壬寅、晴、略、中

牢人出張ノ巷說

季綱朝臣來、今日牢人出張之事、世上巷說以外也、但無殊事云々、其子細内々付新大典侍申入之由、談之者也、江東牢人出陣岩根下在所之由、風聞、此間種々說

滿閭巷、頗無安息之思者也、

十二日、癸卯、晴、略、中

齋藤彦三郎入道來、世上事不可有殊事之由、語之、

六月十六日、丁丑、霽、略、中

阿野相公今朝依急事出仕之由語之、來臨、其次傳武家仰云、今日牢人可出張之由有其聞、就其爲御警固、尤雖可被馳參、却而奉爲公方不可然歟、更不可爲御自由、有子細之由被申入之、同又江東敵出張者、雖何時相應彼機之樣御進退、禁中安全尤可然之由被申入之、兩條密々予可申入之由仰云々、仍參内、於御三間直奏達之了、誠懇切之御申狀、叡感無比類、勅答之條々有子細、不能錄之、抑此子細彼是可參武家之由存之處、今日有兩京兆參入也、又予令參仕者、事々敷之樣也、只勅答之趣、季綱朝臣立寄可承之云々、仍相尋之處、及晚入來、仍具勅定旨演說了、則參室町殿可申入云々、及晚自此方以狀相尋之由、委細

永正六年六月十七日

八二九

幕府禁中ノ警固意ニ任セズ

叡慮ノ趣ヲ幕府ニ傳ヘシム

母ノ喪ニ服ス

巷說ニ依リ人々幕府ニ參ズ

清宗寺聯珠院敵ニ内通シ捕ハル

牢人湖水
ヲ越ユル
報アリ

永正六年六月十七日

八三〇

暴雨ニ乗
シ逃散ス

禁中警固

申入了、先得其意、可申之由有報、入夜牢人等已越湖水之由有風聞、
十七日、戊寅、晴、自深更雨降、
牢人已出張如意嶽取陣、諸勢自方々馳向、則取卷彼嶽之處、無幾程日暮、及曉
暴雨之間悉逃散、弓矢具足楯鍵等悉捨置之、不知行方云々、此時可斷根之處、
尤無念儀也、但不移時刻靜謐、珍重、凡京方諸勢如雲霞、諸人驚目云々、略、中今
夜禁中警固衆上杉以下被進之、
十八日、己卯、雨降、

之長行方
ヲ知ラズ

終日念誦、中丸來、女房奉書到來、昨日之儀早速落居、神妙之由被仰下之、略、中
以書狀、昨日之儀申遣阿野許、内々披露之由有返答、及晚伊勢神戶村近勝川
原、誅之云々、生虜自方々出現、各誅之云々、於三吉者未知行方云々、
十九日、庚辰、天晴、略、中

落人ヲ捕
ヘテ誅ス

落人追々生捕之、誅戮云々、

〔實隆公記〕

月〇永正六年五月六日裏文書

前夕尊書委曲拜閱、過當此事候、寔一ヶ條之儀、乍斟酌、主も如法之奉公申さ
れ候とて候、さやうの者當時大切之事候、又ささる御折檻、よても候、ぬと

牢人出頭
ノ沙汰

て候へり、存寄分言上候處、無相違めし出され候、一段りしこまり思給候、季
綱□て如此次第をも、早々可參賀之心中を、例の兎角遅々于餘物迄らす
罷成候間、先其子細内々申入候へり、種々御懇蒙仰候、却而令迷惑候、とよ昨
朝候歟、御まへ包より往還の便候しりとも、いそぐ事候て不能參上候つる、
背本意候、必々一兩日中、風度可參申候、さて牢人出頭のは候きる、
う／＼と不存候、大う／＼のさも申候歟、させる事候、いしと存事共候、聊御調
法の御事も候きに候、又漸暑氣万とよ案入候、この亭以外あつき所まで、斜
陽時分の、今さへ令迷惑やう候、何様う／＼近日万いり候て、彼出頭實
否いつれよつきても、一折尤所希候、返々御念比の文りしこまり入候よし、
能々申され候へく候、し、又楮葉拂つくされ候歟、昨夕の文御心もとな
く候折ふし、播州邊より到來候間、さくひなく候へとも、一束分進上候、比興
々々、

左京權大夫殿

季綱

〔實隆公記〕

二〇永正六年六月十八日裏文書

永正六年六月十七日

八三一

永正六年六月十七日

八三一

公家衆禁
中ヲ衛ル

從是令申存候折節、尊書畏拜覽候了、仰之次第具披露仕候、叡慮之御趣御懇
之至、中々難被申盡、御祝著御快然無是非候、彌宜以御取合被申入候之様、能
々得其意可申旨候、猶々必可參申入候へ共、以御次先御披露候哉、又牢人少
々渡海之事一定のやうに申候、可然候、三井寺を陣取候と、未存知候、
御近所東北之口構之事、内々申入て候、但俄に難調候、肝要庭田前東口
を、伊勢備中存候、禁中へ、如季綱までも、公家衆へとく可致伺候よ
し候、可御心安候、よろ敷候、依時宜一勢をも可被進候、武田前邊を、番方こ
被仰付候、旁期參拜之時候よし申入られ候、
ハト

みの、守とのへり

阿(阿野季綱)

之長ノ軍
三千人

生慶六十
人

〔拾芥記〕

中

六月十七日、天晴、三好筑前守父子等自近江國出頭、於如意嶽
取陣、及三千人云々、即日午剋京兆被官、其外大内衆杉、陶等、畠山被官遊佐衆
悉皆二三萬人向彼嶽、今夜可攻落之處、夜半以後甚雨、其源三好以下落行、敵
秋岡以下奉公衆神部被討、生捕及六十人、開陣也、

〔御内書案〕

乾

北畠材親
命ニ出兵ナ
ズ

就江州之儀、右京大夫相談、被抽忠節者、可爲本意之狀如件、

五月三日

北畠中納言殿

京極高
清命ニ出
兵ナズ

就江州之儀、右京大夫、大内左京大夫申談、致忠節者、可爲神妙候也、

五月三日

佐々木中務少輔入道とのへ

仁木少輔
兵部同政
長朝土岐
房朝倉貞
景齋藤彦
四郎等ニ
出兵ナズ

就江州之儀、右京大夫申談、致忠節者、可爲神妙候也、

五月三日

仁木兵部少輔とのへ

仁木左京大夫とのへ

土岐美濃守とのへ

朝倉彈正左衛門尉とのへ

齋藤彦四郎とのへ

永正六年六月十七日

八三三

義尹高國
部下ノ忠
勤ヲ賞ス

永正六年六月十七日

八三四

就今度敵出張儀、年寄馬廻之諸侍、無二無如在通被及聞食候、尤以神妙、能々可有褒美候也。

五月十五日

右京大夫(細川高國)とのへ

一色左京
大夫ノ上
洛ヲ促ス

上洛于今遲引不可然、急度參洛、可爲神妙候也。

五月廿日

一色左京大夫とのへ

義興ノ部
下ノ功ヲ
賞ス

就今度入洛之儀、陶、問田、其外諸侍、無疎略由被及聞食候、尤以神妙、能々可褒美候也。

五月廿四日

大内左京大夫(義興)とのへ

十五 大坂御舟手
能勢伊豫守所藏

〔古文書集〕

高國能勢
ヲ賴勝ノ功
ヲ褒メス

細川右京大夫高國感狀之寫

去十七日、於如意嶽、三好筑前守已下令出張之處、不移時刻、馳向彼處、則攻落、殊被官金田十郎者、大平次郎左衛門尉、久代與四郎者、喜多代、久代、新左衛門尉者、高岡宗珍、下坂亦四郎者、名字不知之敵一人、瀨見孫次郎同前、或討捕、或生捕由、藥師寺岩千代注進候、尤以神妙之至候、彌被抽軍、忠者感悅候也、謹言、

六月二日(二十脱)

高國判

能勢(賴勝)因幡守殿
書○書上古文
異事ナシ

〔御内書案〕

乾

就今度敵出張、各無疎略、旨被感思、食候、彌抽忠節者、可爲神妙候也。

六月廿三日

山門西塔院衆徒中

山門本院衆徒中

園城寺衆徒中

山門楞嚴院衆徒中

山門寺門
衆徒ノ戰
功ヲ賞ス

永正六年六月十七日

八三五

山内就綱
蒲生貞秀
等ノ戰功
ヲ勵マシ

永正六年六月十七日

八三六

就敵退治之儀、各申談、別而可抽戰功、依忠可有恩賞、委細右京大夫、大内左京大夫可申候也、

閏八月十八日

佐々木小三郎入道（山内就綱）とのへ

佐々木中務少輔入道（蒲生貞秀）とのへ

阮塵軒 蒲生事也、

蒲生刑部大輔（秀行）とのへ

〔瓦林政頼記〕

（永正六年）

同六月十七日、三好筑前守大將トシテ、三千餘騎ニテ江州ヨリ打テ上リ、如意カ嶽ニ旌二十流計ソ打立ケル、然共京都ニハ少モ騷給ハス、則十七日未ノ刻ニ、猛勢方々如意カ嶽へ責上間、一戰シテ其夜落ニケル、

十八日ニハ、落人方々ニテ被生捕、數十人切レニケリ、（上略）

〔長享年後畿内兵亂記〕

（永正）

同六年、三好筑前守如意嶺出張、六月十七日則沒落、（久長）
○細川澄元及ビ之長、近江ニ走ルコト、五年四月九日ノ條ニ、北畠材親、三好長秀ニ勸メ、自殺セシムルコト、本年八月二日ノ條ニ見ユ、

十八日、吧幕府、延曆寺ヲシテ、圓滿寺ノ、日吉社日供料所近江建部莊ヲ違亂スルヲ停メシム、

〔生源寺文書〕

江○近

樹下修理太夫成純申、日吉日供料所江州建部庄事、圓滿寺儀、猛惡之輩語、被弄破之、以古借書相懸彼庄、及違亂之條、因茲當所代官令上表之間、日供及退轉云々、太不可然、不退彼妨者、闕怠之儀、非成純越度、於件借書者、度々被弄破之上者、不及沙汰、所詮云彼云是、神供無其煩之樣、相談成純、可被退押妨之族之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正六年六月十八日

美濃守
對馬守

山門使節 御中

○桂林集 異事ナシ、

二十日、故將軍義尚ノ側室山名氏卒ス、

〔實隆公記〕

四十

六月廿一日、壬午、晴、晚頭夕立、（中略）

抑瑞泉院（足利義尚）常徳院殿（三時知祖寺）妾、入江殿（今御所母）才云々、昨日他界、腫物所勞云々、入江殿穢了、連々參會之人也、尤不便々々、

永正六年六月十八日 二十日

八三七

弄破ノ古
借書ヲ以
テ違亂ス

腫物ニ依
ル

永正六年六月二十一日

廿二日、癸未、陰雨、略○中

今日日次宜之間、瑞泉院事以書狀弔申了、

〔實隆公記〕一四 八月八日、戊辰、晴、及晚雨濺、略○中

今日一荷兩種獻入江殿、今御所、明日彼御母儀四十九日也、聊表寸志而已、

〔諸家大系圖〕三 義家流

義熙本義尙

女子三味智恩院等

二十一日、壬午參議廣橋守光ヲ、武家傳奏二補ス、

〔公卿補任〕五 參議正三位藤守光九、六月廿一日被仰武家傳奏事、

〔諸家傳〕六 廣橋 守光（永正） 同年六月廿一日武家傳奏、

高倉範久、侍從二任ズ、

〔宗綱公記〕宣下

永正六年六月廿一日 宣旨

藤原範久（高倉）

宣令任侍從、

藏人頭左近衛權中將藤原康親（中山） 奉

口宣一枚獻上之、早可令下知給之狀如件、

六月廿一日

左中將康親 奉

進上（松本編） 中御門新大納言殿

〔公卿補任〕四十八 年 非參議從三位藤範久（高倉）、四 永正六六廿一侍從、

〔諸家傳〕九 下 高倉 範久 永正六年六月廿一日侍從、十七 歲、

〔實隆公記〕四 十 六月十二日、癸酉、晴、夕立、新大典侍來臨、○ 中

又阿古丸（高倉） 範久、近日可加首服、儒業事可被仰如何云々、尤可然之由申入了、

廿一日、壬午、晴、晚頭夕立、○ 中 今日阿古丸（高倉） 範久、加首服云々、實父季經（高倉） 卿加冠

歟、其間之儀可尋問之、是南家高倉跡相續也、故民部卿典侍實之里方繼之也、

可令遂儒業歟之由、内々有叡旨、珍重事也、

○ 萬里小路賢房ノ女、鬢曾木ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔實隆公記〕四 十 六月廿一日、壬午、晴、晚頭夕立、○ 中

故堅房卿息女（高倉） 十六、今日鬢曾木云々、於新大典侍局、有祝著之儀云々、

永正六年六月二十一日

八三九

儒ヲ學バシム 加冠父四辻季經 高倉相續 儒業ヲ遂ゲシメン トノ叡旨 萬里小路賢房女鬢曾木ノ儀アリ

宣旨

八三八

賀茂康久女貞子ヲ女藏人ト爲ス、

〔實隆公記〕

四十 六月十二日、癸酉晴夕立、○中略

播磨送書狀、五々新參事、夏衣當時無調法、密々可有冬衣哉、閏月以前新參事所望之由被談之、則以書狀申勾當局、大典侍談合可然之樣可被相計之由申了、返狀、大底不可有子細、可申沙汰之由也、珍重也、其趣遣返事於播磨了、廿日、辛巳、天晴、

甘露寺（元長）中納言來、賀茂貞子賀茂康久女、播磨局相續也、明日可新參、此事可有名字和長卿撰定之云々、宣下之由、播磨存之歟、雖申送更無覺悟之間、相談中御門大納言（宣胤）之處、分明不覺悟云々、愚意如何之由被命、此事於典侍掌侍者宣下勿論、是者女藏人也、不及宣下、只可付臺盤所御續簡計歟之由答之、元長卿同心也、

及晚引勘之處、伊與（明應九十二年當代）新參之時有此沙汰、不及宣下之由愚記所載也、其時故廣光卿相談了、此事則申遣甘露寺了、

廿一日、壬午、晴、晚頭夕立、○中略 播磨局相續、五々今日新參云々、廿二日、癸未、陰雨、○中略 播磨被送一荷兩種、昨日新參祝著、自最初予芳言祝著之由有消息、

名字東坊城和長撰定ス、無宣旨ノ有典侍掌侍ハ宣下アシ、レドモ女藏人ハナシ、先例ヲ徵ス、三條西實隆ニ物ヲ贈リテ謝ス

二十三日、（申）越前寶應寺住持壽桂、（舟）守護朝倉貞景ノ招請ニ應ジテ、同國弘祥寺ニ住ス、是日、入寺ス、

〔月舟和尚語錄〕

一 月舟和尚住越前州安居山太治山弘祥禪寺語錄

師於永昌（巳）六年六月十八日、在越之前州一乘寶應寺、受太守請、廿三日入寺、（受師）真如帖後、有此請、先是弘祥多其例、

山門

指山門、豁關（明之）華藏法門、擊破安居禁網、（願）願隨來也、路自中峯止、（喝）喝一

佛殿

安釋迦々葉、鷲嶺春色、迦葉破顏、那一華彈、可見不可攀、

土地

劉禹錫詩、神物護持、我無一句、不許僞知、

祖師

不來東土、不住西天、別々、日本國裏片岡山下、三十六字直指單傳、

據室

我此丈室、容十虛空、欲知主中主、五十天涯一禿翁、

永正六年六月二十三日

真如寺ノ帖後ヲ承ク、入寺法語、山門、佛殿、土地、祖師、據室

永正六年六月二十三日

八四二

山門疏

山門疏 芳春撰之

衣

青山有素一咲相親雖稱新長老似迎舊主人
衣 俄有此舉不拈屋裏衣而拈紫岩衣

登座

曹溪衣止而不傳從那裏得這木綿看々水流本歸海月落不離天

登座

幻住以三百丈天目山爲一禪床山僧以八萬踰繕那須彌山爲一禪床驟步春
色无高下花枝自長短

祝香

祝香

論果報上下於東洲西洲南洲北洲天祿不極分壽量短長於春日夏日秋日冬日
宸算无疆

相公香

相公香 相公再任

唐室再任宰相者數兩人此舉在古爲少齊國九合諸侯以冠五霸其才于今可
尊

太守香

太守香

樊將軍求得十萬衆如渠則兵權未持孟嘗君能致數千人比公則食客猶少

嗣香

嗣香

吾慧朗祖初出世日不拈出嗣香且曰破蒲團上地裂天崩不從人得後住仰山
時爲佛鑑焚却噫慧朗於佛鑑是甚广怨敵山僧不然這爛柴片拋向一爐供養
華藏正中老漢以酬法乳恩德々之與冤相去多少人間無水不朝東天上有星
皆拱北

釣語

釣語

第一義諦明珠走盤擊擊碎了也和氣塔在玉欄干有广

提綱

提綱

佛法與王法元來無兩般三代以前無佛佛安著那邊山是山水是水六朝之後
有禪々來自何處熱時熱寒時寒說甚广無々有々論甚广易々難々熙寧執拗
考拈華機緣外護之志日破諸闇勝力菩薩稱聽松宰相大慈之緣月映微瀾至
若孔子孟軻之後皆歸釋氏儒童光淨之身再生真丹賴有牙籤三萬軸之可檢
何況琅函五千卷之耐攤畢竟堯舜禹湯梵天帝釋是一是二拈丈上人分明剖
判與人看卓一處々綠楊堪繫馬家々門戶透長安

自序

自序

永正六年六月二十三日

八四三

永正六年六月二十三日

八四四

身具八愚，性該三懶，才德全缺，或廁跡于五百僧中，則人命呼賈浮圖，行位難昇，儻結緣于二千年前，則我必從鈍菩薩，爰借太守推輓之力，式蒙一衆庇蔭之恩，忸怩々々。

白槌

白槌 師兄仙甫西堂

妙法堂頭和尚，海涵春育，玉潤水清，點雜華十笏之灯，靈光互今互古，提双徑萬年之印，正續不緇不磷，非小因緣，逢善知識，窃以山野早歲蒙藥誨^{（慈力）}以侍寢室，豈可忘哉，和尚今日屈玉趾以證法筵，又所榮也，無勝感戴，枉閣謝詞，伏乞尊照。

大衆

大衆

又惟山門兩序，東班諸位禪師，西班諸位禪師，單寮蒙堂前資辨，夏四來雲衲，一會海衆諸位禪師，雖可遂一贊揚盛德，今日開堂端爲祝聖，不敢涉多詞，各々道照。

拈提

拈提

記得僧問虎丘爲國開堂一句作广生道，丘云一願皇帝萬歲，二願重臣千秋，國家興盛還他虎丘，作广生是護法一句，拂云萬億斯年唯一佛，雪山元不隔龍樓，當番小參。

垂語

垂語 寺有甘露泉

煮甘露泉，薦一椀雪，清涼清涼，爲甚人皆苦炎熱，參。

提綱

提綱

法昌陞堂，搥鼓者唯一力，汾陽晚參成器者纔六人，元來天道有數，何況佛法遇屯，今顧吾山，陞堂搥鼓，則兩序肅々似雁警群，珍重，大衆之盛，遙與法昌間隔，晚參成器者多士濟々，始馬立仗，慚愧住持之才，全非汾陽比倫，人々戒體凝六月之雪，箇々仁氣回三冬之春，安坐七尺單前，說甚欲界無禪々界无欲，豎起一柄拂子，勘破賓中有主々中有賓，若求參禪以商確，更无一句可指陳，山僧昨日揮汗長安道中，辜負青山綠水，今夕濯足若那溪畔，掃空紫陌紅塵，榮則榮矣，爭奈楊岐乍住，樂則樂矣，恐笑清稅孤貧，於此豎拂手中龜毛公突出曰，吾山洞曹一派甲乙住持，長老林際末流，何以窃吹濫巾，退後々々，從門入者不是家珍，山僧椰揄曰，一百五十年前，開山定光古佛，拜吾普應國師於西天目，以參詢，國師傾腸倒腹，古佛粉骨碎身，雖云今日豈忘舊因，拂一諾々，孔李有通家之好，何韓因同姓而親。

自敘

自敘

永正六年六月二十三日

八四五

永正六年六月二十三日

八四六

南去北來，東奔西走，自謂某山掛錫，鶴怨蕙帳之寒，何圖此地聽鐘，烏啼楓寺之月，衆慈恕宥。

諸謝

諸謝

妙法堂上和尙，仙甫住妙法，壯年屢司東山紀綱。群玉記少年日，聲價明月夜光，嫩桃留千歲春，雅韻高山流水。

次惟東班，都寺禪師，監寺禪師。

護常住物，宜存歲寒護竹之心，養十方僧克竭春陰養花之力。位居書記。

悅衆禪師

居書記位。

稿木寒灰，三生咲杜書記，陽春白雪，一衆推華維那。

副寺禪師

々々々

培藏春塢裡之花，只須抱甕灌圃，頌彭澤縣中之米，何用解印飯田。上副寺居藏春軒。

典座禪師，直歲禪師

煮山川於半升鍋，庶濕僧鉢，掃風塵於三尺劍，宜護法城。

西班牙堂中座元禪師

號曰易窓玉岡塔曰少林。

讀易窓前，雜華有先天易，傳印室內，少林無動地祥。無。

後板座元禪師

論最上乘，憶玉岡之註破四教，說摩訶衍，對梅里以勦絕百非。

記室禪師

先人所芟，大白之山仰首而觀，全機難當，積翠之關掉臂而過。

知藏禪師

甘露寺前，緬懷孔明狹策以坐石，香爐峯頂，猶記太白題詩欲巢雲。居巢雲軒。

知賓禪師，知浴禪師

留客默一中茶，瑠璃之眼光璨爛，浴人打三通鼓，醍醐之汗流欄干。

侍香禪師

露氣侵衣，原蓮華博士之夢，天香滿袖，修梅檀如來之因。族曰勝蓮華。

上堂問禪

白雲出山行志，勤護先廬，明月印江分身，吟對佳境。

小參問禪

號曰竹西。

憶曾卜隣輦寺，共尋梅北之春，絕夜剪灯書巢，注問竹西之路。住方。

捻謝

更惟山門兩序東班——諸位禪師，天台古田有頌，烹金爐偈云，四碧眼胡猶

永正六年六月二十三日

八四七

上堂問禪

小參問禪

捻謝

永正六年六月二十三日

八四八

是鑛不知活火爲誰紅、吾此太冶爐輔、歷旭鍛鍊者百五十員、爰翹四碧眼胡而已哉、何況各々躍冶精金、而無一箇是頑鑛矣、所愧新長老、掃文武爐中灰、不能不鉗鎚於銅頭鐵額、慚汗々々、

拈提

拈提

記得斷江禪師有謂、泰定四年夏六月、天降桂子於會稽雲門寺、彌夕不止、如世憂曇鉢華、時一現耳、且記其實曰、月裏仙枝孰可攀、空中瑤實自飛翻、永正六年六月、桂上坐董斯名藍、々々廼據吾邦會稽、溪山雖異、雲月是同、拈文未審、這龜辣梨、喚作天瑞乎、喚作人瑞乎、卓一阿呵々、皮膚脫落盡、唯有一真實、久立珍重、

翌日拈香

翌日拈香

大日本國越之前州路、大冶山弘祥禪寺新任持比丘壽桂、開堂翌辰、隨例率闔山清衆、拜詣開山定光古佛塔下、諷演白傘蓋無上神呪之次、焚此一瓣、代蘋蘩蕙藻奠云、

洞上宗風會中興、南遊參得十高僧、羅龕有感百年後、白髮挑殘夜雨灯、

〔幻雲疏藁〕

仙雲巢住弘祥、天文元年、

竊目永正六年六月二十三日、予應越之大守天澤居士命、滌仰大冶山弘祥禪

寺、蓋舉先例也、略下

○壽桂、貞景ノ女得度ノ戒師トシテ、越前ニ下向スルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔實隆公記〕

四十 六月二日、癸亥、霽、及晚雨、略中

月舟和尚來臨、先日御帷事被謝之、兼又自越前招請、朝倉彈正左衛門女喝食、號南陽寺得度事、當月十日以前可遂之、其前可下向之由申送之、杜詩未終一卷、頗狼藉歟、如何云々、更不可苦之由報之、則又内々申入御所了、

五日、丙寅、雨降、略中、月舟杜詩本被預置之、來十日比可進發云々、○壽桂ヲ召シテ、杜詩ヲ講セシメラルル、コト、四月七日ノ條ニ見ユ、

二十五日、丙戌北野社法樂連歌御會、

〔實隆公記〕

四十 六月廿五日、丙戌、晴、

早朝念誦、飯後參内、北野社御法樂、每年事也、於小御所有此事、

下官、中御門大納言、冷泉大納言、（政隆）民部卿入道、（冷泉）布衣袴、不甘露寺中納言、（元長）兵部

卿、（東坊城和良）大藏卿、（濟繼）姉新宰相、（阿野）同所勞之、（山科）季綱朝臣、（五條）爲學朝臣、（山科）執筆、

中間御湯漬、各如例、予一身列席、言綱朝臣役送也、御連歌終之後、廿首續歌探

永正六年六月二十五日

八四九

貞景女得度ノ爲メ、越前ニ下向スルコト、杜詩ノ講未ダ終ラズ、テ下

參仕ノ人々、執筆五條爲學、送山科言綱、二十首續

歌探題冷
泉政爲御
讀師胤
門宣胤
講師五條
爲學冷泉
爲聲冷泉
爲廣

永正六年六月二十六日 二十七日

八五〇

題政爲卿頃刻各詠進有講頌、讀師宣胤卿、講師爲學朝臣、發聲民部卿入道、彼
出題也、禪門歌政爲卿講之事了、内々御盃三、祝著退出之次、參伏見殿、則歸宅、
賦何路

下水を包すれてすゝし松の風

蟬や木すゑの□いそく聲

二十六日、丁幕府當座和歌會、

〔實隆公記〕四十 六月廿六日、丁亥、陰晴、夜雨降、略中

今朝季綱朝臣來臨、又今日人々自武家有召、可賜御酒也、相公羽林可參之由
也、小瘡安座不叶之由申之、小瘡瀉藥可拜領之由、内々被仰云々、後聞、今日參
候人々、甘黃(甘黄寺元也)有當座(廣司家也)右府卿伯二位、冷泉宰相左大辨宰相、雅業朝臣、伊長等、阿
野、鳥父子等云々、

二十七日、戊朝倉景乙、越前瀧谷寺ニ、新田五良三郎分ノ地ヲ寄進ス、

〔瀧谷寺文書〕前〇越

新田五良三郎分之内田參段、瀧谷寺江爲不斷經田、致寄進候云々、是ニ雖諸
役候、其共ニ進上申候、末代無相違可有御知行者也、仍而寄進狀如件、

參仕ノ人々

永正六年六月廿七日

朝倉彌七 景乙(花押)

瀧谷寺 進上

二十八日、己泉涌寺佛舍利ヲ觀覽アラセラレ、勅封ヲ加ヘラル、義尹モ亦
之ニ封ス、

〔實隆公記〕四十

六月廿八日、己丑、晴、中(善敘)雲龍院御受戒參入、〇御受戒ノ

十八日ノ今日泉涌寺佛舍利御拜見、勅符并武家御封可附之云々、禁中御頂
戴ノ後、參室町殿、則御頂戴子細等委細尋聞食云々、退出之次、乍聊爾、於此亭
拜見有其望之由所望之間、善敘上人携之來臨、則拜見、宿福深厚、拜佛身誠如
在世、尤可成渴仰者也、伊勢備中女房衆來拜見之、

上杉顯定、越後雲洞庵ノ所領同國菟田及ビ福光ヲ、同庵ノ競望ニ依リ、
上田莊馬場郷ノ地ト交換セシム、

〔雲洞庵文書〕後〇越

當庵領越州頸城郡菟田并福光事、以同國上田庄馬場郷内相澤分、如御競望
令相替候、然則御所務不可有相違候、此段可得尊意候、恐惶敬白、

六月廿八日

藤原顯定(花押)

永正六年六月二十八日

八五一

三條西實
隆モ之ヲ
見ル

永正六年六月二十九日 是月

拜進 雲洞庵衣鉢侍者禪師

二十九日、庚寅六月祓、

〔實隆公記〕

四十 六月廿七日、戊子、晴、略○中

自御牧、六月祝物共且進之、略○中 自御牧、六月祓祝物、懸茶人夫等上之、

廿九日、庚寅、晴、小浴、六月祓之儀也、

是月、京都酒商人等、近江坂本及比奈良酒等ノ、洛中賣買ヲ禁ジ、又河内、攝津ノ酒ヲ、諸大名用以外ニ、商賣スルヲ停止センコトヲ幕府ニ請フ、

〔古文書〕 十集

酒屋中謹言上

右子細者、大津酒之事者、如形御役をきんし申候間、不及是非候、其外坂本并奈良酒等之事、預御停止候者、可畏入候、同河内、攝津國酒之事者、諸大名へめしのせられ候外、商買酒を見分させられ候て、預御停止候者、各忝可畏存候、仍粗言上如件、

永正六年六月日

義尹、豊原統秋ニ樂道ノ事等ヲ問フ、

〔實隆公記〕

四十 六月廿日、辛巳、天晴、略○中

五常樂
破陣樂

統秋朝臣來、先日依召參室町殿、樂道事并今度又所書進之五常樂急譜事等、條々言上、破陣樂ハ破ハ過也、陣ヲ過シタル心事等、委細言上之事共相語之、（大神）（樂小部）

又景通（樂小部）俊量卿師範事、今度種々加入魂之子細等話之、

○義尹、統秋ヲ招クノ日詳ナラズ、今姑ク是月ニ掲グ、又コノ後、統秋、義尹ノ許ニ到ルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔實隆公記〕

四十 八月五日、乙丑、霽、略○中

統秋朝臣來話、參候室町殿之由語之、

永正六年六月是月

八五三

八五二

永正六年七月一日

七月大 辛卯 朔 盡

一日辛卯權大僧都順海ヲ、天台法華會廣學豎義探題ニ補ス、

〔宗綱公記〕

宣下 案

順海款狀

法印權大僧都順海誠惶誠恐謹言、

請特蒙天恩、、、、

永正六年六月 日

法印、順海

宣旨

獻上

宣旨

法印權大僧都順海申、請特蒙天恩、因准先例、被補天台法華會廣學豎義

探題職、副款 狀

仰、依請、

右宣旨、早可令下知給之狀如件、

七月一日

右左少辨高里小波秀房 奉

進上 松木宗綱中御門新大納言殿

返獻

宣旨

法印權大僧都順海申、請特蒙天恩、因准先例、被補天台法華會廣學豎義

探題職、副款 狀

仰、依請、

右宣旨、早可令下知給之狀如件、

六月一日

松木權大納言宗綱 奉

右少辨殿

三日癸巳、京都誓願寺宗清ヲシテ、同寺堂宇ヲ再興セシム、

〔集古文書〕 三

後柏原院繪旨 所藏不詳

當寺今度任武家嚴重下知、令再興寺堂之廢遲殊者、守勅願舊規、可奉祈朝廷之無事者、天氣如此、仍狀如件、

永正六年七月三日

正親町實胤右中將判

永正六年七月三日

永正六年七月三日

誓願寺宗清上人御房

八五六

修造勸進
狀

創建

應仁ノ亂
ニ堂舎火
ク

假リニ堂
舎ヲ建ツ

〔誓願寺文書〕

○三山城

勸進沙門 某 敬白

請特蒙十方檀越助成、遂誓願寺之修造狀、

夫出離娑婆之要道者、屬伽藍勝地之結緣、由避塵□也、往生極樂之正業者、局念佛易行之教門、以順本願也、抑尋當寺之濫觴者、本尊則春日明神之權作、而利生日新、堂舎則天智皇帝之勸願、而開闢年久、爾來遠近參詣之男女者、繼踵於當堂寶前、都鄙見聞之道俗者、係望於彼國華臺、或蒙示現兼知命終之期、或感靈夢正遂往生之望、不能口宣、不遑毛舉、豈不偉哉、于茲當應仁丁亥之亂、當寺忽罹兵火之災滅燼、悲哉、末法已來到矣、尊像尙振神力之威儼然、喜哉、利物彌偏增矣、然而文明年中、假建當堂、奉遷本尊、因不擇良材、僅經三十餘回星霜、梁棟傾斜、椽柱朽損、由是雨露濕衣、莓苔鎖壇、小僧不忍見之、袖一軸化疏、蒙十方助緣、欲再興堂舎、奉安置尊容、是以不愧不才、不顧非器、不簡貴賤、不分緇素、勸寸鐵尺木、求一紙半錢、涓水滴而成巨海、微塵積而爲大山、若於施與之輩者、現世則酌造立之餘薰、必保百年之齡、滿福祿如意、願望當來、便任誓願之

本懷、定生九品之臺、誇神通不退快樂者也、仍而勸進之趣如件、

永正十年九月 日

勸進沙門敬白

○誓願寺兵燹ニ罹ルコト、應仁元年五月二十六日ノ條ニ、佛殿供養ノコト、文明十五年四月二十六日ノ條ニ、遷座次第ノコト、永正十五年四月十六日ノ條ニ見ユ、

四日、甲午義尹、田樂大夫及ビ猿樂大夫ヲ引見ス、

〔武雜禮〕

○後鑑二百七十四所載

觀世ト田樂次第之事永正六大夫被御覽時、先田樂

可進候由被仰出候條、貞陸并細川殿種々雖被申上候、無御許容、上意之旨コ伊勢ハ、御當家之事高麗ハ等持院殿様ヨリ始申也、然コ田樂以增阿彌觀世首阿彌を被召出候條、觀世より田樂前なる故、田樂可進候由被仰出也、貞陸言上是利尊氏ハ、普廣院殿様、東山殿様以來ハ、觀世進申旨御申ありといへども、今日ハ田樂進申なり、

五日、乙未右少辨萬里小路秀房ニ、其舊跡敷地ヲ安堵セシム、

〔康親卿記〕

萬里小路御跡敷地四十町丁カ四至勝爾東者萬里小路西者春日、事無他妨之處、去年

永正六年七月四日 五日

八五七

足利尊氏
延見ノ例
ニ依ル

四至

永正六年七月五日

八五八

始有押妨之族云々、太無謂、早可令專領知給之由、天氣所候也、

(中山康親)
左中將 列

永正六年七月五日

謹上 (高平小路秀房)
藏人右少辨殿 賀次第異事ナシ

○コノ後、諸國散在ノ家領ヲ秀房ニ安堵セシムルコト、便宜左ニ合致ス、

〔康親卿記〕

獻上

宣旨

万里小路家領諸國散在 目録在別紙、事、彌可令專領掌給者、依天氣執達如件、

永正六年七月廿一日

左中將 列

謹上 藏人右少辨殿 賀次第異事ナシ

葦名盛高、岩代小田付村ノ地ヲ、同國示現寺ニ寄進ス、

〔新編會津風土記〕

六十四目組

陸奥國耶麻郡之十一

示現寺 略

補任示現寺寄進事

右會津那麻郡小田付之村花積、恩地道覺在家壹間年貢貳貫六百文之所、永

代寄進申所也、於子孫不可有相違、仍爲後日之狀如件、

永正六年 巳七月五日

(葦名)
盛高 ○會津舊事雜考

〔異本塔寺長帳〕

四

六年 巳七月五日、葦名盛高、小田付村ノ内示現寺ニ寄進ス、

十日、庚子幕府、内大臣轉法輪三條實香ニ、其敷地ヲ安堵セシム、

〔古文書〕

二十

家門構號敷地事、爲累代之舊跡之處、青侍澤次郎左衛門尉次久、依爲顧眄輩、寄事於得尊命、令沽却云々、以外濫吹也、不可不誠、然於次久者、欲加成敗之刻、令死去之上者、至買得儀者、被弃破之、被返付家門訖、早可被全領知之段、可令申入給之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正六年七月十日

(齊藤基雄)
美濃守

備

(轉法輪三條實香)
三條内大臣家雜掌

結城政朝、大神宮ニ參詣スルモノニ過書ヲ授ク、

〔八槻文書〕

二
○二 磐城

永正六年七月十日

八五九

三條家累
代ノ舊跡
青侍澤次
久命ヲ伴
スリテ沽却
ス
三條家ニ
返付セシム

永正六年七月十二日

八六〇

從奧州白川參宮方貳百人馬七疋荷物八荷國中諸關舟渡無相違可有勘過
之由候也仍如件

永正六年七月十日

政盛

所々領主御中

十二日、壬寅、石清水八幡宮護國寺傳燈大法師具清ヲ、同八幡宮權別當二補
ス、

〔宗綱公記〕

宣下

款狀

石清水八幡宮護國寺傳燈大法師具清(實下同シ)誠惶誠謹言

請殊蒙天恩因准先例被任權別當職狀

右具清謹檢案内當宮祠官受譜代蹤跡別宗廟社職致役勤厚抽御祈忠功者
朝家佳猷宮寺定準也爰具清爲數代檢校後胤門葉相承正統企理運徵望勅
許之處誰謂非據望請天恩因准先例被任權別當職者奉祈天下泰平海內安
全矣具清誠惶誠恐謹言

永正六年七月 日

宣旨

獻上

宣旨

石清水八幡宮護國寺傳燈大法師具清申請殊蒙天恩因准先例被補權

別當職事副款

仰依請

右宣旨早可令下知給之狀如件

七月十一日

左中將康親(中世)奉

進上(松末宣綱)中御門新大納言殿

謹獻

宣旨

石清水八幡宮護國寺傳燈大法師具清申請殊蒙天恩因准先例被補權

別當職事副款

仰依請

右宣旨早可令下知給之狀如件

永正六年七月十二日

八六一

永正六年七月十二日

七月十二日

(高直小路秀隆)
右少辨殿

權大納言宗綱

(松木)
八六二

〔壬生家四卷之日記〕

一 七月十二日、

〔下請符集〕八幡權別當事

宣旨一枚、中御門新大納言、

石清水八幡宮護國寺傳燈大法師具清申、請殊蒙天恩、因准先例、被補權別

當職事、副寺

仰、依請、

右宣旨、早可被下知之狀如件、

七月十二日

(什務寺伊長)
少辨判

(小槻時元)
四位史殿

大法師具清

左少辨藤原朝臣伊長(什務寺)傳宣、權大納言藤原朝臣宗綱宣、奉勅件人宜爲石清

水八幡宮護國寺權別當者、

永正六年七月十二日

修理東大寺——(小槻)時元 奉

謹請

宣旨事

石清水八幡宮護國寺傳燈大法師具清申、請殊蒙天恩、因准先例、被補權

別當職事、副本

右宣旨、早可令下知之狀、謹所請如件、

永正六年七月十二日

大史小槻時元請文

幕府、京都六條八幡宮ニ、日供及ビ燈油料所トシテ、同源氏町、千草町等
ノ敷地ヲ安堵セシム、

〔若宮八幡宮文書〕

城〇山

(包紙)
六條八幡宮神主殿

左衛門尉貞兼

六條八幡宮日御供、同燈油料所、樋口與六條坊門室町西洞院間八町々號源氏町
町、并針少路堀河與唐橋間四町々敷地等事、任當知行之旨、彌全知行、可被
神用之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正六年七月十二日

八六三

永正六年七月十五日 十九日

永正六年七月十二日

左衛門尉(遊佐實兼)
左衛門尉新

八六四

當社神主殿

十五日、乙大聖寺尼慈勝女王寂セラル、

〔諸寺院皇親御事蹟〕大聖寺 岳松山聖尼禪寺曆代錄

前景愛、當寺第五世無礙心院宮慈勝尼長老、

百四代後土御門天皇之皇女、文明四年正月十日入寺得度、景愛住、任紫衣

勅賜、永正六年七月十五日寂、葬地不分明、

〔皇親系〕 七

後土御門院天皇

慈勝女王

大聖寺ニ
住シ景愛
寺主ト爲

母未詳、文明四年落飾爲尼、住大聖寺、爲景愛寺主、永正六年七月一作九月十五

日薨、號曰無礙心院、

十九日、酉豐前守護大友義長、豐前宇佐八幡宮造營ニ就キテ、大工職ノ條
規ヲ定ム、

〔宇佐八幡大神宮御造營中古證類〕

條々永正六
七十九

一朝者從辰剋入木屋、夕者限入日可歸宿之事、

一遲參、同早歸仁事、日別料一時拾文宛可減少之事、

一作事時剋之内、不可專自由之事、

右依御下知、法度如斯、背此條、於任雅意輩者、可有出仕お停止候者也、仍執

達如件、

七月 日

大膳亮(佐所)泰景(花押)

宇佐宮大々工殿

○政所惣檢校益永家
職掌證文寫異事ナシ

○假殿造營ノコト、便宜左ニ附載ス、

〔宇佐八幡大神宮御造營中古證類〕

下宮御假殿之事

御造立之由、昨日九御奉書到來候、仍御月次

之事、今月十五日、同十九日兩日被撰下候、御奉書彼是貳通、當職迄令進候、定
而可有披見候哉、御杣始御調以下之儀、早々被仰談可承候、爲可申談、各々出
立仕候、無餘日御事候之條、御急尤專一候、恐々謹言、

永正六年七月十九日

八六五

出勤歸宿

遲參早退

作事時刻

内ハ自由

ナラベカ

ラズ

下宮假殿
造營

永正六年七月十九日

卯月十日

親資

高親

親種

泰景

八六六

祝大夫殿
大々工殿

杣祓日時
勘文

御假殿御造立尤目出候、就其杣祓日時勘文拜見申候、於拙者諸役者不可有無沙汰候、大々工役之事、彼家各別之儀候間、爲我等不能存候、宮氏之事、就召文參上之儀、御存知之前候、非私曲候、御分別肝要候、恐惶謹言、

卯月十二日

宮重

佐田(卷末)因幡守殿
中山大郎左衛門殿
矢部三郎左衛門殿
赤尾修理進殿

就御杣祓之儀、一昨日連署を進候之御報、只今亥刻到來、令拜見了、仍大々工方依召文、御參上候條、彼御役事不被及御了簡之由承、尤候哉、雖然御假殿頓速に被仰出候事、社家御歡喜不可過之候哉、以御名代等も當會之事、先御馳走候者可然候哉、預御懇札候之間、拙者初一念申計候、何様加判衆中申談にて可申承候、恐々謹言、

卯月十二日

泰景在判

祝大夫殿
御報

大々工職
ヲ調ベシ

夜前預御札候之條、則御報令申、仍各雖可申談候、宅所被隔候、吉辰無餘日候間者、又愚存至當職申入候、大々工職於不可有御調法者、御杣祓可滯留候哉、至山口雖注進仕候、無日數候間、飛脚往返不可叶候、御假殿如此頓速被仰出候事者、社家御大慶候哉、大々工職、往古者雖各別之御家候、於近代者、祝兼大々工與至山口茂御請文共候歟、又於當社諸役所者、皆以權役人御座候歟、如此候得共、御當職定而可有御下知候哉、被成御分別、御入魂□□可目出候、恐

永正六年七月十九日

八六七

永正六年七月二十日

八六八

々謹言

卯月十三日

泰景

祝大夫殿 御宿所

大々工役

袖始ニハ
神道祕密
ノ儀アリ

就袖祓之儀、重而御狀委細被披見候、大々工役之事、拙者所勤可仕候由蒙^(仰カ)仕候、更不爲覺悟候、已前宮氏兩役を被相拘候時者、何をも所勤候、當時者各別之家候間、某不致所勤候事、御存知候故候、人躰參上之儀、無其隱候哉、於祝社役者、不可有無御^(沙汰カ)座候、殊袖始之儀、大々工被沙汰專候、神道祕密之儀共候哉、聊拙者非無御^(沙汰カ)座候、御分別專一候、恐々謹言、

卯月十三日

宮重

佐田殿 御報

二十日、^(庚戌)山城般舟三昧院ニ於テ、贈皇太后庭田朝子十八回忌ヲ修セラ

〔康親卿記〕

來廿日、奉爲贈^(庭田朝子)皇后宮御正忌於般舟三昧院、可有御經供養、御導師可令參勤^(太師之下同シ)

給者、依天氣執達如件、

七月八日

左中將康親^(申出)

尋常者題名僧一被口可被相件之由案之趣也、是舊

無量壽院僧都御房

追申、題名僧大心院律師可被伴參之由、被仰下候也、

來廿日、奉爲贈皇后宮御正忌、於般舟三昧院、可有御經供養、題名僧可令參勤給者、依天氣執達如件、

七月八日

左中將康親

此御教書今度別而依懇望書遣候也、

大心院律師御房

追申、導師無量壽院僧都可令存知給候也、

來廿日、於般舟三昧院、可有御經供養、可令參仕給者、依天氣上啓如件、

七月八日

左中將康親

謹上 大藏卿殿 (東坊城和長) 著座公卿

永正六年七月二十日

八六九

導師無量壽院彦聰
題名僧大心院律師

東坊城和長參仕ス

布施取白
川雅業

永正六年七月二十日

八七〇

來廿日、於般舟三昧院、可有御經供養、御布施取可令參勤給者、依天氣執達如件、

七月八日

左中將康親

謹上 白川少將殿

五條爲學
ナシテ御
願文及ビ
草進文チ
メラレシ
ヲ

來廿日、奉爲贈皇后宮御正忌、於般舟三昧院、可有御經供養、御願文可令草進給者、依天氣執達如件、

七月八日

左中將康親

追申、
同諷誦文可令存知給也、

〔拾芥記〕

中 七月廿日、於般舟院、有贈后十八御經供養、御導師無量壽院、彦

聰子草進諷誦、

〔願文集〕

六 贈皇太后十八回

御願文

夫虞帝巡狩時、猶記娥英之隨去、周室興盛日、更仰任姒之輔成、慈教攸覃、政化無際者哉、伏惟先妣贈皇太后尊靈、溫恭而履度、寬祐而布仁、勵華袞咫尺之勤勞、恩顧尤厚、稱椒房第一之美譽、寵幸無他、雖然謙退省身、憐班姬辭釐昔、內訓

法華經及
部淨土三
寫經ヲ摺
セラル

專志感武后垂簾春、吁乎花顏俄凋、菱面空掩、帳中夜靜、月色猶如照舊容、床上塵深、年光早嘆、催遠諱、爰眇身謬、稟大寶位、猥居十善尊、我希諫言、思蕭曹之隨高祖、徒乏良弼、美周召之相成、王難起者、德儀未盡其純孝、因茲奉供養舊圖、釋迦如來尊像、一幅奉摺寫妙法蓮華經一部八卷、并淨土三部經一部、廼命權少僧都法眼和尚位彥聰爲唱導師、博識度人、快朗胸中之月、演說驚衆、遠漲舌上之瀾、克續乃祖風光、式得後生才幹、觀夫瀾松遶寺、自迎陰陰之涼、崗梧帶秋、先聽葉葉之雨、山色清淨、地亦神靈、然則尊靈早脫苦輪、極等覺無位之勝、果速挑慧炬、照衆生有漏之暗冥、凡厥功德多端、頓證極樂、敬白、

永正六年七月 日

諷誦文

敬白

請諷誦事

三寶衆僧御布施

右先妣贈皇太后尊靈、孟秋之天、下旬之候、自告殂落以降、既迎十有八之星霜、追修善緣、幾回先設一七箇日之法會、廼賁鷲子講座、驚鵝王高聽、淮槎餘薰、遍

永正六年七月二十日

八七一

永正六年七月二十日

八七二

滿邊法界、豐鐘逸韻、須到有頂天、仰願上生下生、自力他力、皆得作佛、巨益無差、仍諷誦所修如件、

永正六年七月 日

草 大内記 菅爲一(五條)學

清書行 季朝臣(世尊寺)

○朝子、薨去ノコト、明應元年七月二十日ノ條ニ見ユ、

愛洲某、大神宮領伊勢大湊ヲ犯サントス、仍リテ、宇治六郷神人等、之ヲ停止セラレンコトヲ請フ、

〔内宮禰宜荒木田守晨引付〕上

一皇太神宮神主

早可蒙御裁許大湊事

右件大湊者、自往昔異嚴重于他神領也、所以者何、兩大神宮朝夕御膳米神船調役勤仕無懈怠之處、自愛洲方可有發向彼在所之由風聞、爲事實者、神供闕如之基歟、神慮太以難測、然間忝奉行神明之正印、令言上者也、尙以巨細宇治六郷神人等之載注進狀具也、神訴之旨、爭被棄捐乎、早被仰宥、悉以大湊之儀

内宮禰宜
解狀大神宮
兩大神宮
御料神
船料神
領料神
神領料
神領料
ノ神領料
ノ神領料
ノ神領料

令靜謐和與者、御神忠御祈禱何事如之、仍注進如件、以解、

永正六年七月 日

禰宜 守則(荒木田) 十人

外宮廳宣文言同、仍不注、

神人解狀

宇治六郷大少内人神役人等謹言上

可早預御成敗爲無事安全神領大湊事

右在所者、御裳濯、宮川兩神水之流、而瑞籬之近郷、而二所太神宮朝夕御饌料神船勤役調進嚴重御神領也、次兩宮神家長官傍官、始申、大少内人、在々所々攝社末社等祝諸役人等之衣食賣買、乃便悉皆大湊、乃不倚助者、迷惑何事如之、殊宇治郷者、異無力于他、諸商買以下彼在所、於不煩、波每事不可叶、爰先度愛洲殿大湊、江可有御勢遣刻、仁被仰和無事之由承及、各喜悅之處、此間可有御發向之由風聞、爲事實、波神鑑寂叵測者哉、可然樣、仁被仰宥、被止御發向之儀者、神慮快然、御神忠之瑞、一、殊、爾者愛洲殿御祈禱之專、一不可過之、仍爲蒙御成敗、神人等一同謹言上如件、

大湊ハ兩
宮神家諸
役人等衣
食賣買ノ
便ヲ仰カ
ノ地

永正六年七月二十日

八七三

永正六年七月二十日

八七四

永正六年七月廿日

山田三方
愁訴狀

目安
謹言上

山田三方

自愛洲殿可有^(安)大湊御發向由愁訴事
抑彼在所者御鎮座近邊而久住者各專役人等也并御饌料調進舟出入之津
也然到已所者必定御供可有懈怠歟神難^(敬)此事耳也且者一天之凶事歟以之
早被成御嚴重御下知令爲無爲者御神忠何事如之爰元躰以內外御廳宣秀^(秀)
御申御沙汰之條不能述索唯奉憑寬宥御助外無他謹訴狀趣蓋如件
永正六曆夷則日

萬正禮物

乍恐申上候仍就湊之義自兩宮以御廳宣被申候并宇治當所各捧目安候於
此上先度内々申上候万正御禮物之事湊へ可申付候猶々御廳宣申事候忝
御神御正印被行候併御神訴迄候不少□義候□奉憑御心得候恐惶謹言
七月
山田

謹上 佛光寺 ○内宮引付
異事ナシ

二十二日^壬神祇權大副藤波伊忠豐受大神宮ヲ造替シテ遷宮ヲ行ハ
コトヲ請フ

〔壬生家四卷之日記〕 一 七月廿二日
符集^{下請}神宮造替事

造營數十
年延引ス

豐受太神宮造替遷御事禰宜一同正印注進到來候抑造營事數十ヶ年御
延引之條雖加御修理可及御顛倒ニ急度被遂彼節者天下泰平國家安全
御祈禱不可過之候此旨可令申上給恐々謹言

七月廿二日

神祇權大副判
(藤波伊忠)

進上四位史殿
(小槻時元)

進上

祭主伊忠卿書狀一通
(藤波)

豐受太神宮造替事
副本

右進上如件

七月廿二日

左大史小槻時元

永正六年七月二十二日

八七五

永正六年七月二十四日

進上頭右中將殿

山城八瀨童子等ノ諸役ヲ免除シ、先規ヲ守リテ、商賣セシム、

〔八瀨記〕 乾

人皇百五代後柏原院御宇
八瀨童子等、自往古諸役免除之旨、被聞食畢、近年退新儀之妨、守先規、可致商賣之由、天氣如此、仍悉之、

永正六年七月廿二日

右中將判（正親町實胤）○華頂要略所載天

台座主記及ヒ八瀨

二十四日、甲寅幕府、山城賀茂莊名主ヲシテ、建聖院領同國賀茂莊内齋宮莊等ノ年貢及ビ諸公事物等ヲ、惠聖院雜掌ニ交付セシム、

〔寶鏡寺文書〕六○山城

惠聖院雜掌申、建聖院領山城國賀茂莊内齋宮莊、同本家下地一圓事、先御代沼田上野介光延申給之間、去年以來被置所務於中、糺明之處更無證跡、所詮任證文之旨、被返付訖、早如元年貢諸公事物等、嚴密可沙汰渡彼雜掌之由、所被仰出之狀如件、

永正六年七月廿四日

貞運（飯尾）花押

當所名主沙汰人中

基雄（實雄）花押

幕府、正實坊ニ、京都五條東洞院南西ノ地ヲ安堵セシム、

〔前田家所藏文書〕

屋敷五條東洞院南西頰事、任去明應七年四月四日還補奉書之旨、彌全領知、可被致奉公忠之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正六年七月廿四日

下野（飯尾之秀）守花押
左衛門尉（遊佐貞兼）花押

正實坊

二十八日、戊午山城石清水八幡宮社司田中清若ヲシテ、其末社丹波如意別宮ノ遷座ヲ行ハシメラル、

〔康親卿記〕

石清水八幡宮末社丹波國何鹿郡高津庄如意別宮事、被遂造（意）榮云々、神妙之至、叡感此事候、仍御神躰之儀、任本社之舊例、可令奉遷者、天氣如此、悉之以狀、

永正六年七月廿八日

左中將判（中山康親）

永正六年七月二十八日

永正六年七月二十八日

田中清若殿○康親貫首拜賀
次第異事ナシ

八七八

上杉顯定、子憲房ト共ニ、武藏、上野ノ兵ヲ率井テ、越後ニ入り、長尾爲景ヲ伐ツ、尋デ、爲景、上杉定實ヲ奉ジテ、越中西濱ニ走り、援ヲ幕府及ビ伊達尙宗ニ請フ、

〔實隆公記〕一四十一 八月廿九日、己丑晴、○中略

抑越後國七月廿七日、牢人出張之、國悉滅亡云々、天王寺商人等上洛、以全身命爲詮之由稱之、當年又苧公事可空手歟、牢籠之基爲之如何、仰彼蒼而已、

〔武州文書〕三 龜戸町禪僧宗列所藏

來廿八日、必而越州可進發間、然者左衛門佐同心ニ不移時日、上田庄へ被打差、可有調談候、此趣親類同道中へ可被相届候、恐々謹言、

七月廿四日

（上杉顯定）
可諄在判○本書宛名ヲ闕ケ
下モ、平子孫三郎ニ
送ナラシム

本書共越州へ御越候間、寫之置也、

〔歷代古案〕三

一、鉢形、忍兩城堅固專一之由、候、此一儀專申遣候、治部（上杉顯定）入道建芳、毛頭無疎略、定而可有其間、當國進發之砌、互ニ露神名、以自筆成誓書故候、是又可心

天王寺商人等上洛、以全身命爲詮之由稱之、當年又苧公事可空手歟、牢籠之基爲之如何、仰彼蒼而已、

上杉朝良顯定ニ黨ス

鉢形城主長尾顯方

安候、房○上下略全文ハ、七年六月十二日、憲爲景ト越後椎谷ニ戰フ條ニ收ム

永正七年六月十二日

可諄

〔東路の津登〕（永正六年八月） 同十五日、（三田） 氏宗、おあしく息政定、こせられ駒うちあらへ、むぎ

し野の萩薄の中を過行ゐて、長尾孫太郎顯方の館、とちうとといふ處よつきぬ、政定馬上あうらくちすきひよ、

むぎし野の露れあきりの分もまつ秋の風をいしら川の關

この比、越後の國鉾楯よより、武藏、上野の侍進發のと有て、いつこもまけりう取らざりしう、ひと夜有て、翌日日さけて、長井に誰ゑらんの宿所へと送らる、夜よ入ておちつきぬ、明る朝、利根川の舟渡りをして、上野の國新田の庄（岩松）よ禮部尙純隱遁ありて、今の靜喜うに閑居よ五六日連歌きひくよおよへり、

露分て袖よみるへき野山あな

〔發智文書〕○羽前

同名三郎右衛門尉方へ切紙具披閱、自關東行之時節、涯分可勵忠節旨、披露紙面候、尤簡要候、委曲自三郎右衛門方可被申越候、恐々謹言、

永正六年七月二十八日

八七九

發智孫三郎憲房ニ應ズ

顯定發智
六郎右衛
門ヲ誘フ

永正六年七月二十八日

六月七日

發智孫三郎殿

憲房(上杉)花押

八八〇

度々尻高左京亮方へ被申越旨候哉然者此砌一段被露忠節候者可爲感悅候、恐々謹言、

七月廿六日

發智六郎右衛門尉殿

可諄(花押)

猶々同名孫左衛門尉并左京亮所へ口上之趣、尤調法簡要候、

〔白川文書〕

○陸前

可諄與風向越州令出陣候、因茲懇可相談候、努不可有疎儀候、巨細被仰舍使節候、謹言、

七月廿八日

小峯修理大夫殿

(足利政氏)花押

足利朝政氏
結城朝顯
ヲシテ顯
定ニ應ゼ

〔伊達家文書〕

謹上 伊達大膳大夫殿

右京大夫高國

幕府尙宗
ヲシテ定
實ヲ援ケ
シム

越後國牢人等徘徊當國之由候、事實候者不可然候、所詮相談上杉兵庫頭被抽忠節者、可爲神妙旨被仰出候、恐々謹言、

永正六年
七月廿四日

謹上 伊達大膳大夫殿

右京大夫高國(細川)花押

謹上 伊達大膳大夫殿

右京大夫高國

於越後國、牢人以下令亂入之由候、無是非次第候、任先度御下知之旨、不日被合力上杉兵庫頭、可被抽忠節之通、被仰出候、恐々謹言、

十月二日

謹上 伊達大膳大夫殿

右京大夫高國(花押)

〔讀史堂古文書〕

○伊佐早謙氏所藏

從越中定實切紙具令披達、則及御報候、然者合力之事承候、委細之旨、黑川方一通之申候間、不能詳候、恐々謹言、

九月十一日

謹上 中條殿

大膳大夫尙宗(伊達)

尙宗定實
ヲ援ケ

永正六年七月二十八日

八八一

尙宗黑川
盛實中條
藤資ト共
ニ加地莊
顯定陣ス
顯定實
下戰フ
下名盛高
居中調停
ヲ謀ル

以旁御動揚北一篇加地庄張陣之由候、無是非次第候、依之早速合力之事承候、尤雖可成其行候、可諄定實一切無御餘儀之由、度々披露書中候、然處蘆名方和談之儀、可有之之由、以小倉軒被申越候間、相任然儀候、雖然自然有相違及鉾楯、自越中至御入國者、一事可得御意候、恐々謹言、

九月十八日

尙宗

黑川彈正左衛門尉殿

中條彈正左衛門尉殿

〔築地文書〕

前羽

不慮題目故、至于越中入馬候、年内及風雪候間、行延引候、京都上意御嚴重候間、來年越中能登、飛彈、信濃相談、西濱口、高梨口事可成調義候、其口事、伊達方懇切被申越候間、偏相憑候、有兵談入國之砌、彌被勵軍功候者、可爲感悅候、本意之上、努々不可有疎略候、何様來春重可申送候、謹言、

十月六日

定實〔花押〕

築地修理亮殿

幕府定實
ヲ援ク
越中能登
飛驒信濃
誘フ人々ヲ
定實築地
修理亮ヲ
シテ尙宗
ヲ事ナシム

長尾景春
爲景二屬

〔長尾正統系圖〕

景春四郎右衛門 始者孫四郎 略中 永正六年、伊立入道越後乃長尾信

憲房白井
城ヲ攻ム
尻高左京
亮憲房ニ
降ル

濃守爲景登 示合、沼田、白井乃兩城、越堅免天、管領越後江乃通路於妨留、依之憲房、同年六月、八州乃諸士於引率志、白井乃城於責羅留、伊玄軍利於失、己賀領分利根川乃向不動山乃館仁、楯籠留、沼田乃城主波、憲房江降參須、白井乃城仁波、大森式部入道武相兩國乃良士於籠置、管領憲房越後江進發天、多勢於以天爲景登、合戰時仁爲景戰負天、同六年七月廿八日、越中國江退久、管領父子越後仁在留須、略下

〔源姓村山系圖〕

盛義村山越中 始孫六 同六年、關東管領上杉民部大輔顯定公、爲

越後ノ兵
定實ヲ擁
ス
村山盛義
定實ニ屬
ス
顯定定實
ト共ニ爲
トノ戰フ
景ノ說

景誅伐而武刃鉢形立、越後江打入、又白井上杉兵部大輔憲房公同越後江打入、此時越後兵士相儀而、上條之上杉兵庫頭定實公ヲ取立大將ト而、猶々村山孫六盛義有御旗、下抽忠功、又顯定公、定實公兩大將ト而、爲景與戰、爲景敗北、西濱江落行、

〔諸家系圖纂〕

七之二 政盛攝津守刑部大輔 永正十年四月廿七 永正六

年、越後國守護人上杉民部少輔房能家人長尾六郎爲景起逆心、越後國雨溝ト云所ニテ、房能ヲ討殺、越後國ヲ押領ス、是ヲ聞、前管領顯定入道可諄、當屋

永正六年七月二十八日

八八三

永正六年七月二十八日

八八四

形憲房ヲ相伴、赴越後、同七月廿八日合戦有、長尾打負、越中國西濱エ落行、
略

〔北條五代記〕 二 兩上杉たゝかひの事

越後概ネ
顯定ニ屬ス

顯定の十四歳の比、關東へ越山ありてこのうゝ、四十三年弓矢をとり給ひぬ、越州の玄やてい九郎房義家（能平四郎）老長尾爲景とむ玄ゆん有、是并よの房義うちまけ、あまみそといふ地よてうゝれ給ひぬ、是よよつて顯定うつふんをさんせんきめ、永正六年七月廿八日、武州を打ち、翌月越州へ發向ありて、國中大うゝ手よいを、本意をとけられ、爲景を越中のさうひ、よしとはへほいゝうあり、
略上

〔鎌倉九代記〕 六

長尾爲景逆心

○上略、爲景房能ヲ撃チ、越後ヲ平定スル、山内乃管領上杉民部太輔顯定の、コトニカ、ル、四年八月七日ノ條ニ收ム、山内乃管領上杉民部太輔顯定の、此よしを聞玉ひ、やまうらぬ事うあ、我う弟乃分國を、家臣乃よめよ打とられ、正しき讎敵を其ま置て、家門のき免腹心乃痾病と成へし、速うよ退治して、且ぬ先亡乃いきとをりをやま免、且の國家乃靜治をいゝを急しとて、子息當管領五郎憲房兩大將として、上州の軍勢八千よ騎を率して、同七
略

爲景ノ居
館ヲ燒ク

〔足利季世記〕 二

義晴御誕生之事

月廿八日、越後國よ打こえ、長尾う館よそをしよせらる、六郎爲景折ふし勢こそあうりたれ、要害あさまよして、ふやくへきやうもあく、一戦よ利をうしあひ、家の子郎從數多打を、我身の寄手乃中を切ぬけ、夜もまうら難所をこえて、越中國西濱と云所よ落行ゝり、顯定入道父子、思ひ乃外よ安々を敵を打おとし、館よ火をうけて焼らひ、猶國中乃政道をそおこあえれけふ、
其比肩ヲハリ、黨ヲタツル大名アマタルトイヘ、關東ノ上杉、美濃ノ齋藤、越後ノ上杉、駿河ノ今川、伊勢ノ國司ナント、イツレモ多勢ノ人々ニテ、此亂中ニモ、イマタ一度モ上洛セス、公方ノ一大事ニ及フ事アラハ、馳上リ御難儀ニモ替ラント、頼母敷思召ケルニ、越後守護代民部大輔房能、家人長尾ノ六郎爲景ニウタレテ、越後亡國ト成シカハ、關東上杉ノ顯定、憲房越後打越、爲景ヲ責シカハ、不叶シテ爲景越中エ落ケレハ、信濃ノ高梨攝津守、爲景ニカタラハレ、越後エ打越、椎屋ノ合戦ニ打勝、顯定ヲ打取シカハ、憲房不叶上州エ歸リケリ、
略下

〔鎌倉九代後記〕

政氏（是利）成氏男、左馬頭、略、
○上（永正六年）同年七月廿八日、顯定、憲房武州ヲ立テ、

永正六年七月二十八日

八八五

永正六年七月二十八日

八八六

翌月、越州へ著陣シ、爲景ト合戦、則打勝テ國中ヲ治ム、爲景ハ越中ノ境西濱へ敗走ス、

〔相州兵亂記一名關東兵亂記〕二 可諄討死之事

カ、ル處ニ、上杉ノ家老長尾六郎爲景逆心ヲ起シ、越後ノ守護人上杉民部大輔房能ヲ、越後ノ雨溝ト云處ニテ打殺シ、越州ヲ乗取リシカハ、管領顯定入道、當屋形憲房ヲ相伴ヒ、上州ヨリ打立、越州へ押寄、永正六年七月廿八日、長尾六郎ヲ責玉ヘハ、爲景軍ニ打負テ、越中ノ國西濱へ落行ケル、可諄、憲房戰ニ打勝、猶國中并近邊ヲ下知シテ、在國シタリ、略下

〔湘山星移集〕一 上杉家之事略○中サテ當屋形様ヲハ顯定ト申、是ハ當國相

模守房定二男ニテ御座、御年十四歳ノ時、關東越山四十三年御座テ、越州ノ御舍弟九郎房義（能）、臣家尾六郎爲景ト銚楯有テ、終ニ雨溝ト云地ニテ御腹被召候、依之顯定鬱積ヲ散ンタメ、永正六年七月廿八日、武州ヲ御立アリ、八月、越州發向有、大概國中御本意ニ屬、爲景ヲ越中ノ境兩濱ニ追越トイヘテ、翌年土揆代（下）ハリ、六月廿日、御年五十七ニシテ御生害アリ、

○房能爲景ト戰ヒテ、越後天水ニ敗死スルコト、四年八月七日ノ條ニ、

顯定、平子房長ヲシテ、越後杉一揆ノ徒ヲ糾合シテ、忠節ヲ勵マシムルコト、本年八月二十八日ノ條ニ、憲房爲景ト越後椎谷ニ戰ヒ、敗レテ同國妻有莊ニ走ルコト、七年六月十二日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔北越軍記〕一 長尾爲景企逆心、上杉房能弑事

略○上（永正六年）同年四月ニ、關東管領上杉顯定ハ、弟民部太輔房能ノ讐、逆臣ノ爲景ヲ誅伐セン爲、武州鉢形城ヲ立テ、一万五千計、上州石白（石カ）ノ泉福寺ヲ經テ、越後へ被打入ニ付、白井ノ上杉兵部太輔憲房モ、顯定トハ從弟ナレハ、八千餘ニテ同越後へ打入被申候、亡主房能譜代ノ軍兵中條越前守藤資、新發田五郎長敦、八條左衛門太夫景國、宇佐美駿河守定行、柿崎彌三郎景持、風間河内守信綱、大熊備前守朝秀、庄新左衛門尉實爲、五十嵐小文四友常、島倉内匠助、長與三盛連、山吉彌右衛門、齋藤八郎、上野源六、篠塚摠左衛門、世良田九左衛門ヲ始テ、顯定ノ手ニ馳加ル、宇佐美駿河守ハ、上條ノ上杉定實ヲ大將トシテ、顯定ノ先手トナリ、市振ト申所ニテ合戦シ、爲景ヲ切崩、數千人討捕シカハ、爲景敗北シ、越中ノ西濱へ落行、顯定ハ府内ニ馬ヲ立、憲房ハ椎屋ニ陣取、國

永正六年七月二十八日

八八七

中條藤資
新發田長
敦等顯定
ニ黨ス

市振ノ戰

永正六年七月三十日

八八八

顯定越後
ヲ定ム
市振

中ヲ打隨被申候、國中ニツ三ツニワカレ、方々ノ兵亂止時ナク候ヘ、顯定
勇將タルニヨリ、翌ル永正七年ノ春ニ至テ、越後一國平均ニ治リケル、略下
〔北越略風土記〕三頸城郡古戰場之部 市振 越中國との境際あり、永正六年、
上杉定實と長尾爲景との軍場あり、爲景敗北、

三十日庚申從五位下大中臣廣長ヲ、大神宮大宮司ト爲ス、

〔内宮引付〕

上卿（松本實綱）中御門新大納言

永正六年七月卅日 宣旨

從五位下大中臣廣長

宜爲伊勢太神宮大宮司、

藏人頭右近衛權中將藤原實胤（正親町）奉

大中臣廣長宜爲太神宮司、早可從神事之由、可令下知給狀如件、

下知狀

七月卅日

（小槻時元）
左大史 判

謹上 祭主三位殿（藤原伊忠）○以上二通、壬生家四
卷之日記、異事ナシ、

從五位下大中臣廣長

左少辨藤原朝臣伊長傳宣、權大納言藤原朝臣宣胤宣、奉勅、件人宜爲太神宮
大宮司者、

永正六年七月卅日

修理東大寺大佛長官左大史小槻宿禰判奉

下 太神宮司

可早任 御教書從神事

太神宮司廣長事

副下 御教書宮狀

右任宣下之旨、可從神事之狀如件、以下、

永正六年七月卅日

祭主從三位行神祇權大副大中臣朝臣伊忠

〔實隆公記〕

四十 二月卅日、壬辰、晴、○中

依神宮大宮司事、再往阿野使者問答、傳奏中御門大納言申狀等、條々有申含
子細、彼狀等可續之、

永正六年七月三十日

八八九

三條西實
隆ノ意見
ヲ徴セラ

永正六年七月是月

八九〇

〔大中臣系圖〕

則長

大司 永正六年同八
廣長 月十九日任

〔中臣氏系圖〕

代宮司圖近

則長

廣長 月一男大司永正六年閏八
月十九日任在任口年八

伊長

是月、皇子寛御誕生、尋テ、梶井宮堯胤法親王ノ附弟トナラセラル、

〔實隆公記〕

一四一 八月二日、壬戌、晴、略、中

御産所忌

若宮御方
違
參會ノ人

御産所今日御忌開云々、青女方被送朝飧、午後依招予參入、若宮端正殊勝之御容儀也、珍重々々、三獻有御盃酌、其後猶盃數巡、昏色之程歸宅、若宮今夜爲御方違、御出勾當内侍里、則還御云々、今日參會人々、
二位局 三位局 大典侍 新大典侍 勾當内侍 御阿古 東方 故宰

堯胤法親
王ノ附弟
ト爲サレ
三條西實
隆ニ女房
奉書ノ案
ヲ草シ
メテ附弟
ト治定ス

冷泉政爲
ノ女ヲ若
宮ノ上臈
ト爲ス

相中將後室北向 一獻之時 中御門新大納言 (松木宗綱) 四辻新大納言 (季經) 按察 (綾小路俊重) 兵部卿 (白川忠常) 伯二位 冷泉宰相 (公實) 四辻宰相中將 隆康朝臣 (隆康) 重親 (藤田) 宗藤 (松木) 範 (高) 久 (牛井) 明重入道 明孝等也

六日、丙寅、陰、自午雨降風吹、略、中
女房奉書到來、今度御誕生若宮、可爲梶井宮御附弟、其間事遮而可被仰出之、内々女房奉書案可書進上之由也、則書進上之、及晚自伏見殿有御書、彼御附弟事御治定、御祝著之趣也、

七日、丁卯、霽、略、中
入夜參竹園、今若宮梶井門跡御治定條、珍重由申入了、李部(邦高親王)王御對面、暫談雜事退出、

十四日、甲戌、晴、自晚雨、八月節、略、中
抑冷亞相息女 (冷泉政爲) 耶男(元光) 酌之仁也、今若宮上臈御事闕之間、可新參之由、勾當書狀内々被見之、就仰者何事之在哉之由報了、可否難知、
廿二日、壬午、晴、略、中

今日、今若宮上臈冷泉大納言息女新參云々、

永正六年七月是月

八九一

始メテ参
内セラレ

永正六年七月是月

八九二

廿五日、乙酉、雨降、暴風、今日、今若宮始而御参内云々、
閏八月廿五日、甲寅、陰、及晩雨濺、則霽、略中
入夜参伏見殿、源氏色紙事申之、數刻御言談、今若宮奉抱之、御容顔美麗、自愛
事也、

〔實隆公記〕

十〇 永正六年八月
十四日 裏文書

いま包ら宮、かち母とのへこし入を入りいらせられ候へき御事、あかよ
り、きと申され候のんすれども、この御所よりさよめ申され候やうよ、ちや
うなどをめしてを、お母をいよされ候の、一さん御まうちやくの御事よ
て候へきあと、ふしよとのよりうちく申され候、おう人あとめしお母を
られ候へき事、いまのきとまざるやうよ候やとよ、よつねのまどくも
んをたへ、文よてあいく申されて、よろしく候やと御得しめし候、このふ
んよてよく御いり候の、これさへよて候へき候、まうるへきやうよ、一ふ
て文のあんをそとをいらせられ候の、そのふんよりをられ候て、なふ
ふいらせられ候へき候、いう候へき、よろつするくとおのしまし候よ
し、□□事候、このやう御心え候へき候、し、

御附弟ト
ナラセラ
ルニ就
キ邦高親
王ノ御希

書状ヲ以
テ内々門
跡ニ申入

いハされよてももの申給へ

梶井宮門
跡へ御入
室ヲ望マ

門跡再興
タルベシ

このよひ御さんしやうのわう宮の御うよ、御ふていよはよめられ候はん
まるよしをしめし候、さへきりてうやうよ申され候も、いうあるやう
に候へども、さたのたひも、色く御申のまさい候しやとよ、やうてよりの
りよ申され候うよ候へども、ものもんをたへとの御をもむきよて候、はも
お母しめし候事よて候の、めてよくのやくと御入室の事なども、お母
せつせられ候て、もんをた御さいおの御事よて候へきと、ふんしお母し
めし候、このよし申とて候、

○皇子御誕生ノ日詳ナラズ、今姑ク、實隆公記ニ據リテ、茲ニ收ム、

〔参考〕

〔本朝皇胤紹運録〕

○宮内省圖
書寮所藏

後柏原院

後奈良院 御母准三宮藤子、(御母)

覺道法親王 母贈二品典侍源子、故從一位源雅行卿女、(源氏)

永正六年七月是月

八九三

永正六年七月是月

八九四

尊鎮法親王

青蓮院母同今上
本名一猷俗名清彦

僧道喜

母掌侍繼子中納言永繼女

彦胤法親王

俗名寬恆母同覺道親王

〔華頂要略〕

百四十一
圓融坊

諸門跡傳二

入道彦胤親王

後柏原院第四皇子
贈二位源子從一位雅母

御母庭田
雅行女
親王宣下

〔庭田家譜斷絶庶流譜〕

雅行

重經

日謹

女母不詳

源子、後柏原天皇宮女、任典侍、敍正五位下、生覺道、彦胤二皇子及皇女、大永六年四月十三日卒、享年四十有八、贈從二位、

八月辛酉朔

一日、辛酉八朔御祝、

〔實隆公記〕

一四一

八月朔日、辛酉、天晴、南呂朔、幸甚々々、行水念誦如例、

早朝御頼太刀一腰令持進室町殿、

彌三郎使者也、禁裏相公分、短冊二百首、十帖伏見殿、返則給之、右大臣來臨、携太刀、遣太刀了、禁裏

御返及晚賜之花瓶、

一本、十帖、畏入之由申之、資直來、有象戲、今日來賀人々

少々、各勸一盞了、陶三郎來、入夜相公參内、御祝如例云々、

三日、癸亥、雨降、

略

宮御方御返、

金到來、中將方帶扇、十帖被下之、室町殿御返御太刀到來、伊勢左

京亮付久米許云々、

〔宣胤卿記〕

八朔

同六年己巳、

内裏 檀紙十帖

中納言御太刀送同

虫籠一

代八十

御返同十帖

香爐 茶碗

御うへし十帖御かうろ下され候、

去うちやくかしこまり存候、去こう仕

候て申入へく候、

又中納言御さち下され候、かしこまり存候、まつく色

々候て、御ひろう候へく候、

かしこ

永正六年八月一日

八九五

三條西實
隆義尹ニ
太刀ヲ贈
ル
實隆公條
禁裏及ビ
皇子ニ物
ヲ獻ズ
實隆ニ御
返ヲ賜フ
若宮實隆
賜フ
中御門宣
胤檀紙虫
籠ヲ獻ス

永正六年八月一日

のふ胤

八九六

表書

勾當内侍とのへ御局へ

權大納言義尹 室町殿 御太刀廿九日語御承仕傳進之御返御太刀到來、

右大相公 勸修寺 太刀金使者又遣了

○諸家八朔贈遺ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔前田家所藏文書〕

爲八朔祝儀、太刀一腰祝著之至候、同一振令還之候、併表賀禮計候、仍御祈念儀、彌丹誠所仰候、恐々謹言、

永正六

八月朔日

義興(大町)花押

竹院主

〔御狀引付〕

爲八朔祝儀、筵廿枚海月桶二、贈給候、嘉例之儀懇悅之至候、仍太刀一腰糸進之候、併表吉慶計候、猶

宣胤義尹
二太刀ヲ
贈ル

大内義興
石清水八
幡宮權別
當東竹城
清ノ贈遺
ヲ謝ス

伊勢貞陸
松田親元
ノ贈遺ヲ
謝ス

十二月廿六日

貞陸(伊勢)

松田豊後守殿

此八朔之事、永正六分也、仍日付已下如此、

二日、戌壬是ヨリ先三好之長、長秀父子、細川高國卜京都二戰ヒ、長秀、伊勢二奔ル、國司北畠材親之ヲ攻ム、是日、長秀自盡ス、

〔禁忌集唾〕

外宮子良館日記曰、同年八月二日、三好某於御炊大夫宅生害、

〔實隆公記〕

一四一 八月五日、乙丑、霽、略中

〔御内書案〕

今度牢人之儀、於其方、或討捕、或搦捕、旨注進到來、尤以神妙、連々無疎略段、忠節無比類候、仍太刀一腰、國吉馬一疋、鴉毛、進之狀如件、

八月十日

北畠中納言殿

〔三好長秀誅伐感狀案〕

勢○伊

尚□□懇切□□本望□、殊御使僧正興寺御對面候、併御面目候哉、

永正六年八月二日

八九七

山田御炊
大夫宅ニ
テ自殺ス

義尹材親
スノ功ヲ賞

阿野季綱
書狀

永正六年八月二日

八九八

今度牢人之事□嚴重被仰付候條、御感不斜候、於拙者本懷候、仍御太刀、御馬等被進、以御内書被仰出候、右京大夫依有被申旨、彼方被渡遣之間、委細定而被申候哉、向後彌御忠節專要候、猶心事正興寺申候條、拋筆候、恐惶謹言、

八月 日

季綱

北畠殿

細川高國
書狀
捕虜ヲ京
都ニ送ル

今度被取籠牢人事、被討捕頸□虜赤澤次郎、篠原孫四郎、同下人等相具、富田昨日□京著仕候、殊正興寺爲御使上洛、旁御懇切之至、不知所謝候、自是以使者可申候條、只今不能詳候、如仰向後□而可申□儀、尤本懷候、恐々謹言、

八月 日

高國

北畠殿
進覽之候

□山田被取籠牢人事、被討捕首并虜以下自黃門上給候、殊爲御使正興寺□洛候、旁懇切□祝著無極候、猶以使者可申候由、進書狀候、可被得其心候、委曲石田四郎兵衛尉可申候、恐々謹言、

八月九日

高國

垂水十郎次郎殿

松田長秀
奉書

今度於勢州山田、牢人等誅伐之事、各被致忠節候、神妙候、向後彌可□□□之由、被仰下之旨候、仍執達如件、

永正六年八月十一日

松田前丹後守

志摩國人拾三人中

大内義興
書狀

今度於山田、牢人等被召籠、嚴重御成敗、尤御忠節之至候、就其御□蒙仰候、本望候、猶子細正興寺可令演說給候、恐々謹言、

八月十三日

義興

北畠殿
人々御中

今度於山田、牢人數多被討捕、殊虜以下被差上候事、外聞實□□望不可過之候、誠連々□所樣對大夫無御等閑、雖令各□申儀候、併貴所依御馳走如

永正六年八月二日

八九九

石田國實
書狀

永正六年八月二日

九〇〇

此候事、別而祝著之旨、大夫以書狀令申候、猶於已後彌御入魂、可爲本望旨、從私具可申候由候、委細之段正興寺被申候間、不能巨細候、恐々謹言、

石田四郎兵衛尉
國實

八月九日

垂水十郎次郎殿

問田弘胤
書狀

於山田御敵、牢人被召籠候趣、御注進披露仕候、直被致御報候、今度一段嚴重御下知、公私肝要之由候、定而爲上意、可被仰出旨候、猶正興寺申候、此等之趣、可有御披露候、恐々謹言、

八月十三日

問田大藏少輔
弘胤

垂水十郎次郎殿

〔細川兩家記〕

○上略、細川澄元及比三好之長、高國ト戰ヒテ敗レ、近三好筑前守息下總守ハ、伊勢國山田へ落給ひたるを、國司より仰付らる、生害ささらせ、京の高國へ上らるる也、

○三好之長父子、京都ヲ攻メントシテ、兵ヲ近江ニ起シ、山城如意嶽ニ陣シ、敗走スルコト、六月十七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔諸家系圖纂〕

六ノ二 阿州三好系圖
之長 筑前守、又號長輝、京都百萬返寺ニテ切腹

長秀 下總守、永正五年四月九日、於伊勢國山田爲國司切腹

長則 彦次郎、號芥川、父同

長光 孫四郎、同父

賴澄 小笠原伊豫守

政長 神五郎、法名宗三、越前守

女子

女子

〔足利季世記〕

二 澄元沒落之事

元長ノ嫡子三好下總守長秀ハ、父ノ行衛モシラスシテ、伊勢國山田ニ落行シテ、伊勢國司ハ京方シテ、討手ヲ指向ラレケル間、山田ニテ長秀自害シケル、
上略
下略

〔重編應仁記〕

十 細川六郎澄元任管領職事

世系

永正六年八月二日

九〇一

永正六年八月三日

九〇二

材親ハ高
國ノ女婿

弟賴澄等
亦自盡ス

略○上 頓而翌十日、民部大輔高國ハ即歸洛シタリケル、扱澄元ト希雲居士ハ、
又江州へ忍行テ、甲賀山ノ山中新左衛門ヲ頼ンテ居ケリ、三好下總守長秀
ハ、勢州サシテ落行ケルヲ、其比ノ伊勢國司北畠材親卿ハ、高國ノ智也ケル
故、討手ヲ差向ケ、攻ラレケルニ、長秀終ニ打負テ、山田ノ中嶋ト云所ニシテ、
其弟賴澄等、主從十二人自害シテ死失ケリ、
三日、亥、癸大神宮祭主藤波伊忠、竝ニ三寶院持嚴等ヲシテ、火災ヲ祈禳セシ
メラル、

〔壬生家四卷之日記〕一

〔下請
符集〕

火災御祈事、一七ケ日殊可抽精誠之由、可被下知神宮之狀如件、

八月三日

〔正親町實胤〕
右中將判

〔小槻時元〕
四位史殿

官務下知
狀

御教書

火災御祈事、御教書如此、早可令下知給之狀如件、

八月三日

左大史判

謹上 祭主三位殿

〔藤波伊忠〕

〔下請
符集〕進上

祭主卿書狀一通

兩宮禰宜等解狀、火災御祈事、

右進上如件、

十月九日

左大史小槻時元

進上 頭中將殿

〔正親町實胤〕

〔東寺文書〕○甲號外二
山城外二

火災御祈事、一七ケ日、殊可被抽精誠之由、天氣所候也、仍言上如件、秀房誠恐
謹言、

〔附錄〕
永正六年

八月四日

右少辨秀房

謹上 三寶院僧正御房

〔時元〕

〔續史愚抄〕

四十四
後柏原院中

八月三日、癸亥、被仰火災御祈於諸社寺、
七社七寺
歟、高知火

故、奉行藏人右小辨秀房、
時元記、東
大寺文書

永正六年八月三日

九〇三

永正六年八月六日

九〇四

幕府、大内義興ヲシテ、梨子羽元春ニ、安藝梨子羽郷地頭公文兩職、同國安直本郷ノ内時弘名、竝ニ北城新田眞良貳分方等ヲ渡付セシム、

〔小早川家證文〕七

小早川梨子羽左京亮元春申、安藝國梨子羽郷地頭、公文兩職、同國安直本郷内時弘名、并北城新田眞良貳分方吉野六郎等事、任當知行旨、被成奉書畢、早速可渡付彼代官之段、可被相觸之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正六年八月三日

(飯尾之秀)
下野守(花押)
(遊佐貞兼)
左衛門尉(花押)

大内左京大夫殿(義興)
書異事ナシ
小早川家什

六日、丙寅、吉田兼將ノ六位藏人ヲ辭セントスルニ依リ、其可否ヲ三條西實隆ニ諮問アラセラル、

〔實隆公記〕四十

一 八月六日、丙寅、陰、自午雨降風吹、略

兼將六位侍中辭退事申之、此儀如何之由有勅問、暫後進□現之間、可相待之由、仰可然之由申入了、

吉田兼將
正親町實隆
胤ニ兼將
ノ辭退ヲ
申出ツ

卜部兼將侍中謙退事、至元弘建武、帶列朝恩地之間、兩人兼好相並召進候、

朝用懈怠
スノ爲メ辭

近代神領外無立錐地候、奉行神社事、一條院御宇、以十八社被宛行神道大業之賞候、是又莫非朝恩候、雖然勳業之列相傳候歟、神領等近年當知行分、九牛一毛候、自故兼致朝臣、今至兼將、經歷三朝侍中候、別忠過隨分候哉、就此儀名利之失墜重疊、只今言上儀無殊事候、乍居當職、朝用懈怠不可然候間、令固辭候、被思召分候様、宜預計御披露候哉、恐々謹言、

八月四日

兼俱

頭中將殿

兼俱書狀

十一月廿四日、壬午、天晴、略、中略、三條西公條奏慶ノコトニカ、ル、四年四月二十六日ノ條ニ收ム、
略上 兼亦侍中謙退事、再往被仰下候て、至來春先可存知分候、此等趣内々被得其意、可令披露給候哉、恐々謹言、

十一月廿四日

兼俱

七日、丁卯、參議烏丸冬光ヲ、正四位下ニ敘ス、

〔公卿補任〕四十

參議從四位上藤冬光(冬光)、廿七、八月七日敘正四位下、

〔宗綱公記〕宣下

永正六年八月七日 宣旨

永正六年八月七日

九〇五

宣旨

永正六年八月十二日

從四位上藤原冬光朝臣

宜敍正四位下、

藏人頭右近衛權中將藤原實胤奉

口宣一紙獻上之早可令下知給之狀如件、

八月七日

右中將實胤奉

進上 中御門新大納言殿

口宣一枚 從四位上藤原冬光朝臣
宜敍上四位下事、

右任職事仰詞早可令下知給之狀如件、

八月七日

權大納言宗綱奉

大內記局

〔諸家傳〕

六下 鳥丸 冬光 同六年八月七日正四位下、

十二日、壬貞敦親王、二條西實隆ヲ召シテ、伊勢物語ヲ讀マシメラル、

〔實隆公記〕

一四一 八月十二日、壬申、天晴、○中

聽衆

午時參伏見殿、伊勢物語讀申之、廿段讀之事了有小盃酌、

十七日、丁丑、○中

午時參伏見殿、伊勢物語讀申之、中御門黃門、宣秀禪耀法印、中山康親頭中將等外人濟々焉、頗令迷惑者也、事了、賜御盃歸宅、

十九日、己卯、小雨、○中

午後參伏見殿、伊勢物語讀申之、

廿三日、癸未、雨時々降、○中

午時參竹園伊勢物語讀申、今日終功、以上四ヶ度也、無爲結願自愛也、聽徒歷々也、有一盞事退歸、

廿四日、甲申、霽、○中

自中書王有御消息、伊勢物語事御悅喜由也、

十三日、癸主殿頭壬生于恆ヲシテ、主殿寮領山城小野山供御人等二、恆例臨時公事竝ニ火炬作事ヲ沙汰セシメ、武人ノ被官ト爲ルヲ禁ゼシム、

〔元長卿記〕

一 勅裁案

當寮領小野山供御人等、禁中恆例臨時公事并俄火炬作事每度無沙汰、爲年

永正六年八月十三日

九〇七

奉書

功終
聽衆歷々

八〇六

在京人數
ヲ定メ置
キテ勤仕
セシムベ
シ

永正六年八月十三日

預致補沙汰云々、太不可然、所詮自今日後、(已下同シ)定置在京之人數、可令勤仕其役、若猶及致緩怠者、可被處罪科之由、可被加下知之狀如件、

永正六年八月十三日

左少辨判(甘藷寺伊長)

主殿頭殿々(主殿)○主殿察領雜
異事ナシ、

當寮領小野山供御人等、恆例臨時之松明一向致闕如云々、言語道斷次第也、向後速可致其沙汰、若猶及令遲怠者、可被處罪科之由、可被加下知之狀如件、

永正六年八月十三日

左少辨判○宛名
闕ク、

年預ノ下
ズ知ニ應セ

永正六年八月十三日

主殿頭殿

左少辨判

當寮領小野山供御人等、致武家之家禮事、堅禁制之處、近來恣爲武士被官、剩田畠并山尾等人々沾脚、不應年預下知之、(大)大無謂、於向後者可令停止、若猶有異犯之輩者、速可注申交名、可被處罪科由、可被下知之狀如件、

德分有名
無實ナレ
ハ在京叶
ヒ難シ

當寮領小野山年預兩官人申、近年有限德分一向有名無實之間、在京難叶云々、於事實者太不可然、所詮自今日後、年貢諸公事物等、可致嚴密之沙汰、若猶至令無沙汰者、供御人等可被處罪科之由、可被加下知(賦行)之狀如件、

永正六年八月十三日

左少辨

主殿頭殿

(方)賦行之一通、清主之一
通依文章同符案如此

年預職請
文

請文

〔主殿寮領雜々〕

○三 宮内省圖書寮本

當寮領小野山年預職御補任頂戴、目出度令存候、仍寮頭恆例臨時之公夏課役等、如先規沙汰可申候、万一背此旨申者、可及異御沙汰者也、仍爲後證、請文(代々爲寮頭被定處)今度之儀、依無案內、直ニ申口宣給候、次名字事子孫儀更以不可有其儀候、之狀如件、

永正六年八月八日廿八

清方

年預職制
札案文

(補任)補任之次、制札ヲ書來乞判、即加筆遣之、
制札案文永正六八月廿八日

禁制

永正六年八月十三日

永正六年八月十五日 十六日

九一〇

- 一 供御人等武家被官停止之事
- 一 恆例臨時公事火炬師役事
- 一 松明闕如之事
- 一 諸關并諸商賣課役免除事
- 一 一年預德分無沙汰事
- 右條々、堅停止了云々、
- 云々

永正六年八月廿八日

十五日、乙亥當座和歌御會、

〔實隆公記〕一四十一 八月十五日、乙亥陰雨時々濺、○中

今日桃花坊詩懷紙、竹園詩（邦高親王）哥短冊等詠遣之、又自禁裏被下五首題、詠進了、相公羽林入夜參内之次、付進上之、

今夜當座各詠進、御一座相公讀申云々、相公候若宮御方云々、
明月祝著之儀如例、

十六日、丙子女官等、酒饌ヲ獻ス、

題五首

〔實隆公記〕

一四十二 八月十六日、丙子陰、○中

今日上臈以下女中被獻御盃、可參之由、内々雖有告、申故障之由了、

○コノ後、女官等、酒饌ヲ獻ズルコト、便宜左ニ合致ス、

〔實隆公記〕

一四十三 九月十日、己巳、天晴、○中

今日女中被進御盃云々、仍相公有召參入、深更退出、

十七日、丁丑義尹、廷臣、諸將ヲ招キ、宴ヲ張ル、

〔實隆公記〕

一四十四 八月十七日、丁丑霽、○中

及晩色阿野相公（季綱）送使者云、今日御樽等進上之處、有一獻事、俄參仕之條頗聊爾歟、如何躰（季綱）とも、只今程參上可喜思食之由上意也、自殿中俄申者也、與送之由、使者申之間、則不及催僮僕參入、一獻最中也、飛鳥井中納言、阿野宰相中將（季綱）、兩人候御前御請伴也、其外伯少將（白川雅家）、兵衛佐藤侍從等候之、右馬頭、伊勢備中等（貞隆）、其外御供衆、近習之衆也、參入之後四獻歟、月出尤有興、陰雲令散者、可有興之由上意之處、果而清光出現、有御發句、

△ちまちに雲吹いらふ嵐哉

予就只今之上意、言上之由申之、

永正六年八月十七日

九一一

阿野季綱
義尹ニ樽
ヲ贈ル
義尹三條
西實隆ヲ
招ク
參會ノ人
々々

發句義尹

第二實隆

永正六年八月十九日

九二二

空もこと葉の露をうけり

第三雅俊卿申之

秋の野と千草之花をあらわして

阿野御酌之時賜御盃、進上御太刀、又被下御太刀、備中被進上者也、予其後參進賜之了、參入之後第二度御盃、依再往之仰、予始之事了退出、于時亥下刻也、十八日、戊寅晴、略○中

昨夜之儀、以書狀申遣阿野許、

十九日、己卯、小雨、略○中

抑早朝自室町殿爲御使歲阿來、昨日一向不申一昨夜之儀之條、御不審也、此儀阿野遲披露之間、御戲言如此云々、夜前月清明、近來之事也、漸冷ク成ヘシ、月モ名殘惜思食之由被仰下之、昨日以書狀申阿野之處、不披露哉、迷惑之趣申之、夜前月誠近來殊勝由申之、則遣書狀於阿野之間、夜前詠吟之愚歌書付之處、御詠御短冊阿野相公持來之、殊勝無極之由申之了、

十九日、己卯中條藤資、黑川盛實二、越後高野郷等ノ地ヲ還付ス、

〔讀史堂古文書〕

○伊佐早謙氏所藏

義尹詠ズ
ル所ノ短
冊ヲ實隆
ニ贈ル

(越後北蒲原郡)
高野之郷並落合分進之候、於于已後御餘儀候者、可申違篇候、諸篇共可被仰合候事肝要候也、仍如件、

永正六年八月十九日

(中條)
藤資 花押

(盛實)
黑川殿

高野郷並落合分返給候處、御尊札於以後存餘儀者、可有違候、万端可申合事簡要候也、

永正六年八月十九日

(藤資)
藤資 花押

中條殿

○藤資ノ父定資、黑川頼實ト地ヲ争ヒ、上杉房定ニ訴フルコト、長享元年四月三日ノ條ニ見ユ、

二十二日、壬午京都六角堂頂法寺鐘ヲ鑄造ス、

〔實隆公記〕

四十 二月四日、丙寅晴、略○中

六角堂勸進帳清書事、數番今日到來、

十四日、丙子、略○中

永正六年八月二十二日

九一三

三條西實
隆任藝ノ
請進帳ナ
勸進スチ
清書スチ
任藝實隆
ニ謝ス

永正六年八月二十四日

及晚六角堂鐘勸進帳任藝之清書之、

廿一日、癸未、餘寒甚雪散、略

任藝來、六角堂鐘勸進帳清書事謝之、數刻雜談、

〔實隆公記〕四十 八月廿二日、壬午晴、略

今日六角堂鑄鐘云々、

二十四日、甲申和漢聯句御會、

〔實隆公記〕四十 八月廿四日、甲申、霽、

禁裏御聯句云々、相公參入、入夜退出、

幕府、細川高國ヲシテ、波々伯部因幡守名關ノ、東寺八幡宮領山城上久世莊

公文職ノ内本所分ヲ押領スルヲ停メ、之ヲ同寺ニ渡付セシム、

〔東寺百合文書〕カ一之十一

〔備考〕 上書云、右京兆代 對馬守英致

東寺八幡宮領城州上久世庄公文職之内本所〔分カ〕事、近年波々伯部因幡守押領之間、神役以下退轉云々、太不可然、不日去渡寺家雜掌、可遂神事法會等節之段、堅可被加下知之由、所被仰下也、仍執達如件、

神事法會
ヲ遂ゲシム

永正六年八月廿四日

〔松田英致〕 對馬守 判

〔藤原基雄〕 美濃守 判

〔細川高國〕 右京兆代

但馬守護山名致豐、同國楞嚴寺ヲシテ、二方莊代官某ノ、同寺々中門前ヲ違亂スルヲ停止セシム、

〔楞嚴寺文書〕馬〇但

〔備考〕 楞嚴寺

致豐

二方庄代官於寺中門前、毎々入手違亂之由候、言語道斷曲事候、當家之祈願寺、殊大明寺殿御寄進之地候上者、如先々可有停止候、以猶於無承引者、一段可申付候、其外自餘之狼藉人等之事、同前候、恐々謹言、

〔追記〕 永正己巳歲

八月廿四日

〔山名〕 致豐(花押)

楞嚴寺

二十五日、乙酉薩摩福昌寺宗津天祐ニ、佛智法燈禪師ノ號ヲ賜フ、尋テ、同龍雲寺良從室龍ニ、大通德光禪師ノ號ヲ賜フ、

永正六年八月二十五日

九一五

山名氏祈
願寺

九一四

永正六年八月二十五日

〔宗綱公記〕

宣下案

永正六年八月廿五日

宣旨

天祐和尙

宜特賜佛智法燈禪師號、

藏人頭左近衛權中將藤原康親 奉

口宣一枚獻上之、早可令下知給之狀如件、

八月廿五日

左中將康親 奉

進上 中御門新大納言殿

禮錢二百疋

口宣一枚

天祐和尙

禮錢二百疋

宜特賜佛智法燈禪師號事

右任職事仰詞、早可被下知之狀如件、

八月廿五日

權大納言宗綱 奉

大內記局

永正六年二月五日

宣旨

龍室和尙

宜特賜大通德光禪師號、

藏人頭左近衛權中將藤原康親 奉

口宣一枚獻上之、早可令下知給之狀如件、

二月五日

左中將康親 奉

進上 中御門新大納言殿

禮錢百疋

口宣一枚

龍室和尙 追號

禮百疋

宜特賜大通德光禪師號事、

右職事仰詞、內々奉入如件、

永正六年八月二十五日

良從ノ禪
師號宣旨
二月二十
五日勅許

永正六年八月二十五日

二月五日

大内記局

權大納言宗綱

九一八

〔諸宗勅號錄〕

宗津ノ勅

佛智法照禪師 諱宗津 特賜 薩州福昌寺

勅精藍地古前樓後閣擊傑雄法林日新左山右水起派脈宗津和尚奕檀度
恕翁之葉透石屋嫡祖之機昔舉丹陽之路難未忘鳳生之露宿今卜錦里之
勝槩況存龍室之風規晝誦夜禪省脅尊者識量道陶德治發光法師煉修名
躍西州譽達北闕特賜佛智法照禪師

永正六年八月廿五日

上卿權大納言宗綱卿

職事頭中將康親朝臣

良從ノ勅

大通德光禪師 諱良從 特賜 薩州龍雲寺

勅山起神龍見瑞雲之常集寺出僧鳳感清時之無私良從和尚藉教提宗吐
言中矩道根久固累石屋五世孫惠灯益明會守琮單傳旨水之黃河峯之太

華克極其深高東有啓明西有長庚共仰這光氣譽協衆望賞以奎章特賜大
通德光禪師

永正六年二月五日

又上卿職衰不見

〔實隆公記〕

一四一 八月廿三日癸未雨時々降

頭中將大内記等來薩摩國鹿兒嶋僧曹洞宗特賜號事兩人兄弟同時申請之同
時之條過分歟可爲如何哉之由勅定也愚意如何之由内々頭羽林談之太不
可然之由存之趣答了

〔拾芥記〕

中 八月廿五日薩摩福王寺申禪師號勅許今一人者龍雲寺住持

雖申禪師號就兩人過分福生寺許御免也勅書遣之祿物如本式二十五貫沙
汰之天祐宗律特賜佛智法照禪師

後八月廿四日龍雲寺禪師號勅許當年二月廿五日被申分也勅書今日遣之
祿物十五貫減少分也

廿五日就今度禪師號禁裏へ御極三荷御肴三色進上之宮御方へ一荷二色
長橋へ一桶

廿七日雨降就禪師號祿物振舞公家衆少々晚飯賞之

永正六年八月二十五日

九一九

兩人同時
賜號二就
實隆二諸
法ノ兄弟
同時賜號
ハ然ルベ
カラズベ
宗津禪師
號勅許
祿物二十
五貫文
良從禪師
號勅許
祿物十五
貫文
禁裏宮御
方へ樽肴
獻上

永正六年八月二十五日

九二〇

〔薩藩舊記〕

前集三十一 福昌寺文書

欽呈上嗣承字天祐諱宗津、洞山二十七葉

嗣前福昌龍室從、々嗣泰雲琮、々嗣心嚴信、々嗣中翁邦、々嗣大寧、竹居猷、々嗣福昌開山石屋梁

島津元久
福昌寺
祖開山
梁建シ
トス

南禪寺
雲院祖
歸事ス

印證ヲ良
從ニ受ク

元久ノ百
年忌ニ兩
人ノ禪師
號ヲ賜フ

薩州鹿兒島郡玉龍山福昌禪寺、廼藤氏島津惣翁忠公爲檀度而創建之精廬也。蘭慕石屋之法道、推之爲之開山祖、而堂宇具體、崇師之道化、猶一活佛、祖塋號智日、其院號惠燈、院之左邊、有座禪石瀑布觸之、則四時吹雪也。臣僧天祐、見住于茲矣。又以興國、大清、宣德之三精舍、爲之兼住、臣僧十七歲、僑居于南禪內歸雲院南院、國師塔下、閱螢雪之勤、泊乎有日、二十歲、求過商量、扣箕外禪於紀州鳳生寺、而露宿嵐殮、尙要遍參、攀通幻風於丹陽永澤嶮、而霜若雪煎、終因爲藤氏季族、後歸薩之錦里、登親近於祖翁泰雲、雖觸玄機、受印證乎今龍室師、々事之、自爾以降、寅脯之候、軀無離衣、晝誦夜禪、脇弗潤席、且夫冀匡徒扶起宗也已矣。抑亦從龍室翁、厥行李底、不遑呈記之、早歲遍歷九州中國、勘破佛法羸細、然後長養有季矣。但族之其姓不同系、而嗣法於泰雲琮者也。餘不異錄于前、於是今茲種八月、當檀越惣翁一百遠諱、仍吾山徒弟胥議曰、偶際此辰、忝蒙兩翁之徽號、永欲爲祖門光耀云爾矣。龍雲寺即龍室見住也。欽需誠懼、誠惶頓首、々々、永正第六八月日、

〔參考〕

〔和漢三才圖會〕

八十 薩摩

玉龍山福昌寺 禪宗 寺領千石

大守島津氏建立、開山鎮梁石屋禪師、後小松院朝應永元年草創、

幕府、山城聞名寺ノ、同寺修造勸進猿樂ヲ張行スルヲ停止セシム、

〔實隆公記〕

四十

八月廿五日、乙酉、雨降、暴風、○中

冷泉宰相來、聞名寺時宗道場、勘解、爲修造、勸進猿樂事張行、内々伺申入武家之處、禁裏御近所不可然之由被仰、此事已相企難治也、禁裏御儀聊可申試之由、阿野青侍玉村申之由演說之間、然者彼寺之申狀可調給、内々可申入之由報之處、則持來、仍以書狀申勾當内侍之處、此事新大典侍内々被相尋阿野事也、但只今予所申入之儀、明日季綱朝臣候番者、可被仰合之由也、

○本條ノコト、顛末詳ナラズト雖モ、姑ク茲ニ掲書ス、

二十六日、丙戌、内侍所供御人家久姓關、二、舊ニ仍リ、諸役ヲ免除シ、又惣座頭ト爲シ、神役ヲ勤メシム、

〔元長卿記〕

勅裁

永正六年八月二十六日

九二一

福昌寺

禁裏ニ近
キニ依ル
禁裏ノ御
都合ヲ伺
ハントス